



児島宗説『痧脹晰義』翻字・全訳註

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 早紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004287

児島宗説『痧脹晰義』 翻字・全訳註

池内 早紀子

はじめに

一九七六年に、初めて漢方製剤が薬価基準¹に収載されて以来、医療機関で「漢方薬」が保険適応をうけて処方される様になった。一般的に「漢方薬」は、効き目が穏やかで、副作用が少ないと思われており、「漢方薬」イコール「漢方」²と受け止められている様だ。

そもそもわが国の医学は、古来、中国医学を受容し続けてきた。「漢方」と言う医学は、起源を中国伝統医療とし、主に江戸期に発展したもので、西洋医学である「蘭方」と対比してそう呼ばれた。つまり「漢方」とは、「蘭方」と同様、(処方)薬剤を服薬するだけではなく外科的処置(方法)も含めた「漢法」医学なのである。

館野正美は、医学思想の立場から中国医学と日本漢方を論じた彼の著『中国医学と日本漢方』の中で、日本漢方を代表して、吉益東

洞³と中神琴溪⁴の二人を取り上げる。中神琴溪は、富士川游『日本医学史』では、古医方に分類、「門下ノ籍ニ名ヲ列スルモノ一時三千人ノ多キニ及ブ」とあり、大きな影響力を持っていたことが知られる。琴溪は『生々堂雜記』で、「吾門ハ、然ラズ。自ラ君ノ位ニ

³ 吉益東洞。(一七〇二—一七七三年)『国史大辞典』に、「江戸時代中期の医師：独学で中国の諸医書を読破したが、その空理空論を批判し、張仲景の医方のみが信頼に値するものと断じて『傷寒論』の研究に傾倒した。東洞の独創的医論「万病一毒説」は享保十六年(一七三二)ころの発案になるとされる。：古方派の巨頭として後世に大きな影響を及ぼした。：著書に門人の編になるものも含め『類聚方』『薬徴』『方機』『方極』『医事或問』『古書医言』『東洞先生遺稿』『医方分量考』『丸散方』『医断』『建殊録』などがある。」

¹ 薬価基準。『大辞林 第三版』、「医療保険の対象となる医薬品の基準価格。厚生労働省が決定」。『日本国語大辞典』、「医薬品を健康保険を使って患者に投与するときの値段」。

² 漢方。『日本国語大辞典』、「中国から伝わってわが国で独自の発展をとげた医療。西洋医学に対していう。漢方医学。」

⁴ 中神琴溪(一七四四—一八三三年)。「国史大辞典」に、「江戸時代後期の医者。名は孚、字は以隣、通称右内、琴溪はその号、別号は生々堂。：大津長等山の麓に住し、宿場女郎の梅毒治療に腕をふるい、寛政三年(一七九二)には京都堺町四条に開業して繁昌し、門人三千人を輩出したという。：著書に『生々堂養生論』『生々堂傷寒約言』『生々堂医話』、門弟の筆録として『生々堂医譚』『生々堂雜話』ほかがある。」

居テ古今和漢ノ豪傑共ヲ臣トシテ使フナリ。發表ニ長ゼル仲景ヲ發汗ノ所ニ使ヒ吐法ニ長ゼル張子和ヲ吐劑ノ所ニ使ヒ下ニ長ゼル呉有(又)可ヲ下劑ノ所ニ使ヒ出血ニ長セル郭右陶ヲ刺絡ノ所ニ使フ。(私の一門は、他と同じようにはしない。君主の立場で、古今和漢の優れた者を臣下として使う。発散させるのに優れている張仲景の方法を發汗させる場合に用い、吐かせるのに優れている張子和の方法を吐劑を用いる場合に使い、瀉下をさせるのに優れている呉又可の方法を下劑を用いる場合に使い、出血をさせるのに優れている郭右陶の方法を刺絡する場合に用いる)と言う。この言より、中国医学の様々な方法を受容する中で、「出血ニ長セル郭右陶ヲ刺絡ノ所ニ使フ。」とあるように、『痧脹玉衡書』を著した郭志遠(右陶)の「刺絡」という外科的処置も重要視していたことが見て取れる。

ここで取り上げる『痧脹晰義』は、二〇一五年に新たに発見された抄本である。『痧脹玉衡書』に触発され書かれた刺絡の専門書で、前編・後編より構成され、治験例なども載せる。江戸期の漢法を知る貴重な書であると思われる。さらに朱子学を重んじた会津藩の藩校で教授を務めた児島宗説の著である。中神琴溪が、市井の臨床医であつたのとは対照的である。この点も注目すべきことであろう。そこで、この書『痧脹晰義』の翻字・全訳註を試みる。その後、この書と著者「児島宗説」の解説を試みたい。

⁵ 長野仁、「新出の刺絡専門書『痧脹晰義』について」、『日本醫史學雜誌』、第六二卷第二号、日本医史学会、二〇一六年、一五一頁。

『痧脹晰義』翻字・全訳註

凡例

- 一 この書は『痧脹晰義』(さちようせきぎ) ⁶ である。
 - 一 今回翻字⁷したのは、長野仁氏所蔵の筆写本である。
 - 一 表紙に外題が有り、見返しと次頁の本紙第一丁オモテに、目録と引書が有る。本文は、本紙第一丁ウラより始まる。
 - 一 目録と引書中の漢字は正字とした。
 - 一 本文については、原文、読み下し、口語訳の順に記載した。
 - 一 原文中、虫食いなどにより欠字となっている箇所は□で、補った字は「」内に示した。
 - 一 (一) は、割り注を示す。
 - 一 読み下しは、漢字は正字とし、仮名は金谷治訳註『論語』岩波文庫の体裁に従い、送り仮名も含め現代仮名遣いに改めた。重複記号(おどり字)を平仮名に、「」は「こと」に、「匠」は「とも」に、「メ」は「して」にそれぞれ改めた。また、読みやすさを考慮し
- ⁶ 二〇一六年九月刺絡講習会(大阪)の講演の資料として長野氏より『痧脹晰義』の白黒複写本を拝受した。翻字・全訳註の「許可を頂き今回この複写本を使用している。
- ⁷ 堀川貴司、『書誌学入門』、勉誠出版、二〇一一年、「翻刻のルール」などを、参考とした。

て、仮名に漢字のルビを振り、濁点・句読点を加えた。ただし、池内が、新たに加えた振り仮名（読み仮名）は○でくくった。また読みに誤解が生じないために適宜、捨て仮名を用い、送り仮名を付け加えた。

- 一 文中の「」及び（）は、池内による注である。
- 一 図は原図を元にして作成した。
- 一 注に添える図は、巻末図として纏めて訳註の最後に載せる。
- 一 医学関係引書の書誌などは、以下の文献等を参考とした。松岡榮志監修、関久美子ほか中国医学文献研究会編訳、『中国医学史レファレンス辞典』、白帝社、二〇一一年。王瑞祥主編、『中国古医籍書目提要』、中医古籍出版社、二〇〇九年。丹波元胤著、郭秀梅、岡田研吉校釋、『医籍考』、学苑出版社、二〇〇七年。岡西爲人著、小梅、岡田研吉整理、『宋以前医籍考』、学苑出版社、二〇一〇年。小曾戸洋、『日本漢方典籍辞典』、大修館書店、一九九九年。富士川游、『日本医学史』、眞理社、一九五二年。
- 一 医学用語の解説については、以下の文献等を参考とした。創医学会術部、『漢方用語大辞典（第九版）』、療原、二〇〇一年。李経緯等主編、『簡明中医辞典（修訂本）』、中国中医薬出版、二〇〇一年。李経緯等主編、『中医大辞典（第二版）』、人民衛生出版社、二〇〇四年。

〔表紙〕

（外題）

痧脹晰義

全

〔見返〕。

痧脹晰義初編目録

痧論

刮痧法 烙法

放痧法

痧脹晰義後編

後論

治驗

入方

幼々集成神火治。

夏禹鑄臍風火法¹。

⁸ 表紙に外題があり、表紙ウラである見返と次頁の本紙第一丁オモテに目録、引書がある。

⁹ 幼々集成神火治。目録にはあるが、本文にその記載は無い。陳復正、『幼幼集成』、一七五〇年、卷一、臍風論証に「集成神火図」（巻末図2、3参照）と「集成神火歌」がある。これについて述べる予定だったと思われる。

¹。夏禹鑄臍風火法。本文にその記載は無い。前出書『幼幼集成』、卷一、臍風論証、切忌火者に「夏禹鑄曰：」の記載と、夏禹鑄臍風火図（巻末図4参照）がある。これらについて述べる予定だったと思われる。

引書

痧脹玉衡 清¹郭右陶²春秋左氏傳¹³ 毛詩¹⁴太平後記¹⁷¹⁸内經¹⁹千金方²⁰病源候論²¹

「本紙第一丁オモテ」

玄中記¹⁵ 洪範五行口「傳」¹⁶

11 清。「朝代名。一六一六年〜一九一二年。」

12 『痧脹玉衡』清郭右陶。清の郭志遠（かく・しすい）、一六七五年撰。上巻は痧脹の啓蒙論、痧脹に関する重要語、痧脹の脉法を列記。中巻と下巻は、実際の治療例を交えながら各種痧症について述べ、巻末に備用用法を附す。後、後巻一卷を著して、痧症の診療に関する内容を補足。郭志遠は、一七世紀中葉、清の医学者。字は右陶。橋李（浙江省嘉興市の西南）の人。

13 『春秋左氏伝』。『春秋』伝孔子撰。「五経」の一。隠公元年、哀公一四年までの二四二年間の歴史を編年体で記す。魯国公室の史官の記録。『公羊伝』『穀梁伝』『左氏伝』の三伝のうちの一つ。

14 『毛詩』。五経の一。一般に『詩経』と言う。西周から春秋までの歌謡三〇五篇を集めた経典。

15 『玄中記』。撰人不明。『郭氏玄中記』とも、早く滅んだらしい。魯迅の『古小説鈞沈』が七十一條を収集する。宋の羅泌の『路史』

（發揮二）は郭璞の撰とする。参見、『中国小説十八史略』。『太平広記』に五篇を引き、『說郛』に引かれる。

16 『洪範五行伝』漢、成帝の時代（紀元前三三〜一七）に、『書経』洪範篇の休徴と咎徴の「応」を読んだ劉向が、上古以来、春秋、六国（戦国）を歴て秦漢に至るまでの符瑞災異の記を集合し、行事（過去の具体的事実）を推し跡づけ、禍福を連ね伝（解釈）し、其の占驗を著わしたとする。

17 太平後記は、『太平広記』の誤り、以下同様。

18 『太平広記』五〇〇巻。北宋・李昉等奉勅撰。九七八年「太平興国三」成る。北宋初期官撰の「宋朝四大部書」の一つ。漢より宋初に至る、主として野史、伝記、小説の類から記事を収集し、それを内容別に分類した書。

19 『内経』。『黄帝内経素問』、『黄帝内経靈枢』の二種の書を示す。略称は『内経』。黄帝や岐伯等の問答という形式で書かれた、現存する中国最古の医学書で、戦国時代に成立。原書は一八巻。すなわち『素問』と『針経』（唐以降の伝本は『靈枢』に改名）各九巻である。内容は医学理論を主とし、針灸や方薬による治療についても言及。中医の基礎理論・弁証論治の規則・病証など、多方面にわたる内容を論じ、中国医学理論の基礎を固めた。

肘後方^{2.2}医説^{2.3}得效方^{2.4}萬病回春^{2.5}

^{2.0} 『千金方』。『備急千金要方』と『千金翼方』を合わせて呼ぶ。

『千金要方』とも。唐の孫思邈（そんしぱく）、七世紀中期撰。『内

経』から唐代初期までの医学的成果を系統立ててまとめている。『千

金翼方』三〇巻。孫思邈、六八二年頃撰。『備急千金要方』を補

うために編集したもの。薬録纂要、本草、婦人、傷寒病、小児、養

生、辟穀等、中風、雜病、其他に、針灸、禁経（祝由科）を載せる。

^{2.1} 『病源候論』。『諸病源候論』別名は『諸病源候総論』『巢氏病

源』。五〇巻。隋の巢元方（そうげんほう）等、六一〇年撰。中国

で現存する最古の、病因と証候学を論じた専門書とされる。

^{2.2} 『肘後方』。『肘後備急方』。八巻。晋の葛洪（かつこう）撰。

三世紀頃の成立。主に、各種の急性病症あるいは慢性病の急性発作

の治療方薬、針灸、外科治療などの法について述べる。中国の晋以

前の民間療法の結果も反映する。

^{2.3} 『医説』。一〇巻。末の張杲（ちようこう）撰、一二二四年刊。

南宋以前の文学、歴史の各著作から医学に関する典故や伝説などの

史料を広く集めたもの。

^{2.4} 『得效方』は、『世医得效方』。一九巻。元の危亦林（きえきりん）

撰。一三四五年刊。五代にわたる家伝の医方にもとづいて編集

したもの。多くは自らの経験し実用した方法にもとづいている。

医学正傳^{2.6}赤水玄珠^{2.7}

^{2.5} 『万病回春』。総合医学書。八巻。明の龔廷賢（きやうていけん）、

一五八七年撰。治療方法、方剤に関する記述は非常に細かく、後世

に与えた影響は大きい。龔廷賢は、（一六世紀）明の医学者。字は

子才、号は雲林。江西金溪の人。代々医師の家。父、龔信は太医院

に勤務。

^{2.6} 『医学正伝』。総合医学書。八巻。明の虞搏（ぐたん）、一五一

五年撰。冒頭の「医学或問」五一条は、虞氏が医学上のいくつかの

問題を分析したもので、凡例で先人の「言は意を尽さざるの義」と

述べる。次いで臨床各科の一般的な病証について述べる。各証をそ

れぞれ一門とし、各門は論証・脈法・方治の順に配列。同書の諸証

は、その総論は『内経』の要旨を大綱とし、証治は朱丹溪の學術経

験を拠り所とする。また、脈法は『脈経』から引用し、傷寒は張仲

景、内傷は李杲、小児病は錢乙、をそれぞれ範とする。著者は諸家

の学説を広く参考にし、家伝および自身の學術経験もあわせて論じ

る。また、呪禁や巫術、運氣による病期・病症・治法の推定などに

対し、一律に批判的な態度をとっている。

^{2.7} 『赤水玄珠』。総合医学書。『赤水玄珠全集』所収の一書。明の

孫一奎（そんいつけい）撰、一五八四年刊。風門・瘟疫門・火熱門

など七〇余門に分け、各門をさらに病症ごとに分類。内容には、内、

外、婦人、小児各科疾病の弁証治療が含まれる。各証ごとに『内経』

や各家の学説を引き、自身の医療経験も絡めてその病因、病証、処

方について述べる。諸家の治験等も併録。叢書としての、『赤水玄

珠全集』を指す場合もある。

証治準繩^{2, 8}類經^{2, 9}十四經發揮^{3, 0}医学入門^{3, 1}医学綱目^{3, 2}医方考^{3, 3}

^{2, 8} 『証治準繩』。叢書名。『六科証治準繩』とも。明の王肯堂(おうこうどう)撰。一六〇二年刊。臨床各科の証治の詳述を主とし、『雜病証治準繩』八卷、『雜病証治類方』八卷、『傷寒証治準繩』八卷、『瘍医証治準繩』六卷、『幼科証治準繩』九卷、『女科証治準繩』五卷を収める。論及する科目や病種は広く、病証ごとにまず明以前の歴代医師の治験を述べ、その後自身の見解を詳述。病証や脈象の異同を判別し、証によって治療を論じ、治療法を定め処方する。収録した資料は豊富。

^{2, 9} 『類經』。三三卷。明の張介賓(ちようかいひん)撰、一六二四年刊。『黄帝内経』中の『素問』と『靈枢』二書の内容を新たに整理、類別し、改編したもの。摂生、陰陽、藏象、脈色、経絡、標本、気味、論治、疾病、針刺、運氣、会通の一二類に分け、各類をさらにいくつかの小類に分けて文を付す。内容が類別されていることから、『類經』という。『内経』の原文について広く深く研究解釈がなされており、『内経』の学習や研究の重要な参考書となる。

^{3, 0} 『十四経發揮』。経脈学の書。三卷。元の滑寿(かつじゆ)撰、一三四年刊。卷上は手足陰陽流注篇で、経脈循行の規律をまとめ、卷中は十四経脈氣所發篇で、『金蘭循経』などにもとづき、全身の十四経脈循行に関する語句について詳細な注釈や解説を加え、各経脈に属す経穴を補足し説明。卷下は奇経八脈篇で、奇経八脈の循行の内容を論じる。明代に『薛氏医案』叢書に収められた。

^{3, 1} 『医学入門』。総合医学書。明の李梴(りてん・漢字の音読みとしては、りてい)編撰、一五七五年刊。『医経小学』を底本とし、諸家の学説を参考に分類編纂したもの。内容には医学略論、医家略伝、経穴図説、経絡、臟腑、診法、針灸、本草、外感病、内傷病、内科雜病、婦人病、小児病、外科病、各科の用薬および救急方などが含まれる。本文は歌賦の形式で、注をつけてこれを補足説明する。各家の学説を引くほか、自身の見解も述べており、影響力のある医学入門書。「医は儒より出ず」を強調するあまり、医学を学ぶ前に儒学の理論に通じていなければならないとする。李梴は、一六世紀、明の医学者。字は健齋、南豊(江西省南豊県)の人。

^{3, 2} 『医学綱目』。楼英(ろうえい)の著。楼氏は『内経』など古典医学の理論を遵守し、「千変万化の病態」は、陰陽五行と切り離して考えることはできないとした。本書は大部な医学全書のため、明代に二回、民国代に一回、新中国後に一回の刊本しかない。日本には一六三九「寛永十六」年に幕府の紅葉山文庫に収められた初記録があり、のち一六五九年「万治二」と一六六二年「寛文二」に和刻本が出ている。楼英(一三二〇—一三八九年)は、明の医学者。別名は公爽、字は全善。浙江省蕭山県の人。若い頃から医学を学び、医書を広く読み、三〇年にわたって研鑽を積んだ。朱元璋の治病のために南京へ召されたこともある。

^{3, 3} 『医方考』。医方の書。四卷。明の呉崑(ごこん)撰、一五八四年刊。歴代の常用医方七〇〇余首を選録したもの。疾病ごとに中風、傷寒、感冒、暑、湿、瘟疫、大頭瘟など四四類に分類。各級の冒頭

本草綱目^{3,4}外科正宗^{3,5}医宗金鑑^{3,6}痘科鍵^{3,7}幼々集成^{3,8}

では、短い文章で選方の範疇について概説する。方剤の後には、すべて方義の解説を付す。明の方剂学の著書の中でも有名な書。

^{3,4} 『本草綱目』。本草書。五一卷。明の李時珍(りじちん)撰。一五九六年刊。作者が明以前の本草学の成果を継承・総括した上で、広く薬農、民間の医師、獵師、漁師などから学び、取材して積み重ねた大量の薬物学の知識を結合させ、各種の著作八〇〇余种を参考にし、長期間にわたる実践と研究を経て、数十年かけて編纂した薬物学の大著。巻一、二は各家の本草学序例を集録。巻三、四は証候を主とし、用いる薬物をそれぞれ述べる。巻五以降は薬物を天水類、地水類、火類、土類など六二類に分け、薬物一八九二種(うち三七四種は新增)を載せる。

^{3,5} 『外科正宗』。外科書。四卷(一二巻本もあるが、内容は同。)。明の陳実功(ちんじつこう)撰。一六一七年刊。全一五七篇。巻一は外科総論で、癰疽原委、治法、五善、七惡、調理および癰疽因など一五篇を含む。巻二、三は流注、乳癰、腸癰、痔瘡、魚口便毒、楊梅瘡などを論じた一四篇。巻四は陰瘡、傷寒発願など一一九篇。病ごとに因、証、治法を紹介するほか、作者の驗案を数多く付す。

^{3,6} 『医宗金鑑』。九〇卷、一五種。清の乾隆年間勅令により編纂した大型の医学叢書。呉謙(ごけん)主編、一七四二年刊。『内經』から清の諸家までの医書を採集し、巻首の奏疏に「門を分ちら類を

解体新書^{3,9}刺絡編^{4,0}療治茶談^{4,1}

聚め、其の馭難なるを刪り、其の精粹を采り、其の余蘊を發し、其の未だ備わらざるを補った」という。

^{3,7} 『痘科鍵』。明の朱巽(しゅそん)撰。撰年未詳。同書を編纂して痘科入門の鍵とすべく、「鍵」を書名とした。痘疹の理論、弁証、治法、予後、合併症、使用薬物および方剂などについて、詳細に論じる。

^{3,8} 『幼々集成』。小児科の書。六卷。清の陳復正(ちんふくせい)撰、一七五〇年刊。小児科学の主要な内容について整理して集録。巻一は小児賦稟、診療法、新生児疾病の予防治療など。巻二―四では小児科の多種の病証(内科の雜病および外科の瘡瘍を含む)を分けて叙述。弁証立法、正方、驗方、外治法などを付す。巻五、六は『万氏痘麻』の各種の歌賦一七〇余首を改訂し、方剂一三〇余則を付す。

^{3,9} 『解体新書』。日本における初の西洋解剖書の本格的翻訳書。杉田玄白、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周らによる。全五卷。一七七四年〔安永三〕刊。原書はドイツ、ダンチヒの医学教師クルムス J. A. Kulmus の『解剖図表』をオランダの医家デイクテンが蘭訳した『Ontleekkundige Tafelen』の一七三四年版である。

^{4,0} 『刺絡編』。荻野元凱(いちしち七一―一八〇六年)の著になる刺絡療法の説書。全一卷。一七七年〔明和八〕刊。漢文。高道昂(号は葛披)の序、元凱の識語、木村恒徳の跋がある。元凱は金沢の人

【本紙第一丁ウラ】

【原文】

痧脹晰義前篇

楊阜山人 著

で、字は子元、通称左仲、号は台州。奥村良竹に学び、京で医を開業。一七九四年「寛政六」典薬大允、一七九八年「同一〇」尚薬、河内守となる。本書は刺絡術の代表的著述。元凱の著述は多いが、彼の他に刊行された著書としては『吐法編』（一七六四年）がある。『温疫論』や腹診術にも通じ、蘭方も吸収した。

⁴¹ 『療治茶談』。津田（または田村）玄仙（一七三七—一八〇九年）の著になる医方、医論集。全九冊（もしくは一〇冊）。①一編（初編）は一七八一年「天明元」自序刊。②二編（後編）は同天明元年跋刊。③三編は一七八四年「天明四」序刊。④四編は一七九一年「寛政三」序刊。⑤四編付録『勸学治体』は天明八年（一七八八）自序刊。⑥五編は一七九五年「寛政七」刊、一八〇三年「享和三」修印。⑦六編は一八〇八年「文化五」序刊。⑧続編、三宅実之撰は一八〇〇年「寛政二二」序刊。⑨続編付録は同寛政一二年序刊。これに⑩林玄硯（謙孝）『療治茶談翼』を加えて全一〇冊とする。③—⑤には山本北山の序がある。臨床を中心としてわかりやすく和文で記された玄仙の著述集。

【痧論】⁴²

一 痧病ハモト射工ト云フ毒虫ニアタル病ノ名ニメ嶺南ニ多アル証シカルニ今清朝ニテ中土ニモ專痧病ノ説行シ常ニ有ル病トス。痧脹玉衝⁴³ヲ考ニ痧ハ小兒痧疹ノ義ニ本クトアレバ毒虫ノ所為ニテハナシ然トモ其治術ハ嶺南ノ法ニ習ヘリ。

一 痧ノ名モト病原候論千金方本山得效方肘後方医説等其他ノ諸書ニモ載テ溪「毒砂」虱水「弩射」工蛾短「狐鰻」鬚ナト云毒虫呉ヨリ東南ノ諸山縣山谷溪源アル処ノ水中ニアリ。人ヲ犯シ病シムルヲ痧病ト名ク又水毒病溪病トモ云春秋乃得之又江東江西ノ源澗ノ虫ヲ短狐溪毒ト云又射毒⁴⁴「公と旁訂あり」ト云其土人ニ非レバ傷寒トスト云射公マタ蛾ト名ク又沙虱アリ毒虵鱗甲ノ虱ト太平行記⁴⁵ニモ見タリ肘後ノ溪毒玄中記ノ水弩洪範五行傳左傳毛詩ノ蛾ミナ同種類毒

【読み下し】

⁴² 「痧論」。原文には無いが目録に随えばここに「痧論」があるべき、拠って補う。

⁴³ 衝。頭注に衝の書き込みがあり、衝と訂正されている。痧脹玉衝は『痧張玉衝』のこと。

⁴⁴ 射毒。公と旁訂がある。「射毒」は「射工」のこと。

⁴⁵ 太平行記は『太平広記』の誤り、以下同様。

痧脹晰義前篇

楊阜山人^{4.6} 著

〔痧論〕

一 痧病^{4.7}はもと「射工」と云う毒蟲にあたる^{4.8}病の名にして、嶺南^{4.9}に多くある證、しかるに今清朝にて中土^{5.0}にも専ら痧病の説行し常に有る病とす。『痧脹玉衡』を考ふるに、痧は小兒痧疹の義に本づくとなれば毒蟲の所爲にてはなし。然ども其治術は嶺南の法に習えり。

^{4.6} 楊阜。『国書人名辞典』では、「児島宗説の号」。

^{4.7} 痧病。「痧」は、『漢語大詞典』、一一四七七頁には、「一、病名。中医指霍亂、中暑等急性病。二、痧子、麻疹的俗稱。三、方言。指瘧疾。」とある。ここで言う「痧病」は、郭志遠が、『痧痧脹玉衡』の中で名付けた「痧脹」。「痧」を示している。これについては、現代医学における病名を特定するのは、難しい。

^{4.8} あたる。中る、害される。

^{4.9} 嶺南。『大漢和辞典』では、「五嶺の南の地、廣東、廣西兩廣の地」。

^{5.0} 中土。『大漢和辞典』に色々な意味があるが、「中原」とある。また「中原」は、「邊境及び蠻夷に對する語。今の河南省と山東省の西部、河北省・山西省の南部、陝西省の東部が、古の所謂中原の地」とある。

一 痧の名、もと『病原候論』^{5.1}『千金方』^{5.2}『本草』^{5.3}『得效方』

^{5.4}『肘後方』^{5.5}『醫說』^{5.6}等其他の諸書にも載りて、「溪毒」「痧

^{5.1}『病原候論』、『諸病原候論』に同じ。「自三吳已東及南、諸山郡山泉、有山谷溪源处、有水毒病、春秋輒得。一名中水、一名中溪、一名中酒、一名灑、一名水中病、亦名溪温。今人中溪、以其病与射工診候相似、通呼溪病。其实有異、有瘡是射工、無瘡是溪病。」とある。

^{5.2}『千金方』。「治水毒方」、「論曰、凡山水有毒虫、人涉水、中人似射工而無物、其診法、初得之惡寒、微頭痛、目眩疼、心中煩懊、四肢振慄、腰背百節皆強、兩膝痛、或翕翕而熱、但欲眠睡、且醒暮劇、手足逆冷至肘膝、一三日腹中生虫、食人下部、肛中生瘡、不痛不癢、令人不覺。不急治、過六七日下部出膿潰、虫上食人五臟、熱盛毒煩、下利不禁、八九日雖良医不能治矣。其毒有陰陽之異、覺得之、急早視其下部、若有瘡正赤如截肉者、為陽毒最急、若瘡如鯉魚齒者、為陰毒猶小緩、要皆殺人、不過二十日也。欲知是中水与非者、当作五六升湯、以小蒜五升咬咀、投湯中、消息勿令大熱、去滓以浴之。是水毒、身当發赤斑、無是者非也。」

^{5.3}『本草』は『本草綱目』。『本草綱目』に「溪毒寒熱」東間有溪毒中人似射工但無物初病惡寒發熱煩懊骨節強痛不急治生虫食臟殺人用雄牛膝莖紫色節大者一把以酒水各二盃同搗絞汁温飲一日三服 肘後方」

^{5.4}『得效方』。危亦林『世醫得效方』卷第二。大方脈雜醫科、沙證「鹽湯吐法、治心腹絞回痛、冷汗出、脹悶欲絕、俗謂攪腸沙。今攻之、

虱」⁵⁷「水弩」⁵⁸「射工」⁵⁹「蠃」⁶⁰「短狐」⁶¹「蝦蟇」⁶²などと言ふ毒蟲、吳⁶³より東南の諸山縣山谷溪源ある處の水中にあり、人を犯し病ましむるを痧病と名づく。又「水毒病」⁶⁴。「溪病」⁶⁵とも云い春秋すなわち之を得る。又江東江西の源澗の蟲を「短狐」「溪毒」と云い、又射公「射工」⁶¹と云い、其の土人に非らざれば、傷寒⁶²とすと云う。射公「射工」⁶³また「蠃」と名づく。又「沙虱」あり毒蛇鱗甲の虱

⁵⁵ 『肘後方』。「葛氏、水毒中人、一名中溪、一名中灑（東人呼為蕪駁切）、一名水病。似射工而無物。其診法。初得之惡寒、頭微痛、目注疼、心中煩懊、四肢振淅、骨節皆強。筋急、但欲睡、旦醒、暮劇。手逆冷、三日則復生虫、食下瘡、不痛不痒不冷。人覺視之乃知、不即療。過六七日下部膿潰、虫食五臟、熱極煩毒。注下不禁、八九日、良医不能療、覺得急、当深視下部。若有瘡、正赤如截肉者為陽毒、最急。若瘡如蠹魚齒者為陰毒、猶小緩。要皆煞人。不過二十日、欲知是中水毒、当作数升湯、以小蒜五寸。咀投湯中、莫令大熱。熱即無力、振去滓、適寒温以浴。若身体発斑紋者、又無異証、当以他病療之也。」

⁵⁶ 『医説』。「医説」、卷二 傷寒 辯痧病、「沙病江南舊無今東西皆有之原其證醫家不載大凡才覺寒慄似傷寒而狀似瘡但覺頭痛渾身壯・手足厥冷鄉落多用艾灸以得沙為良有因灸膿血迸流移時而死者誠可憐也有雍承節印行此方云初得病以飲艾湯試吐即是其證急以五月蠶退紙一片碎剪安碗中以櫟蓋蓋以湯泡半碗許仍以紙封櫟縫勿令透氣良从乘熱飲之就卧以厚衣被蓋之令汗透便愈如此豈不勝如火艾柱殘害人命敬之信之（葉氏錄方）」

⁵⁷ 砂虱。『肘後備急方』、治卒中沙虱毒方第六十三、「山水間多有沙虱、甚細略不可見、人入水浴、及以水澡浴、此蟲在水中、著人身、及隕天雨行草中、亦著人。便鑽入皮裏、其診法。初得之皮上正赤、

如小豆黍米粟粒、以手摩赤上、痛如刺。三日之後、令百節強、疼痛寒熱、赤上發瘡、此蟲漸入至骨、則殺人、自有山澗浴畢、當以布拭身數徧、以故帛拭之一度、乃傅粉之也。」

⁵⁸ 吳。「春秋時代の国、現在淮河以南浙江省北部に到る揚子江下流の一帯の地。」

⁵⁹ 水毒病。『病原候論』に「水毒病」とある。

⁶⁰ 溪病。『漢方用語大辞典』に「溪毒・溪鬼ともいう。また水弩・水毒ともいう。」前述『病原候論』の注を参照。「有水毒病、春秋輒得。」とある。

⁶¹ 射公は、射工の、誤り。

⁶² 傷寒。『漢方用語大辞典』では、「病名。広義の傷寒をさす。外感熱病の総称」、「狭義の傷寒をさす。寒邪を外に受け、感じてすぐに発する病変をいう。」などとある。

⁶³ 射公は、射工の、誤り。

と『太平行記』⁶⁴にも見えたり。『肘後』の「溪毒」『玄中記』⁶⁵の「水弩」⁶⁶『洪範五行傳』『左傳』『毛詩』⁶⁷の「蠍」みな同種類毒

⁶⁴ 李昉等撰、『太平広記』、昆虫一、「蠍射、玄中記、蠍以氣射人、去人三十步、即射中其影。中人、死十六七。紀年云、晋献公二年春、周惠王居于鄭、鄭人入王府取玉馬、玉化為蠍、以射人也。出感心経」。昆虫六、「短狐、搜神記及鴻範五行伝曰、蠍射生於南方、謂之短狐者也。南越夷狄、男女同川而浴、淫以女為主、故曰多蠍。蠍者淫女惑乱之氣所生。出『感心経』」。

⁶⁵ 『玄中記』は、『太平御覧』の「玄中記曰水狐者視其形蟲也。…」もしくは、『毛詩注疏』の「正義曰洪範五行傳云蠍如鼈三足生…」を引くと考えられる。

⁶⁶ 水弩。李昉等撰、『太平御覧』、中華書局、一九八五年、四二二九頁。短狐、「玄中記曰水狐者視其形蟲也。其氣乃鬼也。長三四寸。其色黑。廣寸許。背上有甲、厚三分許。其口有物向前如角狀。見人則氣射人。去二三步即射人中十人六七人死。」

⁶⁷ 『毛詩注疏』、芸文印書館、一九九三年、四二七頁—四二八頁。
「為鬼為蠍則不可得有視面目視人罔極」
也則女誠不可得見也姪然有面目女也則女誠不可得見也姪然有面目女
乃人相視無有極時終必與女相見○蠍音或沈又音域狀如鼈三足一名射工俗呼之水弩在水中含沙射人一云射人影○視土典反姪戸刮反面醜也
作此好歌以極反側
反側不正直也箋云好猶善也反側輾轉也作八章之歌求女之情女之情反側極於是也○灑音以古以字本作以○「疏」。

為鬼至反側○正義曰研窮而不得其情於是怒而責之言汝若為鬼也為蠍也則誠不可得而不須與我為詛今汝有視面目乃是人也瞻視於人無有極已之時我必將與

【口語訳】

痧脹晰義前篇

楊阜山人 著

【痧論】

一 痧病は、元來は「射工」と云う毒虫に害せまられる病の名で、嶺南（広東・広西）で多くみられる症状であった、しかし現在、清朝（）の書が書かれた当時）において、中土（中国の中央地域）でも、もっぱら病の説が通行しありふれた病となったとされる。『痧脹玉衡』を読むと、「痧」は「小兒痧疹」の意味に基づくところなので、毒虫の所為ではない。しかし其の治療法は、（もともと）嶺南の治療法に従っている。

一 「痧」という名は、もともと『病原候論』『千金方』『本草』『得効方』『肘後方』『医説』やその他の多くの書にも載っている。（その内容は、以下の通りである。）「溪毒」「砂虱」「水弩」「射工」「蠍」「短狐」「鰻鬚」などと呼ばれる毒虫が、只より東南にある地方の山中の谷川の水中にいる。その毒虫が、人を害して起こす病を「痧病」と

汝相見汝章不披寫汝情不與我盟詛乎以疑爾譜我之故我作此八章之善歌窮極爾反側之情冀得其實也○傳蠍短狐視姪○
正義曰洪範五行生於南越南越婦人多淫故其地多蠍淫女或亂之氣所生也陸機疏云一名射影江淮水皆有之人在岸上影見水中投入影則殺之故曰射影南人將入水先以瓦石投水中令水濁然後入或曰含沙射人皮肌其瘡如疥是也視姪釋言文孫炎曰視人面姪然說云云視面見人妬面視也然則視與姪皆面人之貌也○傳反側不正直○正義曰洪範云無反側無側王道正直則側是不正直也反側者翻覆之義故箋以為輾轉申傳不正直之義其意與傳同

いう。又「水毒病」「溪病」ともいい、春(夏)秋(冬)、この病となる。また江東江西の谷川にいる虫を「短狐」「溪毒」という。また「射工」といって、その土地のものでなければ、傷寒という。「射工」はまた「蠍」と呼ばれる。また「沙虱」というのもある。これは、「毒蛇鱗甲の虱である」と『太平広記』にも載っている。『肘後方』に記載される「溪毒」、『玄中記』に記載される「水弩」、『洪範五行伝』・『左伝』・『毛詩』に記載される「蠍」などは、

〔本紙第二丁オモテ〕

【原文】

虫ニテ人ニ着キ肌ニ入ル其症病原候論□□ナリ又此虫足ト角トヲ弩トシ氣ヲ矢トシ水中ニヒソミ砂ヲ鏃トシ人ヲ射ル等ノ説アリ土人其毒ヲ被ルト憎寒壯熱百体分解メ傷寒初発ノ如シ土人ノ治法手ヲ以其痛処ヲ捫摸シ甘藷〔頭注に蔗と訂正〕葉芋葉ナトヲ角マキニナシ痛処ニツキ付テロニテ痧毒ヲ吸出シ又芋麻ヲ香油ニヒタシ是ヲ刮リ甚者八十指頭ヨリ血ヲ出ス〔嶺南多有病ニテ此治法ニテ瘥トナリ医説ニ艾湯ヲ飲シメテ試之蠶退紙ヲ湯ニ泡メ與ル〕モ見ヘタリ楊阜案ルニ毒虫ノ氣ニ犯サルハ有シナレ共砂ヲ含人ヲ射ルハ信カタク何トナレハ毒虫ニ觸レタル覺ナクメ煩フ人多クアルユヘ彼方ニテモ直ニ射ルハカリニテハナシ人影ヲ射ルナトノ憶説ヲ云リ然ルニ嶺南ニ限ラス北方ニモ此病多シ中土ニハ毒虫ノ憂ナケレトモ其病嶺南痧病ニ異ナラス其状似寒非寒**熱**カトスレハ**熱**ニ非ズ四体懈怠飲食不甘醫師ノ病ト知ラス俗人はヲ痧病ト名ケ嶺南ノ法ニナライ熱水ヲ用テ

臂膊ニ浸シ芋麻ヲ以刮之甚者

【読み下し】

蟲にて人に著き肌に入る、其症『病原候論』□□⁶⁸⁶⁹なり。又此蟲足と角とを弩とし氣を矢とし水中にひそみ砂を鏃とし人を射る等の説あり。土人其毒を被ると憎寒⁷⁰壯熱⁷¹百體分解して傷寒初

⁶⁸ □□此の箇所は虫損により判読難。射毒「射工の誤り」と読める。

⁶⁹ 丁光迪主編『諸病原候論校注』、人民衛生出版社、一九九一年、頁七二五。卷之二十五、蠱毒病諸候七射工候に「江南有射工毒虫、一名短狐、一名蠍、常在山澗水内。此虫口内有横骨、状如角弓、其虫形正黒、状如大蜚、生齒髮、而有雌雄、雄者口辺兩角、角端有糧、能屈伸。冬月并在土内蟄、其上氣蒸休休、冬月有雪、落其上不凝。夏月在水内、人行水上、及以水洗浴、或因大雨潦時、仍逐水、便流入人家、或遇道上牛馬等跡内即停住、其含沙射人影、便病。」。

⁷⁰ 憎寒。『漢方用語大辞典』に「外に寒戦があり、内に煩熱が有る症状。これは、熱邪が内伏し、陽氣がはばまれて外に達することができないためにおこる。」、また「悪寒に同じ」とある。

⁷¹ 壯熱。『漢方用語大辞典』に、「証名。発熱で、熱の勢いが強く高熱なもの。」

發の如し。土人の治法、手を以て其の痛む處を捫摸⁷²し甘蔗葉、芋葉などを角まきになし、痛む處につき付けて口にて、痧毒を吸出し、

又芋麻⁷³を香油⁷⁴にひたし是を刮⁷⁵り、甚だしき者は十指頭より血を出す⁷⁵こと、嶺南に多く有る病にて此治法にて瘥⁷⁶りとなり⁷⁶。

72 捫摸。『大漢和辞典』に「つかむ。とる。」「さぐる。」とある。

73 芋麻。芋麻（からむし）。また、その茎の皮から採った纖維。精製したもので織った布は上布。لامي。大麻（ヘンプ）亜麻（リネン）をふくめ、麻纖維とよばれる。

74 香油。ゴマ油。

75 十指頭より血を出す。『漢方用語大辞典』に、「刺血療法。刺絡療法、放血療法ともいう。刺針により穴位あるいは体表の小静脈より少量の血液を放出する治療方法。」「三稜針などを用いて行う。」「中暑・頭痛・扁桃体炎・神経性皮膚炎・疔瘡などに適用される。」

76 「又此虫：此治法にて瘥⁷⁶りとなり」は、虞搏、『医学正伝』、和刻、一六三四年「寛永一一」、早稲田大学図書館蔵、二六葉オモテ一—二六葉ウラに、「或問、發痧之證、古方多不該載。世有似寒、非寒、似熱非熱、四體懈怠、飲食不甘、俗呼爲痧病。其治或先用熱水蘸搭臂膊而以芋麻刮之、甚者或以針刺十指出血、或以香油燈照視

『醫說』に「艾湯を飲しめて之を試み蠶退紙⁷⁷を湯に泡じて與うる」⁷⁸ことも見えたり。楊阜案ずるに毒蟲の氣に犯さることは有りしな

身背有紅點處皆烙之、以上諸法、皆能使腠理開通、血氣舒暢而愈。此爲何病。又何由而得之乎。曰、『內經』名爲解痧、原其所因、或傷酒、或中濕、或感冒風寒、或房事過多、或婦人經水不調、血氣不和、皆能爲解痧證、與痧病相似、實非眞痧病也。夫痧病者、嶺南煙瘴之地多有之矣。詩云、爲鬼爲蜮、則不可得。注云、蜮、短狐也、江淮間多有之、能含砂以射水中人影。唐詩云、射工巧俛遊人影。亦謂此也。人不見其形、若被其毒、輒爲寒熱而病。一曰、蜮如蟹、有三足、一名射影、病瘡如疣。『埤雅』曰、有一角橫在口前、如弩檣、臨其角端、曲如上弩、以氣爲矢、因水勢以射人、俗呼水弩、鵝能食之。本草云、溪毒、砂虱、水弩、射工、蜮、短狐、蝦蟇之類、俱能含砂射人。被其毒者、則憎寒壯熱、百體分解、若傷寒初發之狀、彼土人治法、以手捫摸痛處、用芋葉或甘蔗葉捲角入肉、以口吸出其砂、外用生大蒜搗膏封貼瘡口即愈。諸蟲惟蝦蟇最毒、若不早治、十死七八、其毒深入於骨、若蝦蟇之狀、其瘡類乎疔腫。彼地有鵝鶩等鳥、專食以上諸蟲、凡遇此病、即以此鳥毛糞燒灰服之、及籠此鳥於病者身畔吸之、其砂聞氣自出而病安也。其他無此諸蟲之地、實非眞痧證也。管見如斯、學人更宜博訪、以長見聞可也。」とある。

77 蠶退紙。蚕の卵の殻。

78 張杲、俞弁著、曹瑛、楊健校注、『醫說、続醫說』、中医古籍出版社、二〇一三年、一二六頁。『醫說』、卷三、傷寒、弁痧病、「痧病、江南舊無、今東西皆有之。原其證、醫家不載、大凡才覺、寒栗似傷寒、而狀似瘧、但覺頭痛、渾身壯熱、手足厥冷、鄉落多用艾灸、

れ共、砂を含み人を射ること信じがたし、何となれば毒蟲に觸れたる覺えなくして煩う人多くあるゆえ、彼方にても直に射るばかりにはなし、人影を射るなどの憶説を云えり。然るに嶺南に限らず北方にも此病多し、中土には毒蟲の憂いなければも其病、嶺南痧病に異ならず。其状は寒⁷⁾に似たれども寒に非らず、熱⁸⁾かとすれば、熱に非らず。四體懈怠、飲食不甘、醫師何の病と知らず。俗人は是を痧病と名づけ嶺南の法にならない熱水を用いて臂膊に浸し苧麻を以て之を刮す。甚しき者

【口語訳】

すべて同種類の毒虫であり人に付いて肌より入る。この症状は、『諸病源候論』に記載される「射工」である。別説では、「この虫は足と

以得砂爲。良有因灸膿血迸流、移時而死、者誠可憐也。有雍承節印行此方、云『初得病、以飲艾湯試、吐即是其證。急以五月蠶退紙一片、碎剪安碗中、以礫蓋密、以湯泡半碗許、仍以紙封礫縫。勿令透氣、良久垂熱飲之、就卧、以厚衣被蓋之、令汗透便愈。如此豈不勝如火艾、枉殘害人命、敬之、信之。(葉氏錄驗方)』

7。寒。『漢方用語大辞典』では、「六淫の一つ。」、また「機能が衰退した病証。」とある。

8。熱。『漢方用語大辞典』では、「熱邪のこと。六淫中の火と同一の属性を持つ発病因子」、また「熱証のこと。八綱弁証の一つ各種の原因により引き起こされる陽気亢盛の病証をいう」。

角とを弩^{いしゆみ}とし、気を矢とする。そして水中に隠れ砂を鏃^{やじり}として人を射る。そして土地の者がその毒を受けると悪寒し高熱となり全身が懈怠となる。それは、傷寒病の初期症状と同様である。その土地の者の治療法は、手でその痛むところをつかみ、サトウキビの葉、

^{さいも}

芋の葉などを角巻きにして、痛むところにつき付けて口で、痧毒

を吸い出す。又苧麻をゴマ油にひたしてこする。甚しい場合は十指の指頭より血を出す」という。これは、嶺南に多く有る病氣であり、

これらの治療法によって治癒する。また『医説』では、「艾を煎じて飲せてみる、蠶退紙を湯に浸して与える」ということも書かれている。楊阜(私)が思うのに、毒虫の氣に犯されることは有るだろうけれども、砂を含んで人を射るなどということは信じがたい。なぜならば毒虫に触れたという覚えがなくても病になる人が多くあるので、あちらでも直接に射るだけではなく、人影を射るなどという憶説を言ったのだ。ところで嶺南に限らず北方にもこの病が多い。中土では毒虫の心配はないが、その病は嶺南の痧病と変わらない。その症状は、「寒」に似ているけれども「寒」ではない。かといって「熱」かといえは「熱」でもない。四體懈怠(手足が緩み動かない)、飲食不甘(食事が美味しくない)等の症状がみられるが、医師は何の病か判断できない。一般の人々は、これを痧病と呼んで嶺南の治療法を真似て腕を湯に浸し、苧麻で擦る。

「本紙第二丁ウラ」

【原文】

ハ針メ血ヲ出ス「虞天民医学正伝ニノセタリ天民ハ嶺南ニ云痧病ハヤハリ毒虫ノ所爲ニシテ此方ニ云フ痧病ハ毒虫ニ中タルニアラズ乃内経ニ云解你ノ症ナリト思ヘリ解你ハ平人氣象論ニ見テ寒不寒熱不熱弱不弱壯不壯カクシテ傳不レ可レ名ト王氷注セリ又此解你ヲ生々子赤水

玄珠ニ注夏病トメ論セリ依之ミレバ注夏病解你ミナ痧病ノナス処ナリ刮之放之其薬ヲ用ハイユベシ然ルニ天民モ巢氏毒虫ノ説ヲ拘メ痧病ナル「フ解セズ別病トナセリ又雲林ノ龔氏回春ヲ撰スルニ至テ青筋ノ一病ヲ挙ク曰夫青筋ノ証原氣逆而不行俾三惡血上攻ニ於心一也自古以來無人論此但有患此病者無方可治惟以砒石於兩手曲池青筋上刺之按此青筋之症北人多患之南人有レ此即痧病也ト云リ雲林モ巢氏カ説ニ拘メ是乃痧病ナリトハ云ス南方ニテハ痧病ナレ任北方ニハ毒虫ナキ故痧病ニ非トメ別ニ青筋ノ一病名ヲ立テ中土ニ此病多キ「フ述へ曲池上青筋アルモノ「フ的イテ症トシ其云処ノ許多ノ証ノ□□□⁸¹氣逆メ惡血レ攻レ心ノ症

【読み下し】

⁸¹ 前出書、『万病回春』青筋に「夫青筋之症、原氣逆而血不行、竝惡血上攻於心也。」とある。□□□は、「□□原」であろう。

は針して血を出すこと虞天民⁸²『醫學正傳』にのせたり⁸³。天民は「嶺南に云う痧病は、やはり毒蟲の所爲にして此方に云う痧病は毒蟲に中たるにあらず、乃ち子なむ「内経」に云う解「解」你の症なり」と思えり、「解你」⁸⁴は「平人氣象論」に見えて、「寒、不寒、熱、不熱、弱、不弱、壯、不壯、傳くしんで名づく可からず。」と王氷⁸⁵注せ

⁸² 虞天民、『中国医学史レフアレンス辞典』、一〇四頁に、「虞搏、（一四三八—一五二七年）明の医学者。字は天民、自ら花溪恒徳老人と号す。浙江義烏（浙江省義烏）の人。『医学正伝（醫學正傳）』（一五一五年）を、撰し諸家の学説を縦横に取り入れ、自身の考えや臨床経験をあわせ幅広く論じる。」とある。

⁸³ 前出。『醫學正傳』。虞搏、『醫學正傳』、和刻、一六三四年「寛永一一」、早稲田大学図書館蔵、二六葉オモテ一—二六葉ウラ。

⁸⁴ 解你。精神の困倦（你）、肢体の懈怠（解）を覚える病。また日本内経学会、『素問』、日本内経学会、二〇〇四年（林徳等奉救校、王氷註「重広補註黄帝内経素問」、四部叢刊を影印）に、平人氣象論「臂多青脈、曰脫血。尺脈緩瀼、謂之解你、安臥脈盛、謂之脫血。尺瀽脈滑、謂之多汗。尺寒脈細、謂之後泄。脈尺麤常熱者、謂之熱中」とあり、「謂之解你」の後に割注双行小字（王氷註）で「寒不寒熱不熱弱不弱壯不壯你不可名謂之解你也」とある。

⁸⁵ 王氷は、王氷。

り。又此「解佻」を生々子⁸⁶、『赤水玄珠』に「注夏病」⁸⁷として論ぜり、之に依りてみれば「注夏病」「解佻」みな痧病のなす處なり。之を刮し、之を放ち、其の薬を用うれば、いゆべし。然るに天民も巢氏毒蟲の説を拘して痧病なることを解せず、別病となせり。又雲

⁸⁶ 生々子。生生子は、『中国医学史リファレンス辞典』によれば、「孫一奎」「明の医学者。字は文垣、号は東宿、また生生子と号す。」とある。

⁸⁷ 『赤水玄珠』に「注夏病」。孫一奎著、周琦校注、『赤水玄珠』、中国医薬科技出版社、二〇一一年、三〇頁。第二巻、暑門に「注夏」と共に分類される。

解佻（音亦）生生子曰、『平人氣象論篇』云尺脈緩瀯謂之解佻。王注曰、（尺者陰部也、腹腎主之、緩爲熱中、瀯爲無血、故解佻也。）解佻之證、懈倦困弱、寒不甚寒、熱不甚熱、惡見人、見人心惕惕然、或熱多而汗出、肢體百骸散解、痿弱而不能任持、少氣而不欲言、左右臂不可以名其狀、故謂之解佻。注夏之證殆相似、亦虛類也。其治、大生脈湯足以主之、加木瓜、苡仁。（傳音能困弱也。）大生脈湯、治注夏、體倦、嗜臥、百凡懶動、動則喘乏。（方出痿門）又方、甘枸杞子、北五味子 研碎貯瓶內、滾水泡、封口少刻取服之、可泡三次、每服六錢、久服爲妙。」とある。

林⁸⁸の龔氏『回春』を撰するに至りて、青筋⁸⁹の二病を擧ぐ。曰く「夫れ青筋の證、原氣逆し、而して行らず、惡血をして上り心を攻ましむるなり。古自り以來、此れを論ずる人無し、但だ、此の病を患う者有りて、方の治す可き無し。惟だ、砭石⁹⁰を以て兩手の曲池⁹¹の青筋上に之を刺すのみ。按ずるに、此の青筋の症、北人多く之を

⁸⁸ 雲林。『萬病回春』の著者、龔廷賢の号。

⁸⁹ 青筋。（明）龔廷賢撰『萬病回春』、人民衛生出版社、一九八六年、一六三—一六四頁。「青筋」門。

⁹⁰ 砭石。『漢方用語大辞典』に「石ばりのこと。中国最古の石製の医療用具で、楔形の石塊である。膿疱の切開や皮下の血管を刺して放血する時に用いられる。金属製の医療器具があらわれるまでの長い間民間の外科で利用された。」とある。また『素問』「異法方宜論」に「其病皆爲癰瘍、其治宜砭石。」とあり、王冰註は「砭石、謂以石爲鍼也。」とある。

⁹¹ 曲池。手の陽明大腸経に属する経穴。『針灸経穴名の解説』では、「肘を曲げたときの横紋の外側の端にあり、肘骨の曲がり角の内側のくぼみに当るので「曲池」となづけられた。肘を曲げ、手のひらを下にむけて穴を取る。」「偏風・喉咽・肘骨・肩腕などの諸症を治す。」とある。

患う。南人此れ有れば即ち痧病也。」⁹²と云えり、雲林も巢氏が説に

⁹² 前出書『萬病回春』、一六三―一六四頁。青筋、「夫青筋之症、原氣逆而血不行、竝惡血上攻於心也。多由一切怒氣相沖、或憂鬱氣結不散、或惱怒復傷生冷、或房勞後受寒濕、以致精神恍惚、心慌氣喘、噎塞上壅、嘔噦惡心、頭目昏眩、胸膈痞滿、心腹刺痛、脅肋腰背痛、頭痛腦疼、口苦舌乾、面青唇黑、四肢沉困、百節酸痛、或憎寒壯熱、遍身麻痺不仁、手足厥冷顫掉、默默不語、不思飲食等症、皆惡血攻心而致之也。自古以來、無人論此、但有患此疾者、無方可治。唯以砭針於兩手曲池青筋上刺之、出痧血不勝其數。而疾有即愈者、有不愈者、而變爲大患者、常慣病此者、或有一月一次、或二三次者、屢患屢刺、莫之能愈。愚唯慮人之生命以氣血爲主、故丹溪曰、氣血和、一疾不生、虧則百病生焉。況此病先傷於風而後複損其血、不致於天枉者蓋亦鮮矣。雖然未有退血之法、又不得不刺、不刺則惡血攻心、須臾不救。餘製一方、屢獲效驗、名曰白虎丸。白虎者、西方肺金之謂也、青筋者、東方肝木之謂也。以白虎而治青筋、是金能克木故耳、何病之不愈哉。此方之妙、不唯代刺青筋之苦、愈青筋之病、而亦免後日之患。其惠也不亦大乎。此方兼治男子久患痢疾便血、婦人崩漏帶下、竝一切打撲內損、血不能散、心腹痛欲死者服之、其效不啻桴鼓之影響也。按此青筋之症、北人多患之、南人有此即痧症也。」また岡本一抱『回春指南』に、「青筋（セイキン）此ノ症古今ノ医方ニ未ダ載セズ。故ニ詮義和名未ダ考セザル也。本文ニ因ルニ唐ニモ北人ノミ此ノ症有リテ南人ハ患ルコト少（マレ）ナリト見エタリ。或ノ説ニ吾朝ニ所謂日腫ノ病ト。愚按ニ俗間ニ呼トコロノ、ハヤウチカカタ伝コフノ類ナリ。」とある。

拘して是れ乃ち痧病なりとは云わず、南方にては痧病なれども、北方には毒蟲なき故痧病に非ずとして別に青筋の一病名を立て中土に

此病多きことを述べ曲池上青筋あるものを的症とし其れ云う處の

許多の證の□□原⁹³氣逆⁹⁴して惡血心を攻むるの症

【口語訳】

症状がひどければ、針で血を出す。このことは虞天民の書いた『医

⁹³ 前出書、『萬病回春』青筋に「夫青筋之症、原氣逆而血不行、竝惡血上攻於心也。」とある。これにより□□□は、「□□原」と補った。

⁹⁴ 逆。『漢方用語大辞典』に「①病が成ること。『素問湯液醪醴論』「今良工皆、稱して病成ると曰う。名づけて逆という。」②脈象。『素問平人氣象論』「人の胃氣なきを逆という。逆する者は死す。して」『傷寒論平脈法』「水行りて金に乗じ、火行りて水に乗ず、名づけて逆という。」③順の反対。④逆治のこと。」とある。また、氣逆は、「氣が逆上して不順である病理をさしている。氣が順であれば平常で有り、氣が逆すれば病になる。肺胃の氣は降るのが順であり、肺氣が逆すると喘促、咳嗽などをあらわす。胃氣が逆すると嘔吐、呃逆などをあらわす。肝氣は昇発を主るが鬱怒が肝を傷つて、昇発がすぎると、また氣火上逆をあらわし、頭痛眩暈・昏倒・吐血などの症状をあらわす。」

『学正伝』に載っている。天民は「嶺南で「痧病」と呼んでいるものは、やはり毒虫のせいであって、こちらで「痧病」と呼んでいるものは、毒虫に犯されていない。つまりこれは、『内経』に記載される解痧の症状である」と考えている。この「解痧」とは、『内経』の「平人氣象論」にあつて、「寒かといえは寒ではない、熱かといえは熱ではない、弱かといえは弱ではない、壮かといえは壮ではない、苦しむが何の病と名付けられない。」と王冰が注を付している。またこの「解痧」を生々子の著した『赤水玄珠』には「注夏病」として論じている。これにより考えれば「注夏病」「解痧」は、みな痧病のなす病だといえる。これをこすりこれを放ち、そのための薬を用いれば、治るだろう。ところが、『医学正伝』の天民も、『諸病源候論』の「菓氏の毒虫の説に拘つて痧病であることが理解できず別の病とした。また雲林（龔廷賢）は『万病回春』を撰する際に、「青筋」という病を記載した。雲林は、「青筋の証は、原気が逆して行らず、悪血を上らせ心（臟）を攻めさせるものだ。古くからこれを論じたものはいない。この病を患うものはいるが、治療法はなかった。ただ砒石で両手の曲池の青筋上を刺す方法だけだ。考えてみれば、この青筋の症というのは、北にすむ人が多く患う。南の人にこの症状があればそれは痧病である。」と述べている。雲林も菓氏の説に拘つて「これは、痧病である」とはいわず「南方では痧病だが、北方では毒虫がいないので痧病ではない」として、別に「青筋」の一病名を挙げて中土にこの病が多いことを述べる。そして曲池の上に青筋があ

るものが診断の目安となる症状だとする。またそこで挙げている数多くの症状は、「原気が逆して悪血が心（臟）を攻めることによる症状だ」として、

「本紙第三丁オモテ」

【原文】

トシ刺之出血メイユト云リ是ニ因テ考ルニ南方ノ人ハ溪毒水弩射工ナト云毒虫ニ犯ル「有ン北人ハ毒虫ニ犯ル」とナクメ人多患之然ラバ痧病ハ毒虫ノ所為ニ非ル「ヲ知ヘシ雲林モ嶺南ノ治例ニ隨イ曲池ヨリ血ヲ出シ愈ルアリ不愈アリ人其治法ヲ知モノナシト深歎メアリ又古人載籍中ニ痧ト云ハズメ痧ヲ説モノ多シ乾霍乱吐瀉ヲ得サルモノヲ攪腸痧ト云最難治□「死」在須臾⁵⁵。ト諸ノ方書イツレニモ載テアリ鹽湯ヲ以吐セシメ或刮シ或十指頭ヨリ血ヲ出「嶺南痧脹治法」トアリ然メ諸書イマタ毒虫ニ因テ絞腸痧トナル「ヲ云ハズ此諸書ニ因テミレハ痧ハ南方山縣ニカキラス中国イツレニモ有病ナリ人是云知ラス清ノ郭右陶ニ至リ毒虫ノ所為ニ非ス不正穢惡ノ氣ノ所為ナルヲ會得シ玉衡ヲ著シ人多痧ヲ患フ「ヲ論セリ故ニ今ノ痧ハ不正穢惡ノ氣時疫暑熱ノ氣等ニ犯レ此病ヲナス「ヲ知ルトキハ嶺南諸山縣ニ限ラス中華 日本ノ差別ナク水邊海濱ニテ異類毒虫ノ氣ニ中ルモ窮⁵⁶。□「死」。前出書、『萬病回春』、一四四—一四七頁。卷之三、霍亂に「有乾霍亂者、最難治、死在須臾、俗云攪腸痧。」とある。よつてこの字は、死に作る。

荒村落又ハ市門都會ニテ暑毒症邪ニ感ルモ経脉ヲ塞キ

【読み下し】

とし之を刺し血を出だしていゆと云えり、是に因りて考うるに、南方の人は「溪毒」「水弩」「射工」など云う毒蟲に犯さるること有らん。北人は毒蟲に犯さるることなくして人多く之を患う。然らば痧病は毒蟲の所爲に非らざることを知るべし。雲林も嶺南の治例に隨い、曲池より血を出し愈ゆるあり愈えざるあり、人其の治法を知るものなし、と深歎してあり。又古人載籍中に痧と云はずして痧を説くもの多し。「乾霍亂吐瀉を得ざるものを攪腸痧と云い、最も治り難し、死須臾に在り」⁹⁶と諸^{（いろ）}ものの方書いずれにも載せてあり、鹽湯を以て吐せしめ、或は刮し或は十指頭より血を出すこと嶺南痧脹治法のとおり。然して諸書いまだ毒蟲に因りて絞腸痧⁹⁷となること

⁹⁶『萬病回春』、卷之三、霍亂、「有乾霍亂者、最難治、死在須臾、俗云攪腸痧。忽然心腹絞痛、手足厥冷、脈沉細或沉伏、欲吐不得吐、欲瀉不得瀉、陰陽乖隔、升降不通、急用鹽湯探吐及刺委中穴^四出血、治用理中東加減。慎勿用米湯補住邪氣難治。直待吐瀉後、方可用清米湯補接元氣。若吐瀉不出、胸腹脹硬、面唇青、手足冷過肘膝、六脈伏絶、氣喘急、舌短囊縮者、死症也。」とある。

⁹⁷絞腸痧。『漢方用語大辞典』に、「乾霍亂の別名」。「乾霍亂」は、「乾霍亂（かいかくらん）」病名。攪腸痧ともいう。飲食の不節

を云わず。此諸書に因りてみれば痧は南方山縣にかぎらず中國いづれにも有る病なり。人是を云うを知らず。清の郭右陶に至り、毒蟲の所爲に非ず。不正穢惡の氣の所爲なるを會得し玉衡を著し、人多く痧を患らうことを論ぜり。故に今の痧は不正穢惡の氣、時疫、暑熱の氣等に犯され此の病をなすことを知るときは、嶺南諸山縣に限らず中華 日本^{（あま）}の差別なく水邊海濱にて異類毒蟲の氣に中るも窮荒村落又ハ市門⁹⁸都會にて暑毒症邪に感ずるも経脉を塞ぎ

制、あるいは、山嵐の瘴氣を感じたため、穢濁が腸胃を閉塞して本病を發する。症状は、突然腹中がしめつけられるように痛み、嘔きたくてもそれができず、また瀉したくてもそれができず、煩悶して安らかでない。重症の場合は面青色・肢冷・汗出・脈伏となる。治療は、利氣宣壅・辟濁解穢の法によく、蘇合香丸・藿香正氣散などの方がよく、あわせて、刺針して出血させる¹⁰。「煩悶」、「煩」は、「わずらわしいこと。とくに心中煩乱して、起きても寝ても不安な状態にあること」。「悶」は、「①もだえること。気がむすばれること」。「あるいは「この証は顔色は青く、意識は混迷して、四肢の逆冷、雨のように頭に汗をかき、切られるような頭痛があり、腹中は攪拌されるように痛み、吐きたくても吐けず、下したくても下らず、六脈は細数沈伏をあらわし、男は仰臥し、女は覆臥し、頭をふって、煩躁不安をあらわすこと。これは瘟疫熱毒が深く内に伏して發するものである。より深く入ると、臟に入り死に至る。」

⁹⁸市門。街の入り口にある門。

【口語訳】

「刺して血を出して治すのだ」と言っている。これらのことから考えれば、南方の人は「溪毒」「水弩」「射工」等という毒虫に害される事もあるだろう。(一方)北方の人は毒虫に害されることがないのに、多くの人がこの病を患う。そうであるから、痧病は毒虫のせいではないことを、理解すべきである。『万病回春』を著した 雲林も嶺南の治療例に随って、「曲池より血を出して治るものがある、また治らないものもある。人々はその治療法を知らない。」と大いに歎いている。また昔の人が、書物の中に「痧」とは言わないで「痧」を論じているものが多くある。「乾霍乱、吐き下しが出来ないものを攪腸痧と云い、最も治り難い、短時間のうちに死ぬ」とこれらの医書いづれにも記載されている。塩湯を用いて吐かせ、ある場合は擦り、ある場合は十指の指先から血を出すのは、嶺南の痧脹の治療法と同様である。そしてこれらの医書は「毒虫によって絞腸痧になる」とは言っていない。これらの医書によって考えてみれば、痧は南方の山なかの県に限らず、中国のどこにでもある病である。誰もこれを言うことはなかった。清の郭右陶がはじめて、「毒虫のせいではない。不正穢悪の気のせいである」ことを理解し『痧脹 玉衡』を著し、「多くの人が痧を患らう」ことを論じた。そこで今の痧は不正穢悪(あいかく)の気、時疫、暑熱の気等に汚染されこの病となることを理解

した場合、嶺南諸山県に限らず中華 日本 の区別なく、水辺や海浜で異類毒虫の気に害されるのも、荒れはてた村落あるいは人口の密集する都市において暑毒症邪に汚染されるのも、経脈を塞いで痧を生じて病となるということでは、同一である。

【原文】 「本紙第三丁ウラ」

痧。ヲ生シ病ト成ニ至テハ同一ナリ故吾日東ノ人此証ヲ患ルモノ往々有之人はヲ知ラス人ハ氣血ノ運行滯ルヲ無トキハ病ノ起ルヲナシ一タヒ痛毒ノ氣ニ犯レ或肌膚ニ停リ或血脉ニ入り血遂ニ畜痧ス血滯レハ氣滯リ氣血滯メ周流セス急ナル者ハ暈ヲナシ悶ヲナシ慢ナルハ種々ノ病ヲナシ不治ノ症トナル是乃痧病ナリ然任人ニ強弱アリ其氣質清濁各異リ其氣血運動ノ間受感モ亦同カラス故ニ同ク氣ヲ受テ病アリ不病アリ其見症モ亦不一故一ヲ以命【論】 100。カタシ唯痧 99。痧(お)は、『漢方用語大辞典』に「血液の循環の悪い病氣。この停滞した血液に、老废物としてのきたなさをつけ加えてとらえる説と、単に停滞している血液というだけでとらえている説とがある。痧血。『説文』「淤(痧に同じ)は澱澤濁泥なり。」とある。また『説文解字』では「痧」は「積血也。从疒於聲。」、「淤」は「澱滓、濁泥。从水於聲。」

100。命。「論」同。

病ハ痧筋アリ是ヲ徵トス又痧筋伏メ現セサル者アレ任証ト脉トヲ考
痧病ナル「ヲ解セハ其治ヲ誤」ナカルベシ

一 龔雲林所撰ノ回春ニ青筋ノ一門アリ是乃痧病其病状ヲ云「詳也
回春曰夫青筋之症元氣逆而血不行俾惡血上攻^{ニ於心}」也多由一切ノ怒
氣相冲或憂鬱氣結不散或惱怒復傷生冷或房勞後受寒濕以致精神恍惚
心慌氣喘噎塞上壅嘔噦惡心頭目昏眩胸膈痞滿

【読み下し】

痧を生じ病と成るに至りては同一なり。故に吾が日東の人此の證を
患わるるもの往々にして之有り。人は是を知らず。人は氣血の運行滞
ること無きときは病の起ることなし一たび瘡¹⁰¹毒の氣に犯され或
は肌膚¹⁰²に停まり或は血脉に入り、血、遂に畜痧す。血滞れば氣

¹⁰¹ 瘡。『漢方用語大辞典』に「瘡氣。疫瘡の氣・毒氣・異氣・疔
氣・雜氣などともいう。強烈な伝染性の疾病をひきおこす邪氣のこ
と。」、また「尿氣」には、「すべての温疫病とある種の外科感染
の病因を含む。空気や接触によって伝染する。」とある。

¹⁰² 肌膚。『漢方用語大辞典』に「肌」は、「肉のこと。」、「皮膚
に接する筋肉をさす。」、「外皮。」。また「膚」は、「身体
の表皮のこと。」、「厚皮の物をいう。」。

滯り氣血停滯して周流せず、急なる者は暈^(おまじ)をなし悶¹⁰³をなし、

慢なるは種々の病をなし不治の症となる、是れ乃ち痧病なり。然れ

ども人に強弱あり、其氣質清濁^(おのおの)各異なり其氣血運動の間、受感

も亦た同じからず、故に同じく氣を受けて病あり、不病あり、其見

症も亦た一ならず、故に一を以て論じがたし、唯^(ただ)痧病は痧筋あり、

是を徵とす。又痧筋伏して現ぜざる者あれども證と脉とを考え、痧
病なることを解せば其治を誤ることなかるべし。

一 龔雲林所撰の『回春』に青筋¹⁰⁴の一門あり、是れ乃ち痧病其
の病状を云うこと詳^(つまじ)らか也。『回春』に曰く「夫れ青筋の症、元

氣逆して血行^{おこ}らず惡血をして上りて心を攻めしむる也。」多くは、

¹⁰³ 悶。『漢方用語大辞典』に「悶(もん)①もたえること。氣が
むすぼれること。②この証は顔色は青く、意識は昏迷して、四肢の
逆冷、雨のように頭に汗をかき、切られるような頭痛があり、腹中
は攪拌されるように痛み、吐きたくても吐けず、下したくても下ら
ず、六脈は細数沈伏をあらわし、男は仰臥し、女は覆臥し、頭をふ
つて、煩躁不安をあらわすこと。これは瘟疫熱毒が深く内に伏して
発するものである。より深く入ると、臓に入り死に至る。」

¹⁰⁴ 前出、龔廷賢撰『万病回春』、「青筋門」のこと。

一切の怒氣¹⁰⁵相い沖き、或いは憂鬱して氣結ばれ散らず、或いは

惱怒復た傷¹⁰⁷いて冷を生ず、或いは房勞¹⁰⁶の後寒濕を受くるに由

り、以て精神恍惚¹⁰⁷とし、心慌¹⁰⁸して氣喘¹⁰⁹し、噎塞¹¹⁰し上

105 怒氣。『漢方用語大辞典』「怒則氣上」に「怒ればすなわち氣上るとよむ。氣上とは肝氣の上逆、あるいは肝陽の上亢をさす。肝は血を蔵し、またその性質は条達を喜び、抑鬱をきらう。もし神経に過度な刺激が加わると、肝氣は上逆し、胸脇脹満・頭痛頭暈・目赤腫痛、さらには肝の藏血作用が乱れ、氣に随って血も上昇して昏厥・嘔血などの症状を呈するようになる『素問・舉痛論』「怒すれば氣上し、…怒すれば氣逆し、甚しければ嘔血及び飧泄し、故に氣上る。」とある。

また「脹満」は、「腫れる病状。『医学正伝』「通身面目手足浮びて腫る、を水腫という、或は腹大にして鼓の如く、面目四支腫れざるものを脹満という。又鼓脹という。皆脾土の湿熱病をなすなり。」

106 房勞。『漢方用語大辞典』に「房室傷ともいう。性行為の過度により、腎精を耗損して虚損状態となること。」

107 恍惚。「ぼんやりとする。」。『漢方用語大辞典』に、「証名。精神が朦朧として、心乱の状態を言う。」

108 心慌。「動悸がする」

壅し、嘔噦¹¹¹悪心¹¹²し、頭目昏眩¹¹³し、胸膈痞滿¹¹⁴し、

109 氣喘。『漢方用語大辞典』に「病証名。①各種の呼吸困難証候の通称。②精神的素因による喘をいう。多くは七情により傷られ、氣機が鬱結しておこる。症状は呼吸急促して痰声なく、甚だしければ鼻を広げ息をする。あるいは怒り、イライラ、驚き悩むなどを伴うことがある。」

110 噎塞。『漢方用語大辞典』に「噎膈と同じ。」また「噎膈（いかく）は「病名。吞みこむ時に咽がふさがっているような感じが、胸がつかえて飲食をのみ下せないのが膈である。噎は普通は膈の前期症状なので、合せて噎膈という。胃癌・食道癌・食道狭窄・食道痙攣などの病変にみられる。長期の憂・怒の鬱積や、酒類や辛いもの、油っこいもの、硬い物を好物としたために脾を傷り氣が結し、津液がめぐらず、集って痰となり、肝が傷られて氣鬱血滯し、鬱滯して瘵となり、その痰と瘵が互いに結して、食道を阻害して、胃の機能を失わせておこったものである。」

111 嘔噦。『漢方用語大辞典』に「(おうえつ) 乾嘔の甚だしいものをいう。」

112 悪心。『漢方用語大辞典』に「(おしん) 病証名。吐こうとしても吐けない状態を言う。」

113 昏眩。『漢方用語大辞典』に「目がくらむこと。」

【口語訳】

ゆえに、我が日本の人もこの証を患うことは、よくあることなのだ。(しかし)人々は、このことを知らない。(そもそも)人は気血の運行が滞ることがなければ病が起きることはない。一たび瘧毒の気に害されると、ある場合は肌膚に停まり、ある場合は血脉に入り、そして血は、遂に畜瘀する。血が滞れば気が滞り、気血が停滯して周流しなくなる。急性ではめまいを起し悶をおこす。慢性では、種々の病を引き起こし不治の症となる。これが、すなわち痧病なのだ。しかし人には、強い弱いがある。その気質清濁はそれぞれ異なっており、その気血運動の感受もまた同じではない。それゆえ同じ様に気を受けても病むものもあり、病まないものもある。またあらわれる症状も一様ではない。だから一つのものとして論じることが難しい。ただ、痧病には痧筋があらわれる。これが特徴である。又痧筋が隠れて見えないものもあるが、証や脈を考え、痧病であることをがわかれればその治療を誤ることはないはずだ。

一 龔雲林が撰した『(万病)回春』に「青筋」の一部門がある。こ

114 胸膈痞滿。『漢方用語大辞典』に、「胸膈」は「むねと腹の間。隔膜。」。「痞滿」は、「①胸中が脹滿して、痛みのないことを痞滿という。②心下が阻滿して実質のないものをいう。」とある。

れは痧病の病状を詳しく説明している。『回春』では以下のように述べられている。「そもそも青筋の症とは、元気が逆して血が行らなくなり、悪血を上らせて心(臟)を攻めさせるのである。」「多くは、あらゆる怒気が相いぶつかる。ある場合は憂鬱して気が結ばれて散らなくなる、ある場合は惱怒がまた害して冷を生じる、ある場合は房勞の後に寒湿を受けたこと等により、精神が恍惚となり、心慌気喘し、噎塞上壅し、嘔噦悪心し、頭目昏眩し、胸膈が痞滿し、

【本紙第四丁オモテ】

【原文】

心脈〔腹〕¹¹⁵刺痛脇肋腰背痛頭痛口苦舌乾面青唇黒四肢沉困百節酸痛或憎寒壯熱遍身麻痺不仁手足厥冷顫掉々々不語不思飲食等症皆惡血攻^レ心而致^レ之也自古以來無^二人論^一此但有^二患此疾者^一無^二方可^レ治¹¹⁶唯以^レ砭針於^二兩ノ手ノ曲池青筋上^一刺之出瘀血不^レ勝^二其數^一而疾有即愈者有不愈者而變為大患者常慣病此者或有一月一次或兩三次者屢患屢刺莫之能愈按此青筋之症北人多患之南人有此即痧也ト云ニ雲林云処ヲミルニ曲池上ニ青筋アルモノヲ青筋ノ病トシ右

115 脈は、「腹」に同じ。

116 但有^二患此疾者^一無^二方可^レ治。訓点の誤り、正しくは、「但有^下患^上此疾^上者^上無^二方可^レ治。」

ニ云処ノ証ヲ患モノ皆元氣逆メ悪血攻心モノトシ刺之メ血ヲ出ス是吾唱ル処ノ沙病ナリ其痊サルモノハ治法ノ尽サレハナリ

一 身ニ動脈アリ血脉アリ動脈ハ靈樞ニ云十二經脈ノ周身ヲ回ルモノ也。又支絡ト云アリ是ハ本經ノ支別ノ經ナリ經脈愈穴ノ「ハ張介賓滑伯仁詳ニ書テアリ痧病ニ謂痧筋ハ張滑ニ子ノイエル経絡トハ別

【読み下し】

心腹¹¹⁷刺痛し、脇肋腰痛み、頭痛¹¹⁸み脳痛み、口苦く舌乾き、面青く唇黒く、四肢沉困¹¹⁹し、百節¹²⁰酸痛¹²¹するを致たす。或いは憎寒¹²²し壯熱し、遍身¹²³麻痺し不仁¹²⁴す、手足厥冷¹²⁵。

117 心腹。『漢方用語大辞典』に、「胸腹部をいう。」。

118 脳痛。『万病回春』作「腦疼」。

119 沉困。『漢語大詞典』「沈困」に「亦作「沉困」。」、「謂異常乏力。」（異常にたるく力がない。）とある。

120 百節。『漢方用語大辞典』に、「一般に全身の関節をさす。」

121 酸痛。『漢方用語大辞典』に、「重だるい痛み。」。

122 憎寒。『漢方用語大辞典』に、「外に寒戦があり、内に煩熱がある症状。これは、熱邪が内伏し、陽氣がはばまれて外に達することができないためにおこる。」、また「悪寒に同じ。」。「悪寒」は、「病証名。寒さをにくむという意味があり、風にあたらなくても、寒気を感じるものをいう。外感性の悪寒は感冒・傷寒・温病・

顛掉^(せんたう) 126 し、黙々として語らず、飲食を思わず等の症、皆な悪血

心を攻め而して之を致す也。古^(いにしへ) 自り以來、人の此れを論する無し。

但だ此疾を患う者有りて、方の治す可き無し、唯だ砭針を以て兩の手の曲池青筋上に之を刺し、瘀血を出だすことのみ、其の數う

るに勝えずして、疾、即ち愈ゆる者有り、愈えざる者、而るに變じ

て大患と爲る者、常に此を病むに慣るる者有り、或いは一月一次、

或いは兩三次¹²⁷、なる者有り。屢^(しばしば) 患い屢刺すも、之が能く愈ゆ

ること莫し。」「按ずるに此の青筋の症、北人多く之を患い、南人に此有るは、即ち痧也」と云うに、雲林が云う處をみるに曲池上に青

瘧疾などの病証に、内傷性の悪寒は、陽虛悪寒、痰飲悪寒、鬱火悪寒などの病証にあらわれる。」

123 遍身。「体じゅう、全身。」。

124 不仁。「手足がしびれて自由がきかない。感覚がなくなる。」。

125 厥冷。『漢方用語大辞典』に「四肢の末端から冷えること」。

126 顛掉。顛^(かぶ)える。掉^(おち)える。どちらも、ふるえる。

127 兩三次。『万病回春』作「二三三次」。

筋あるものを青筋の病とし、右に云う處の證を患うもの皆元氣逆して惡血心を攻むるものとし之を刺して血を出だす。是、吾唱うる處の沙病なり。其の^{いん}瘥^{えん}ざるものは治法の盡くさざればなり。

一 身に動脈¹²⁸あり、血脉¹²⁹あり。動脈は『靈樞』に云う十二經脈の周身を^{めぐ}回るもの也。又支絡と云うあり、是は本經の支別の經なり。經脈愈穴のことは張介賓¹³⁰、滑伯仁¹³¹、詳^{（ビキ）}らかに書き

¹²⁸ 動脈。『漢方用語大辞典』に「全身の經脈で、その搏動が手に感ずる所。」とある。

¹²⁹ 血脉。『漢方用語大辞典』に「①經脈のこと。単に脈ともいう。これはれ血が巡行する通路である。②心の合といひ、心の状況を敏感に反映し、人体内の血液の輸送管で、心臓より全身に分布し、また全身より心臓に帰る。十二經絡はこれによっており、全身の血液もまたこれによって循環している。心臓が一刻でも停止すれば病となり、停止すれば死す。」とある。

¹³⁰ 張介賓（一五六三—一六四〇）。張介賓、『張氏類經』、新文豊出版、一九七六年、一五〇頁—二一九頁。『類經』七卷、八卷、九卷に經絡類がある。張介賓、『類經図翼 類經附翼』、新文豊出版、一九七六年、六二頁—二〇二頁。『類經図翼』三卷—九卷に經絡がある。

てあり、痧病に謂う痧筋は張滑二子のいえる經絡とは別

【口語訳】

心腹が刺痛し、脇肋や腰背が痛み、頭が痛み脳が痛み、口は苦く舌が乾き、面は青く唇は黒くなり、四肢が異常に重だるくなり、体中の関節が重だるく痛む等の症状をきたす。ある場合は風にあたらなくても寒気を感じ、熱が壮んに出る。全身が麻痺し感覚がなくなり、自由に動かせなくなる、手足の末端から冷え上がりふるえる、黙りこくって話さない、飲食をしようと思わない等の症状、これらは皆な惡血が心（臟）を攻めて、これらの症状をおこしているのだ。古くよりずっと、これを取り上げ説明するものはいなかった。ただこ

の病を患うものはいたが、治療法がなく、^{いしほ}砭針を以て両手の曲池にある青筋を刺して、瘀血を出だすことだけであった。それは数えきれないが、病が愈ゆるもの、愈えないもの、症状が変わり大病となるもの、この病が常態化してしまうものもいる、さらに一ヶ月に一度もしくは二三度なるものもいる。患うごとに、刺しても、完治することはない。「考えるに、この青筋の症は、北方の人が多く患

¹³¹ 滑伯仁。滑寿（一三〇四—一三八六）、字は伯仁。十二經に奇經のなかの任脈・督脈を加え十四經とし、『十四經發揮』三卷を著わす。至正元年（一三四一）刊行。滑寿、『十四經發揮』、早稲田図書館。

うものであり、南方の人がこれを患うのは、痧である」としている。

これら雲林の記述から以下ことがわかる。「曲池の上に青筋があるものを青筋の病としている。そしてこの証を患うものは、皆元気が逆して悪血が心（臓）を攻めるものであるとし、（治療として）これを刺して血を出す」。これは、私が主張している「沙（痧）病」である。治らないものは治療を尽くさなかったからである。

一 身体には動脈があり、血脈がある。動脈とは『靈枢』に述べられている十二経脈で全身を循環しているものである。また支絡というものがある。これは本経より分かれた支別の経である。経脈愈穴のことは張介賓『類経』や、滑伯仁『十四経發揮』が、詳しく記述している。（しかし）「痧病」でいう「痧筋」は張介賓や滑伯仁のいう経絡とは別のものである。

【本紙第四丁ウラ】

【原文】

ナリ青色紫色ニメ筋脉毛頭レ出ルナリ筋脉ハ俗ニ云筋ナリ内経ニ云フ浮絡ナリ手足ニアラワレ目ニ見ユル処ノモノ身ニミチテアリ此筋肥大ノ人ハツ子ニ見ハサレトモ少瘦ルカ又中年以上肉少落ルモノ又ハ筋多ク見ル是張滑二子ノ論シ及サルモノナリ此筋ハ紅毛人善ク論

メアリ杉田子解体神書¹³²ニ是ヲ血脉ト譯シ荻氏刺絡篇ニ絡ト譯セ

リ乃血ヲ動脈ノ末ヨリ受テ心肺へ皈¹³³スルノ血脉ナリ痧筋トハ此血脉ノ血厲毒ニアタリ痧トナル故運行滞リ常度ニ合ハス以病トナル故ニ常ニ見レサル処ノ細筋ニモミチアフレ色必青色或紫色ヲアラハス刺メ血ヲトルヘシ紅毛人ノ經脈ヲ論スル所¹³⁴知寸ハ痧病ノ血ヲ取テ治スル所以ヲ解スヘシ其経絡ノ説張滑二子ノ面目ト大ニ異リ其字ニ曰飲食胃ニ入り食未腐燥セズ胃ノ下口ニイタリ大機里流汁¹³⁵ト膽汁トソ、キ飲食皆腐燥ス大機里流ハ胃ノ下脾ト十二指腸ノ間ニアリテ血ト水トヲ分利シ心肺ニ送り血トナラシム其血ハ則動脈トナリソレヨリ心ノ左方ヨリ起リ一身ニ蔓延ス

【読み下し】

なり青色紫色にして筋脉¹³⁴も顯れ出づるなり。筋脉は俗に云う筋なり。『内経』に云う浮絡¹³⁵なり。手足にあらわれ目に見ゆる處の

¹³² 杉田子解体神書。杉田玄白、『解体新書』のこと。解体神書は『解体新書』の誤り。

¹³³ 皈は、「帰」に同じ。

¹³⁴ 筋脉。『漢方用語大辞典』では「人体の筋（腱）と脈（血管、淋巴管のこと）」、『漢語大辞典』では「静脈管」などとするが、ここでいう「筋脉」とは異なるように思える。筋脉（すじみやく）

と読み、「血管」と解した方が良いように思われる。後に続く「筋」も同様。

135 浮絡。前出書、『素問』。卷第十五、皮部論篇第五十六に、「黃帝問曰、余聞皮有分部、脈有經紀、筋有結絡、骨有度量、其所生病各異、別其分部、左右上下、陰陽所在、病之始終、願聞其道。岐伯對曰、欲知皮部、以經脈為紀者。諸經皆然。陽明之陽、名曰害蜚、上下同法。視其部中有浮絡者、皆陽明之絡也。其色多青則痛、多黑則痺、黃赤則熱、多白則寒、五色皆見、則寒熱也、絡盛則入客於經。陽主外、陰主內。少陽之陽、名曰樞持、上下同法、視其部中有浮絡者、皆少陽之絡也。絡盛則入客於經。故在陽者主內、在陰者主出、以滲於內。諸經皆然。太陽之陽、名曰闕樞。上下同法、視其部中有浮絡者、皆太陽之絡也。絡盛則入客於經。少陰之陰、名曰樞儒。上下同法、視其部中有浮絡者、皆少陰之絡也。絡盛則入客於經、其入經也、從陽部於經、其出者、從陰內注於骨。心主之陰、名曰害肩、上下同法、視其部中有浮絡者、皆心主之絡也。絡盛則入客於經。太陽之陰、名曰闕蟄、上下同法、視其部中有浮絡者、皆太陽之絡也。絡盛則入客於經。凡十二經絡脈者、皮之部也。是故百病之始生也、必先於皮毛、邪中之則腠理開、開則入客於絡脈。留而不去、伝入於經。留而不去、伝入於府、稟於腸胃。邪之始入於皮也、泝然起毫毛、開腠理。其入於絡也、則絡脈盛、色變。其入客於經也、則感虛乃陷下。其留於筋骨之間、寒多則筋攣骨痛、熱多則筋弛骨消、肉爍脰破、毛直而敗。帝曰、夫子言皮之十二部。其生病皆何如。岐伯曰、皮者、脈之部也。邪客於皮、則腠理開、開則邪入客於絡脈。絡脈滿則注於經脈、經脈滿則入舍於府藏也。故皮者有分部、不与而生大病也。帝

もの身にみちてあり。此の筋肥大の人はつ子に見えざれども、少し常く瘦するか、又中年以上肉少しく落つるもの、又は筋多く見る亦わる、是れ張滑二子の論じ及ばざるものなり。此の筋は紅毛人¹³⁶。善く論じてあり。杉田子『解体新書』¹³⁷に是れを血脈と譯し荻氏『刺絡曰、善。』とある。また『漢方用語大辞典』では、「皮下浅表にある絡脈をさす。その部位と色沢は、病証の診断に用いられる。また、瀉血にも用いられる。」とある。

136 紅毛人。『日本国語大辞典』に、「オランダ人。江戸時代、ポルトガル人、スペイン人を南蛮人と呼んだのと区別していったのち、広く欧米人をいった。西洋人。」

137 杉田玄白、『解体新書』、一七七四（安永三）年、（内藤記念おくすり博物館）。卷の一、格知篇、「何兒（ホルアデル）、亞題爾。此ニ翻ス血、脈ト。漢人所説青筋是ナリ也。受ニ動脈之血ヲ。而帰ス心ニ也。無シ動。其裡有ニ加刺布火里私。此ニ翻ス辨ス。懸テ管中ニ如簫簧ノ」。

杉田玄白『ほか訳著』酒井シヅ訳、『解体新書 全現代語訳』、講談社、一九九八年、五七頁―五八頁。「ポルアデル。（これは血脈（静脈）と訳す。漢人いうところの青脈はこれである）。これは動脈（動脈）の血液を受けて、心（心臓）に戻すものである。搏動はな

篇』¹³⁸に絡と譯せり。乃ち血を動脈の末より受けて心肺へ歸するの血脉なり。痧筋とは此の血脉の血、厲毒にあたり痧となる。故に運行滯り常度に合はず、以て病となる。故に常に見れざる處の細筋にもみちあふれ、色必ず青色、或は紫色をあらわす。刺して血をとるべし。紅毛人の經脈を論ずる所を知る時は痧病の血を取りて治する所以を解すべし。其の經絡の説、張滑二子の面目と大いに異なり其學に曰く飲食胃に入り食未だ腐燥せず胃の下口にいたり、

い。その内面にカラツプフリス（これは弁と訳す。脈管の内側に懸つていて、^{シヤウツツ}簫簧〔笙の笛の舌〕に似ている。×の符号で示す）がある。」

¹³⁸ 荻野元凱、『刺絡編』、林伊兵衛、一七七—（明和八）年。（早

稲田大学図書館）。血絡「西書」^{書名ニツク失更覺賢的。}
^{カナムルフツク}千姥兒蒲貫孤ト

日絡脈有

二二道一。一ヲ名ニツク訶兒亜垓兒。^{訶兒訳ニス空虚一コト、猶レ言レタ氣ト亜垓兒又言ニ亜獨兒一訳レス筋ト、猶レ言ニ絡脈}

一。下皆。出ニ肘中下廉。細メ如鍼。是ヲ為ニ通氣之道ト。総テ三

頭中疾一ヲ。刺レニ之ヲ血不ニ多出。一ヲ名ニツクテ^{フルウトアアツル}蒲兒鳥篤亜垓兒ト。▽

蒲兒鳥篤又言ニ^{蒲瀧鳥篤ト訳ス血。}四表ノ大絡。巨ニメ如箸。是ヲ為ニ血行ノ道一ト。原皆^シ于^シ心蔽^ニヨリ。依^ニ於^ニ骨髓^ニニ布散^シ上^ニ下^ニ。達^ニス于^ニ指端^ニ。一」アーテルはオランダ語で *ader*（靜脈）。

大機里流^{だいきりる}¹³⁹ 汁と膽汁とそそぎ¹⁴⁰ 飲食皆腐燥¹⁴¹す。大機里流は胃の下、脾と十二指腸の間にありて、血と水とを分利し¹⁴²、心肺に

¹³⁹ 土屋涼一、「脾の語源について」、『胆と脾』、二二（二）、二〇〇一年、一一三—一三七頁。「『解体新書』が安永三年（一七七四）八月に出版された。それは序図と卷之一、卷の四の五冊から成っている。本書では脾臓の *alvesch* という蘭語を訳しきれず、大きな腺と解釈し大機里爾（キリル）とした。」「なお解体新書の機里爾（キリル）を腺、大機里爾を脾と、それぞれ新しい国字を作ったのは宇田川玄真で一八〇五年に刊行した『医範提綱』に発表した。」

酒井シズ、『新装版解体新書』、講談社、一九九八年、一七〇—一七一頁。も参照。

¹⁴⁰ 「胃の下口にいたり、大機里流汁と胆汁とそそぎ」は、大機里流汁（脾液）を通す脾管と、胆汁を通す総胆管が合流し、十二指腸下行部（大十二指腸乳頭周囲）つまり、オッディ括約筋で開口する、そして十二指腸に注いだ脾液と胆汁は、消化を進めることを言う。本文中の「胃の下口」は、十二指腸の誤り。

¹⁴¹ 腐燥。『漢方用語大辞典』「腐熟水穀」に「胃腸道が水穀（食物）を消化する過程である」。

¹⁴² 「大機里流は胃の下、脾と十二指腸の間にありて、血と水とを分利し」大機里流（脾臓）の位置についての記述は正しいが、血と水とを分利することはない。

送り血とならしむ。其の血は則ち動脈となり、それより心の左方より起り、一身に蔓延す。

【口語訳】

青色や紫色で、「筋脉」（血脈）として見ることが出来る。「筋脉」は俗にいう筋（すぢ）である。『内経』で述べられる「浮絡」である。

手足の表面にあらわれて、目で見ることが出来るもので全身にくまなく分布している。この筋は、すぢ太っているひとは、通常見えない。

（しかし）少し痩せている人か、中年以上で肉が少しく落ちてきている人は、この筋が多く見える。これは、張介賓や滑伯仁が言い及んでいないものである。しかしこの筋について、西洋人は善く論じている。杉田玄白『解体新書』では、これを「血脈」と訳し荻野元凱『刺絡篇』では「絡」と訳している。つまり血を動脈の末端より受けて心肺へ帰す血脈（静脈）¹⁴³である。（さて）「痧筋」とはこの血脈の血が、厲毒に犯され痧となる。そのために運行（循環）が滞り正常な規則を保てず病となるものである。なので、普段は見えないところの細い筋（血管）にも（血）が充満し、色は必ず青色、もしくは紫色を示す。刺して血を取らなければならない。西洋人がいか

¹⁴³ 「血を動脈の末端より受けて心肺へ帰す血脈」とは、「静脈」を説明していると思われる。

に経脈を論じているかを知ったならば、なぜ「痧病」で血を取り治療するかを理解できるであろう。西洋人の経絡の説は、張介賓・滑伯仁のものとは大きく違う。西洋人の学問では次のように論じられる。「飲食物は、まず胃に入る。食物は腐燥（消化）しないで胃の下口にいたり、そこに大機里流汁（たいきりる脾液）と胆汁とが分泌され飲食物はみな消化する。大機里流（脾臓）は胃の下で、脾と十二指腸の間にあつて、血と水とを分離し、心肺に送つて血とならせる。その血は動脈となつて、心（心臓）の左側（左心室）より出て、全身に広がる。

【本紙第五丁オモテ】

【原文】

其大幹ハ脈ノ中部ヲ下リ下身へ蔓延シ兩足へハシル又昇ルモノハ頭面兩手ニ至ル是乃血ノ活動メ走り周身ニ養フモノ也乃張滑ノ二子ノ云ル経脉ナリ是ヲ動脉ト名ク其支別無量甚微細ナル処ニ至ル又血脉ハ同ク心肺ニ付テ彼動脉ト並ヒ錯綜シテ身ニ周シ是ハ血ハアリテ動ナシ動脉ノ微細ニ成リ尽ル処ヨリ起リ其血ヲ受テ心ノ右方ニ送り入ルナリ故ニ動脉ハ血ノ盛ニ湧キ出ルユヘ動メワシル血脉ハ動ナシ自然ニ走り販ス故ニ動脉ハ順行シ血脉ハ逆行スト云今云処ノ痧ハ暑熱ノ氣時疫ノ氣穢悪ノ氣ニ犯ルレハ絡ノ血痧トナリ周ラス血滞リテハ氣亦滞リ絡塞レハ経モ亦メクラズ乃雲林ノイヘル原氣逆メ血不行ト云モノナリ故ニ急ナル者ハ昏迷シテ人事ヲ省セス甚者ハ死ニ至ル緩

ナル者ハ種々ノ病態ヲアラワス内攻臟府ニ至テハ救ヘカラサルニ至ル乃雲林ノ悪血攻心ヲ致スト云処ナリ嶺南人はヲ痧病ト名付刺メ血ヲ洩シ逆氣ヲサマリ絡血メクルトキハ氣モ随テメクル絡ノ氣血運スレハ經ノ氣血モ一柏子ニメクリ元氣復

【読み下し】

其の大幹は腹の中部を下り下身へ蔓延し兩足へはしる。又昇るものは頭、面、兩手に至る。是れ乃ち血の活動して走り周身に養うもの也。乃ち張滑の二子の云わゆる經脈なり。是を動脈と名づく。其支別は無量にして甚はだ微細なる處に至る。又血脈は同じく心肺に付いて彼の動脈と並び錯綜して身に周し、是は血はありて動なし、動脈の微細に成り盡きる處より起り其の血を受けて心の右方に送り入るなり。故に動脈は血の盛んに湧き出るゆえ、動してわしる^走144血脈は動なし自然に走り歸す。故に動脈は順行し血脉は逆行すと云えり。今云う處の痧は暑熱の氣、時疫の氣、穢惡の氣に犯さるれば、絡の血瘀となり、周らず血滯りては、氣亦滯り、絡塞がれば、經も亦めぐらず。乃ち雲林のいえる原氣逆して血行^{めぐ}らずと云うものなり。故に急なる者は昏迷して人事を省せず、甚だしき者は死に至る。緩なる者は種々の病態をあらわす、内攻し臟府に至りては救うべからざるに至る。乃ち雲林の惡血、心を攻しむるを致すと云う處なり。

144 わしる。「はしる」に同じ。

嶺南人、是を痧病と名付け、刺して血を洩らし、逆氣おさまり絡血めぐるときは、氣も隨いてめぐる。絡の氣血、運すれば、經の氣血も一拍子¹⁴⁵にめぐり元氣復

【口語訳】

その大幹（大動脈）は腹の中部（胸大動脈・腹大動脈）を下り下身へ蔓延し兩足へ走る。また上行するものは頭部、顔面、兩手に至る。これらは、血を動かし送り、全身を栄養するものである。つまり張介賓・滑伯仁の二人が言っている「經脈」である。これを動脈と名づけている。¹⁴⁶その支別（支脈）は無量にして（数えきれないほど）たいへん微細なところにまで至る。また別の血脉は（先程の動脈と）同じように心肺についていて先の動脈と並び錯綜しながら全身に広がるが、こちらは、血はあるが動きはない¹⁴⁷。それは動脈が微細に成りつきたところより始まり動脈の血を受けて心（臟）の右方（右心房）に送って入る。つまり動脈は血が盛んに湧き出る

145 柏子。「拍子」の誤りか。

146 張介賓・滑伯仁らの「經脈」つまり中国医学・日本漢方の「經脈」は、「本紙第四丁ウラ」で、大きく違うとしながらもここでは西洋医学の「動脈」であると述べている。

147 「血はあるが動きはない。」これは静脈の説明である。筋性動脈は、血管壁を収縮させる。一方静脈壁は血流を押し流す力が乏しい。

ので、動（拍動）して走行する、血脉（静脈）は動（拍動）なしに自然に走行し（心臓に）戻る。そこで動脈は順行し血脉は逆行するといえる。

さて、今述べている「痧」であるが、これは暑熱の気、時疫の気、穢悪の気に害されることにより、（血）が絡（静脈）の血瘀となる、そうすると循環せず血が滞るので、気もまた滞り、絡（静脈）が塞がれるので、経（動脈）もまた（血）がめぐらない。つまりこれは、雲林『万病回春』の記述にある「原氣逆して血行（めい）らず」である。

そして急性のものは、昏迷して人事不省となり、甚だしければ死に至る。慢性のものは、様々な病態をあらわし、内攻して臟腑にまで至ると救うことが出来なくなる。（これらの病状は）雲林が「悪血、心を攻しむるを致す」と述べているところである。嶺南の人は、これを痧病と名付けている。刺して血を洩らし、逆気がおさまり、絡血がめぐれば、気も随つてめぐる。そして絡の気血が、運行すれば、経の気血も一拍子にめぐって元気が回復して病は自然と治る。

〔本紙第五丁ウラ〕

【原文】

シテ病自ライユ

一 動脈ノ血ハ心肺ヨリ出テ四末ニ走り絡脈ノ血ハ四末ヨリ受テ心肺ニ帰納スルヲ紅毛人ノ説ニメ実ニシカルヲ知ヘシ動脈ハ肉裡ヲ行外ニ見ユルヲマレナリ而メ外ニアラワレ動スル処ハ寸口人迎跌陽

其外ノ脈処也絡脈ハ皮下ニツキ皮薄ケレハ乃アラハル今手ノ臂灣ヨリ血ヲ取ニ先臂膊上ヲ木綿ニテ繋クマトウ時ハ手腕ニ血アツマリ絡筋フトク手ノ色紫黒トナル此木綿ニテ絡血ノ帰ル路ヲシメル故血タヘテアルユヘ也肩膊ノ方ハ少ニテモ張ルヲナシ是ニテ絡血ノ逆行スルヲ明ニ知ル、ナリ又手ノ尺沢ノ動ヲ押スハ寸口ノ脈絶シ又膝下ノ三里巨虚ノ邊ヲ押スハ膝上ノ脈動セス而メ寸口ヲ押シテハ尺沢ノ脈ハ少シモ絶スルヲナシ是ニテ血脉ノ四末ニ流レ走ルヲ知ヘシ故ニ動脈順行シ絡脈ハ逆行スト云リ是滑寿張景岳ナトノ云ハサルトコロナリ絡脈ハ皮下ニアリ動脈ハ肉裏ニアリ故ニ痧毒ニ感ルト絡脈先受之故ニ筋色青クナル又ハ細筋ヲ見ハス是血ノ瘀シ濁リテ死148血トナルシルシナリ

【読み下し】

して病自らいゆ。

一 動脈の血は心肺より出て四末に走り絡脈の血は四末より受けて心肺に歸納すること、紅毛人の説にして實にしかることを知るべし。

動脈は肉裡（みこ）を行り外に見ゆることまれなり。而して外にあらわれ動する處は、寸口、人迎、跌陽149。其外の脈處150也。絡脈は皮下に

148 死。 「死」に同じ。

149 寸口、人迎、跌陽。張仲景『傷寒雜病論』の脈診（仲景の三部診法）とされ、頭の人迎、手の寸口、足の跗陽を診る。「人迎」は、

つき皮薄ければ乃ちあらわる。今手の臂灣より血を取るに、先ず臂膊¹⁵¹上を木綿にて緊くまとう時は、手腕に血あつまり絡筋ふとく手の色紫黒となる。此の木綿にて絡血の歸る路をしめる故、血たたえてあるゆえ也。肩膊の方は少しにても張ることなし。是にて絡血の逆行すること明らかに知るるなり。又手の尺澤¹⁵²の動を押す

足の陽明胃經に属す。前頸部、胸鎖乳突筋の前縁、甲状軟骨上縁と同じ高さ、総頸動脈上。総頸動脈拍動部。「寸口」は、手の太陰肺經が通る。前腕前外側、橈骨下端の橈側、橈骨動脈上。橈骨動脈拍動部。「附陽」は、足の太陽膀胱經に属す。下腿後外側、腓骨とアキレス腱の間、腓骨動脈上。しかし、この場所で脈動を触れることは困難だと思われる。左合昌美、『よくわかる黄帝内經の基本としくみ』、秀和システム、二〇〇八年、一一六頁、「跌陽脈診」に「足背の附（足の甲）上の脈」を載せる。ここでは、足背動脈の脈動を触れることが出来る。

¹⁵⁰ 拍動部。体表から触知可能な動脈は浅側頭動脈、顔面動脈、総頸動脈（人迎）、上腕動脈、橈骨動脈（寸口）、大腿動脈、膝窩動脈、後脛骨動脈、足背動脈など。

¹⁵¹ 臂膊。上腕部。

¹⁵² 尺澤。手の太陰肺經の經穴。肘前部、肘窩横紋上、上腕二頭筋腱外方の陥凹部。上腕動脈拍動部。

は寸口の脉絶し、又膝下の三里巨虚¹⁵³の邊りを押すは跌上¹⁵⁴の脉動せず。而して寸口を押しては尺澤の脉は少しも絶することなし。是にて血脉の四末に流れ流ることを知るべし。故に動脈順行し絡脉は逆行すと云えり。是れ、滑壽、張景岳などの云わざるところなり。絡脉は皮下にあり、動脈は肉裏にあり、故に痧毒に感ずると、絡脉先ず之を受く。故に筋色青くなる、又は細筋を⁶⁵⁰見す。是れ血の瘀し濁りて死血となるしるしなり

【口語訳】

一 動脈の血は心肺から出て四末（四肢）に走り、絡脉の血は四末（四肢）より受けて心肺に帰納することは、西洋人の説であるが、実にその通りであることを知るべきである。動脈は肉の中を走行し外に見えることは、まれである。外にあらわれ脈動するところは、寸口（橈骨動脈拍動部）、人迎（総頸動脈拍動部）、跌陽（足背動脈拍

¹⁵³ 膝下の三里巨虚。「足三里」は足の陽明胃經の經穴。下腿前面外側、膝関節の下方三寸。深部に前脛骨動脈。「下巨虚」足の陽明胃經の經穴。下腿前面外側、膝関節の下方三寸。深部に前脛骨動脈。

¹⁵⁴ 跌上。「跌」は、足の甲。足背動脈の拍動をいうのだろう。

動部¹⁵⁵）、その他の拍動部がある。絡脉（静脈）は皮下のすぐ下なので、皮膚が薄ければ見ることが出来る。さて、手の肘窩より血を取るには、先ず上腕部の上方を木綿できつくしばると、手腕に血が集まって絡筋（^{くわしん}静脈）が、太くなり手の色が紫黒となる。この木綿で絡血（静脈血）の帰る路をしめたため、血が溜まるからである。（これより上方の）肩や上腕部は、少しも張ることはない。このことから絡血（静脈血）が、逆行する（心臓へ戻る）ことが明らかに解る。

また手の尺沢の動（上腕動脈拍動部）を押すと、寸口の脉（橈骨動脈）が止まり、膝下の三里巨虚（膝下方四横指）の辺りを押すと、足背の脉（足背動脈）は拍動しない。しかし寸口（橈骨動脈拍動部）を押しても尺沢（上腕動脈拍動部）の脉は少しも止まることはない。これで血脈が四肢に向かって流れ出ていることがわかるだろう。だから動脈は（心臓から四肢へ）順行し、絡脉は（四肢から心臓へ）逆行するというのだ。これは、滑寿（伯仁）、張景岳（介賓）などが、述べていないことである。絡脉（静脈）は皮下にあり、動脈は肉の中にある、だから、痧毒を感じると、絡脉（静脈）がまずこれに影響される。だから筋（血管）の色が青くなる、また細い

¹⁵⁵ 動脈拍動部については、前出「寸口、人迎、跌陽」の注を参照。ここでいう「跌陽」は、現在の経穴の「跌陽」の位置とは異なると思われる。

筋（血管）が表出する。これは、血が瘀となって濁って死血となる証拠である。

【原文】 「本紙第六丁オモテ」

血ノ紫黒ニナリタルカ皮中ニスキテ青クミユルナリ刺メ血ヲ出スニ皆煤色ナリ刺絡編ニ西書ニモ血色紫黧ニメ氣ナキハ犯血トシ鮮緑ニメ臊臭ナルハ精血トス絡盛ニメ勁ク黒メ濁¹⁵⁶モノハ屢刺メ血ヲトルヘシ若血ヲ取ラサレハ瘀血誓¹⁵⁷「稽」¹⁵⁷留メ痺ヲナシ懈¹⁵⁸惰ヲナシ偏癢ヲナスノ「アリ此ニ依テミレハ西洋ノ人モ絡中ノ瘀血ヲ去ル」痧病治法ト同一也紅毛人ノ痺ヲナシ偏癢ヲナスト云ハ慢痧ナリ痧病ハ青筋紫筋アラハス筋色青紫ニ非レハ刺ス「ヲナスス絡ノ血末衄血トナラサレハナリ衄血トナルユエンハ厲氣ニ感シテ精血ノ凝リタルナリコレヲ刺メ犯血ヲ去寸ハ新血メクリ氣血周流メ病則イユ一痧病ハ俄ルトメ暴凶ニナリ心脈絞痛ヲナシ張悶ヲナシ昏迷ヲナス是氣為^レ毒ニ壅セラレ胸脹胃ノ中腫張スレハナリ因テ痧張ノ名アリ郭氏云張ハ氣ノ閉ナリ氣為^レ毒壅セラレ故ニ腫ヲナシ張ヲナス痧ハ穢

¹⁵⁶ 濁の字は、虫の部分がヒになっている。

¹⁵⁷ 誓は「稽」に同じ。

¹⁵⁸ 原文では、懈の字は、解の部分が解になっている。

氣ニ觸レラレ或暑氣又ハ伏熨ニ乗セラレ或時行不正ノ氣ニ動セラル者ニメ傷風傷寒ノ外感トハ別ナリ其感觸スル処口鼻ヨリ入ル故ニ肌表必矣

【読み下し】

血の紫黒になりたるが、皮中に透^すりて青くみゆるなり。刺して血を出だすに、皆煤色なり。『刺絡編』に、西書にも血色紫黒にして氣なきは死血とし、鮮絳にして臊臭なるは精血とす¹⁵⁹。絡、盛にして⁽¹⁵⁹⁾勁く黒して濁るものは⁽¹⁵⁹⁾屢刺して血をとるべし。若し血を取らざれば、瘀血稽留して痺をなし、懈惰¹⁶⁰をなし、偏癢¹⁶¹をなすのことあり。此れに依りてみれば、西洋の人も、絡中の瘀血を去るこ

159 前出『刺絡編』。論血「色黯ニ味渋ルヲ為レ有ニト大熱」。凡血一色紫黯ニメ而無^ヲ氣為ニ^ハ衄^一血。鮮絳ニメ有ニ^ハ臊^一臭。乃精^一血ナリ。」
「其絡盛而勁ク黒濁ル。乃、陽^一氣蓄^一積^一スル者也。屢^ニ刺セ^ハ竟ニ飛^ニ迸^ス。若久ク不^レ寫^セ血^ニ滋^シ稽^一留^シ。発^メ為^ニ懈^一惰、為^ニ偏^一癢。」

160 懈惰。『黄帝内経素問』、示従容論、「四支懈惰、此脾精之不行也。」『黄帝内経靈樞』、寒熱病、「身有所傷、血出多、及中風寒、若有所墮墜、四支懈惰不收、名曰體墮。」。諸橋徹次『大漢和辞典』では「(かいたい)おこたる。なまける。又、おこたり。」

161 偏癢。半身不随のこと。

と、痧病治法と同一也。紅毛人の痺をなし、偏癢をなすと云わば、慢痧なり。痧病は、青筋紫筋をあらわす。筋色青紫に非ざれば、刺すことをなさず、絡の血末に衄⁽¹⁶²⁾血¹⁶²とならざればなり。衄血となるゆえんは、厲氣に感じて精血の凝りたるなり。これを刺して死血を去る時は、新血めぐり氣血周流して、病、則ちいゆ

一 痧病は、⁽¹⁶³⁾俄爾として、暴凶になり、心腹絞痛をなし、張悶をなし、昏迷をなす。是れ、氣は毒の爲に、壅せられ、胸腹、胃の中、腫張すれはなり。因りて痧張の名あり¹⁶³。郭氏云く、「張は氣の閉なり氣は毒の爲に壅せらる、故に腫をなし張をなす¹⁶⁴。痧は穢氣

162 衄血。『素問』五藏生成論「赤如衄血者死。」。「王冰注、衄血、謂敗惡凝聚之血、色赤黒也。」。『漢方用語大辞典』に「凝固して紫黒色を呈する瘀血のこと」とある。

163 危亦林「世医得効方」卷第二。大方脈雜医科、沙証「塩湯吐法、治心腹絞痛、冷汗出、脹悶欲絶、俗謂攪腸沙。今攷之、此証乃名乾霍乱。此亦由山嵐瘴氣、或因饑飽失時、陰陽暴乱而致。急用塩湯吐法、此法救人不一。」

164 『痧脹玉衡』後卷。脹論「脹者、氣之閉也。氣為毒壅、故作腫作脹、所以治痧、先当治氣。」

165に觸れられ、或いは暑氣¹⁶⁶、又は伏熱¹⁶⁷に乗ぜられ、或いは時行不正の氣に動せらるる者にして、傷風傷寒の外感とは別なり。其感觸する處、口鼻より入る。故に肌表必ず實

【口語訳】

血が紫黒色になつてゐるのが、皮下に透けて青くみえてゐる。刺して血を出すと、みな煤のような色である。『刺絡編』に、「西洋の書物にも血色が紫暗色で氣がないものは死血とし、鮮やかな緑色で腺

165 穢氣。『漢方用語大辞典』に「きたない臭気。穢濁。」また「穢濁」は、「汚穢混濁の意味。多くは湿濁あるいは腐敗汚穢の氣、山嵐瘴氣などの形容に用いられる。また病人の排泄物、分泌物あるいは身体から発散される特殊な氣味の形容に用いられる。」

166 暑氣。夏の暑さ。

167 伏熱。『漢方用語大辞典』には、「広義では、熱邪が体内に伏しておこる病をさす。『素問遺篇』を参照。①熱が伏しておこる一般病証。たとえば晴天がつづき雨が少ない時期に、邪熱の氣を受け、伏して発せず、その後病の発する時、煩熱・咽乾・口渴引飲などの内熱症状をあらわすもの。②温病中の一種の伏邪のこと。『温熱経緯』「若し外邪をまず受けるによつて、裏にある伏熱を引動するは、必ずまず辛涼を以て新邪を解し、繼進して苦寒を以て、裏熱を清す」葉氏の言う伏熱は、章虚谷が意味を敷衍させて伏邪とした。」とす

臭（生臭い）ものは精血としてゐる。絡（静脈）が、盛んでかたく張り黒く濁つてゐるものは、たびたび刺して血を取るのがよい。もし血を取らなければ、瘀血が稽留して痺（しびれ・麻痺）を起こし、身体がなまけた状態となり、半身不随となることがある。」とある。これより分かるのは、西洋の人も、絡（静脈）中の瘀血を取るのは、痧病の治療法と同様である。西洋人が痺（しびれ・麻痺）をおこし、半身不随になるといつてゐるのは、「慢痧」である。「痧病」は、青い筋（血管）、紫の筋（血管）があらわれる。筋（血管）の色が青や紫でなければ、刺すことをしない。絡（静脈）の血が末端で瘀血（凝固して紫黒色になつた瘀血）となつてゐないからである。瘀血となる理由は、厲氣に感受して精血が凝固するからである。そこでこれを刺して死血を取り除けば、新しい血がめぐつて、氣血循環して、病は、即座に癒える。

一 「痧病」は、突然として、暴凶になり、心腹絞痛をおこし、張悶をおこし、昏迷をおこす。これは、氣が毒の為に塞がり、胸腹や胃の中を、腫張させるからである。これにより「痧張」の名があるのだ。郭志遠『痧脹玉衡書』では「張るのは氣の詰まりである。氣が毒の為に塞がれる。それで腫れて張（張つたよう）になるのだ。」といつてゐる。「痧」は、穢氣に感受したり、暑氣や、伏熱に付けいられたり、季節に合わない氣候に乱されるものであつて、傷風や傷寒といった外感の病とは別のものである。感觸するのは、口や鼻より入る。つまり肌表は必ず実してゐる。

【本紙第六丁ウラ】

【原文】

ス実スル寸ハ抉毒ノ氣表出スルヲ得スメ裏ニ入り胸脈ニ在テ氣ヲ閉脹ヲナス故ニ悶ヲナシ痛ヲナス痰喘メ呼吸ヲ攻ム甚モノハ直ニ心ヲ攻ム眩暈昏迷人事ヲ省セス命¹⁶⁸「命」¹⁶⁸斯須ニカゝル又其毒肌表ニ中リ攻ルモノトイヘドモ乃散スルヲ得ズメ肌表ノ間ニ阻滯メ肌膚腫脹シ或火ヲ以照シミレハ皮裡紅斑ヲナシ或頭面ニ升リ或四肢ニ散ス是氣塞リ血瘀スルユヘナリ以茲其治法外ニメハ刮放メ其毒ヲ疎シ内ニメハ利氣行血メ其氣血ヲ順ニス不然ハ毒裡ヲ攻メ立時ニ張死スルニ至ルナリ

一 痧病其外症ハ中風中暑瘟疫痺厥¹⁶⁹。停食ナト、紛ルヽナリ故ニサシアタリタル薬ヲ投スレバモト痧ノ所致ナレハ更ニ寸効ヲ見ハサス又他ノ雜症痧ヲ救モノ多シ是モ當病ノ治法ニテ癒ルヲ難シ先痧筋ヲミテ刮之放之或活血或解毒ノ劑ヲ用イ其痧毒ヲ解シ後本病ノ治ニ從フトキハ全快ヲ得ヘシ玉衡ヲ考ルニ其治法大畧三ツナリ痧ノ肌膚ニアルモノハ刮之メイユ痧ノ血肉ニアルモノハ放之イユ此二ツノモノハ痧

¹⁶⁸ 命。「命」に同じ。

¹⁶⁹ 「痺厥」と思われる。「痺厥」は謝觀『中国医学大辞典』、「痺厥、痺病与厥病雑合也。」。『漢方用語大辞典』に、「痺病と厥病のこと。腎氣が缺け、寒湿が内に有ることによりおこる。症状は身痛・脚氣・腫痛・頑麻をあらわす。」

【読み下し】

す。實する時は、熱毒¹⁷⁰の氣、表出することを得ずして裏に入り、胸腹に在りて氣を閉じ、脹¹⁷¹をなす。故に悶をなし、痛をなす。痰喘して呼吸を攻む。甚だしきものは、直ちに心を攻む。眩暈、昏迷、人事を省せず、命斯須¹⁷⁰にかかる。又其毒肌表に中り攻むものといえども、乃ち散ずることを得ずして肌表の間に阻滯して肌膚腫脹し、或いは火を以て照らしみれば皮裡紅斑をなし、或いは頭面に¹⁷¹升り、或いは四肢に散ず。是れ氣塞り血瘀するゆえなり。茲を

以て其治法、外にては刮放して其毒を疎し、内にては氣を利し血を行らして其の氣血を順にす。然らずんば毒裡を攻め立時に¹⁷⁰熱毒。『漢方用語大辞典』に「火毒ともいう。多くは外科腫瘍などの病証の主な病理素因。」、「温毒のこと、すなわち熱氣の偏勝により毒となつたもの。」。

¹⁷¹ 脹。『漢方用語大辞典』に「病名。脹病、鼓脹、單腹脹ともいう。腹部の膨大脹滿を主症とする。」、また「膨脹感のこと。たとえば頭脹・脇脹・腹脹など。」とある。

張死¹⁷²するに至るなり。¹⁷³

一 痧病其外症¹⁷⁴は中風¹⁷⁵中暑¹⁷⁶瘟疫¹⁷⁷痺厥¹⁷⁸停食¹⁷⁹なり

¹⁷² 張死。「張」は、『漢方用語大辞典』に「脹に通じる。腹が脹満すること。」。「張死」は、張景岳、『景岳全書』山西科学技術出版社、二〇〇六年、「卷之四十八大集本草正上 毒草部 蓖麻子」に「凡服蓖麻者、一生不得食炒豆、犯之必脹死。」とある。「蓖麻子」からヒマシ油が取れる。

¹⁷³ 『痧脹玉衡』、後卷、痧脹麻疹不同弁。「若痧脹、或因穢氣所触、或因暑氣所感、或動時行不正之氣、或乘伏寒伏熱過時而来。総不起于外傷風熱、故肌表必寒、寒則熱毒之氣既脹于胸腹腸胃之中、若更用熱飲、則熱氣适助其腫脹、無從而洩、故犯此者、有立時脹死、此不可不弁也。」

¹⁷⁴ 外症。「体の表面に發生する病状、皮膚病など。」

¹⁷⁵ 中風。『漢方用語大辞典』に「病名。卒中ともいう。突然昏倒し、人事不省となり、あるいは突然に口眼喎斜し、半身不随となり、言語不利となる病証をさす。」中風の病因に関しては時代により諸説がある。また「外感風邪の病証をさす。太陽表証の一つである。」これは、『傷寒論太陽病』「太陽病、發熱、汗出、惡風、脈緩なる者、名づけて中風という。」による。

¹⁷⁶ 中暑。『漢方用語大辞典』に、いくつかの意味が載るが、「病名。夏期の炎天下、暑邪に感じて発する急性病証。中喝ともいう。症状として、突然昏倒し、身熱煩躁し、气喘して話すことができず、

どと紛るるなり。故にさしあたりたる薬を投ずれども、もと痧の致

す所なれば更に寸效を見わざ。又他の雜症、痧を救^{（救む）}すもの多し。

是も當病の治法にて癒ゆること難し、先ず痧筋をみて之を刮し、之

を放ち、或いは活血、或いは解毒の劑を用い其の痧毒を解し、後本

病の治に従うときは全快を得べし。『玉衡』を考うるに其治法の大略

牙關緊あるいは口が開き齒がかわき、大汗あるいは無汗、脈虚數、あるいは昏迷して醒めず、四肢抽搐する。治療は涼しい所に移し、清暑・解熱・開竅の劑を投与し、さらに針灸・刮痧などの法を併用する。」とある。

¹⁷⁷ 瘟疫。『漢方用語大辞典』に、「疫癘の邪を受けて發生する多くの急性伝染病の総称である。この特徴は発病が急で病状が險悪で、非常に伝染性が強い為、大流行を引き起こしやすきことである。通常二種類に分けられる。一つは、濕熱穢濁の疫で、惡寒、壯熱、頭痛身痛、舌苔は白く粉が積もったようであり、脈數などが、主症である。今一つは暑熱火毒の疫で、高熱、煩躁きりさかれるような頭痛・腹痛吐瀉又は神昏・発斑・体に臭氣を發するなどを主症状とする。」

¹⁷⁸ 痺厥。前出。

¹⁷⁹ 停食。『漢方用語大辞典』に「食滯に同じ。」、「食滯」は、「食物が胃、腸管などに停滞している状態をさす。」

三つなり。痧の肌膚にあるものは、之を刮していゆ、痧の血肉にあるものは之を放ちていゆ、此の二つのものは痧

【口語訳】

実していれば、熱毒の気が、表出することができず体内に入る。胸腹に入つて気を塞ぎ、脹となる。それゆえ悶をおこし、痛みとなる。痰喘して呼吸を障碍する。甚だしい場合は、直ちに心（心臓）に及ぶ。眩暈、昏迷、人事不省となり、すぐに命にかかわることとなる。その毒は肌表を汚染し害するものだが、分散することが出来ず肌表の間に阻滞して肌膚を腫脹する。ある場合は、火で照らしてみると、皮下に紅斑が出来ている、ある場合は頭・面に昇り、ある場合は四肢に散る。これは、気が塞がれて血が瘀となるからである。こういうわけでその治療法は、体外は、刮放してその毒を散らし、体内は、氣の流れをよくし、血をめぐらして、氣血を順調にする。そうしなければ毒が体内を害してたちまち脹死してしまう。

一 痧病の外見症状は中風・中暑・瘟疫・痺厥・停食などと紛らわしい。ゆえに、とりあえず薬を投薬しても、もともと痧によるものなので、わずかな効果も現れることはない。また他の雑症でも、痧を治療するものが多い。これも、その病の治療法で治癒することが難しい。先ず痧筋を診察して、これを刮し（すり）、これを放出し、ある時は活血、ある時は解毒の剤を用いて、その痧毒を解毒し、そ

の後、本来の病の治療法に従えば、全快となるだろう。『玉衡』を検討すると、その治療法は、おおよそ三つある。痧が肌膚にあるものは、これを刮して治療する。痧が血肉にあるものは、これを放出させて治療する。これら二つのものは痧が浅いところにあるものである。

「本紙第七丁オモテ」

【原文】

ノ浅キモノ也痧ノ深く重キモノハ薬□¹⁸⁰ヲ兼ルニ非レハ救「アタ
ワス故二三法兼備ルニ非レハ得テ治カタシ臨病モノ心ヲ認テ痧毒ヲ
考察スヘシ

一 十指頭及郄中ヲ刺メ血ヲ出ス「内經ニ出ツ是痧病治法ノ祖也案
二古昔呉楚¹⁸¹」[楚]ノ間ノ人能内經ノ意ヲ得タルモノアリテ此法ヲ
行ヘリ其地常ニ毒虫有ヲミテ痧疹ノ症モ毒虫ノ氣ニ感ルヨリ起レリ
ト思量メ痧虫ノ名ヲ附會スルナラン南方ニ此説行レテヨリ中土ニハ
毒虫有「無キニヨリ別病ナリトシテ是ヲ唱ル者希ナリ大ナル誤ナリ
故ニ痧病トハ南方ノ俗名ト知ヘシ且¹⁸²其刺法内經ニテハ癰論ニ載

¹⁸⁰ 薬□。□は虫損。「刮」と、読める。

¹⁸¹ 楚。同「楚」。「楚」は、「古国名。春秋の一國。現在の両湖・安徽・浙江・河南南部を領有していたが、秦に滅ぼされた。」「湖北・湖南または湖北省の古称」。

¹⁸² 且。且の誤りと思われる。

タリ蓋味アルニ似タリ今全文ヲ挙テ考症ニ備フ内經ニ曰諸癰ニメ脉
 不見ハ刺十指間出レ血去必已ユ先視身之赤如小豆者取之ト云リ是
 乃痧病家ノ治法ト異ル「ナシ又曰先其發時如「食頃」而刺之一刺スレ
 ハ則衰二刺スレハ則知三刺スレハ則已不レ已刺「舌下兩脉」出血不止
 レハ刺「郄中盛經」シテ血ヲ出ス○又刺項已「下俠」¹⁸³「脊者」ヲ必已ユ
 ○如先頭痛及重者先刺「頭上及兩額兩眉間」出レ血○先

【読み下し】

の浅きもの也。痧の深く重きものは薬刮を兼ねるに非ざれば救うこ
 とあたわず。故に三法兼備^(兼ね)うるに非ざれば、得て治しがたし。

病に臨むもの、心を認^(たため)て痧毒を考察すべし。

一 十指頭及び郄中¹⁸⁴を刺して血を出だすこと『内經』に出づ。

是、痧病治法の祖也。案ずるに古昔吳楚の間の人、能く『内經』

の意を得たるものありて、此の法を行えり。其の地、常に毒蟲有る

¹⁸³ 俠。夾の誤りと思われる。

¹⁸⁴ 郄中。經穴別名 出『素問』刺腰痛論、「足太陽脈令人腰痛……
 刺其郄中。」王冰注、「郄中、委中也。」即委中。委中は、足の太
 陽膀胱經の經穴。膝後面、膝窩横紋の中点にあり、そのしたに膝窩
 動脈がある。

をみて、痧疹の症も毒蟲の氣に感ずるより起これりと思量して痧蟲
 の名を附會するならん。南方に此の説行われてより中土には毒蟲有
 ること無きにより別病なりとして是を唱る者希なり。大いなる誤な
 り。故に痧病とは南方の俗名と知るべし。且つ其の刺法、『内經』に
 ては「癘論」¹⁸⁵に載せたり。蓋し味^(おもしろ)あるに似たり。今全文を舉

¹⁸⁵ 『内經』「癘論」。『癘論』とあるが、実際はその後の「刺瘰」

に載る。以下引用箇所に傍線を附して示す。『黄帝内經素問』卷第
 十、刺癘篇第三十六、「凡治癘、先發如食頃、乃可以治、過之則失
 時也。諸癘而脈不見、刺十指間出血、血去必已、先視身之赤如小豆
 者尽取之。十二癘者、其發各不同時、察其病形、以知其何脈之病也。
 先其發時如食頃而刺之、一刺則衰、二刺則知、三刺則已、不已、刺
 舌下兩脈出血、不已、刺郄中盛經出血、又刺項已「下俠脊者、必已」。
 舌下兩脈者、廉泉也。刺癘者、必先問其病之所先發者、先刺之。先
 頭痛及重者、先刺頭上及兩額、兩眉間出血。先項背痛者、先刺之。
 先腰痛脊痛者、先刺郄中出血。先手臂痛者、先刺少陰陽明十指間。
 先足脛酸痛者、先刺足陽明十指間出血。」

又、如腰痛引項脊尻背如重状。以下の箇所については、『黄帝内經
 素問』卷第十一、刺腰痛篇第四十一「足太陽脈令人腰痛、引項脊尻
 背如重状、刺其郄中太陽正經出血、春無見血。少陽令人腰痛、如以
 針刺其皮中、循循然不可以俯仰、不可以顧、刺少陽成骨之端出血、
 成骨在膝外廉之骨独起者、夏無見血。陽明令人腰痛、不可以顧、顧
 如有見者、善悲、刺陽明於脗前三痛、上下和之出血、秋無見血。足
 少陰令人腰痛、痛引脊内廉、刺少陰於内踝上二痛、春無見血、出血

げて考症に備う。『内經』に曰く諸瘧にして脉あつわれ見ざるば十指間を刺太多、不可復也。厥陰之脈、令人腰痛、腰中如張弓弩弦、刺厥陰之脈、在臑腫魚腹之外、循之累累然、乃刺之、其病令人善言、默默然不慧、刺之三瘳。解脈令人腰痛、痛引肩、目眩眩然、時遺洩。刺解脈、在膝筋肉分間郄外廉之橫脈出血、血変而止。解脈令人腰痛如引帶、常如折腰狀、善恐、刺解脈、在郄中結絡如黍米、刺之血射以黑、見赤血而已。」

一方、『痧脹玉衡』、後卷、痧脹破迷論には、「嘗觀医林多士、業擅岐黃、深通古籍者、動輒援引『内經』諄諄不已、竟不知黄帝始製九鍼之法。以療民病、多刺少藥。即如『内經』有云「諸瘧而脈不見、刺十指間出血、血去必已先視身之赤如小豆者盡取之。又云、先其發時、如食頃而刺之、一刺則衰、二刺則知、三刺則已。不已、刺舌下兩脈出血。不已、刺郄(即)中。盛經出血、又刺項以下挾脊者、必已。如先頭痛及重者、先刺頭上及兩額、兩眉間、出血。先項背痛者、先刺之。先腰痛者、先刺郄中出血。先手臂痛者、先刺手少陰、陽明十指間。先足脛痠〔酸〕痛者、先刺足陽明十指間出血。又如腰痛引項脊尻背如重狀、刺其郄中太陽陽正經出血、刺解脈在膝筋肉分間、郄外廉之橫脈、出血、血変而止。解脈令人腰痛如引帶、如折腰狀、善恐。刺解脈在郄中結絡如黍米、刺之血射以黑、見赤血而已。經載煌煌、垂訓万古、正後人之所當相習者也。故痧多變、余不能盡述。」とある。

『黄帝内經素問』より『痧脹玉衡』の文によく一致することから、ここでは、『痧脹玉衡』を引用したように見える。

し血を出①だす、血去れば必ず已ゆ。先ず、身の赤きこと小豆の如きものを視て、之を取ると云えり。是れ、乃ち痧病家の治法と異なることなし。又曰く、「先ず、其の發せし時¹⁸⁶、食頃^②187の如くんば、之を刺す、一刺すれば則ち衰③ぐ、二刺すれば則ち知ゆ^④、三刺すれば則ち已ゆ^⑤、已えざれば、舌下の兩脉を刺し出血せしむ。止ざれば、郄中盛經を刺して血を出⑥だす。○又、項^⑦已下、脊を夾⑧むるを刺さば、必ず已ゆ。○如しくは先ず、頭、痛み及び重き者は、先ず頭上及兩額、兩眉の間を刺し血を出⑨だす○先ず、

【口語訳】

痧が深いところにあり、重度のものは薬と刮(刮痧)を併用しなければ救うことが出来ない。それゆえこの三つの治療法を備えないと、

¹⁸⁶ 先ず、其の發せし時。南京中医学院医学院編、『現代語訳 黄帝内經素問』では、「発するに先んずること」とする。

¹⁸⁷ 食頃は、時間の短いことを表す。『漢語大詞典』、「吃一頓飯の時間。多形容時間很短。」

治療するのは難しい。病に臨むものは、深く心に留めて痧毒を考察するべきである。

一 十指の指先及び郄中（委中・膝後面、膝窩横紋の中点）を刺して血を出すことは『黄帝内経』に載っている。これが、痧病治療法の

の祖（はじめ）めである。考えてみれば、昔、呉・楚の人で、よく『内経』

の意味を理解できたものがいてこの治療法を行った。そしてその地方には、常に毒虫がいるのを見て、痧疹の症も毒虫の気に害された事により起こったのだと考えて、痧虫の名をこじつけたのだ。南方にこの説がいわれてから、中土には毒虫がいないので、別の病だと考えてこれを言うものは、ほとんどいかなかった。たいへんな誤りである。痧病とは、南方の俗名だと理解するべきである。そしてまたその刺絡による治療法は、『内経』では「癰論」に載っている。意義のある様に思えるので、今ここに全文を挙げて、症を考えるために備えておく。『内経』には次のように記載される。「様々な癰で、脈がわからない時は、十指の間を刺して血を出す（刺絡する）。血を出せば必ず治る。まず身体に小豆のような赤いものをみれば、まずこれを取る」とある。つまりこれは、痧病患者への治療法と変わるところがない。また次のような記述がある。「まず、癰が発作をおこす時は、すぐさまこれを刺絡する。一刺すれば病の（勢い）衰え、二刺すれば明らかに効果が見え、三刺すれば治癒する。治癒しないようであるなら、両側の舌下の脈（舌下静脈）を刺して出血させる。それでも治らないようなら、郄中（委中・膝窩）の盛んな経を刺し

て血を出す。○さらに、項より下の、脊を夾むところ（夾脊穴）を刺絡すれば、必ず治る。○あるいは、まず頭が痛み重いものは、まず頭上および両額、両眉の間を刺して血を出す。

「本紙第七丁ウラ」

【原文】

項背痛者ハ先刺レ之先腰脊痛者先刺レ郄中出血○先手臂痛者先刺手少陰陽明十指間先足脛酸痛者先刺足陽明十指間出血○又如腰痛引レ項脊尻背如レ重状刺レ其郄中大陽正經一出血○刺解脈在膝筋肉分間郄外廉之横脉出血変而止○解脈令レ人腰痛如引帶¹⁸⁸如折腰状善恐刺解脈¹⁸⁸郄中結絡如黍米刺之血射以レ黒見赤血而已ユト云リ按ルニ郄中ト云ハ脚ノ委中ノ邊ノ一兩額ハ大陽ノ穴眉間ハ卯堂ノ穴也是ニヨツテ見レハ血ヲ出ス「上古ノ法ナリ南方土俗ノ法ノミニ非ス

刮痧法

痧毒ノ肌膚ニアルモノハ刮法ヲ用ヘシ肌膚ニ有トハ肌肉ノ間ニ隠々トメ紅點ノアラハルヲ云宜刮法ニ随フヘシ痘科鍵ニ點如癩者曰ニ夾疹一又一等瑣屑紅點隱々肌肉間者曰ニ夾痧トアリ是ハ痘瘡ニ疹ヤ

¹⁸⁸ 如折腰状。『内経』では、「常如折腰状」と作る。

¹⁸⁹ 郄中。『内経』では、「在郄中」と作る。

痧ヲ夾タルヲ云痧ノ字ハモト瑣屑紅點肌肉ノ間ニアルヲ云穢氣ニ中
リ痧ヲ生シタルモノ其毒肌膚ニアリ刮之テ其毒ヲ散スヘシ

【読み下し】

項背痛む者は先ず之を刺す、先ず腰脊の痛む者は、先ず郄中を刺し
血を出だす○先ず、手臂¹⁹⁰痛む者は、先ず手の少陰陽明¹⁹¹の十指
間を刺す、先ず、足の脛の酸痛する者は、先ず足の陽明¹⁹²十指間
を刺し血を出だす。○又如¹⁹³しくは腰痛して項脊尻背に引き重状¹⁹³
の如きは、其の郄中、太陽正經¹⁹⁴を刺し血を出だす。○解脈¹⁹⁵を

190 臂。「肩から手首までの部分。かいな。うで。」

191 手の少陰陽明。「手の少陰」、手の少陰心経は、手の小指を通
る。「手の陽明」、手の陽明大腸経は、手の示指を通る。

192 足の陽明。「足の陽明」、足の陽明胃経は、足の第二趾を通る。

193 重状。郭霞春、『『黄帝内經素問校注語釈』貴州教育出版社、
二〇一〇年に「重」、「謂沉重。」。「重状」、「重いものを背負
うよう（像背著沉重的東西一樣）」とする。

194 太陽正經。足の太陽膀胱経は膝後面、膝窩横紋の midpoint にある委
中を通る。郄中は委中の別名。

195 解脈。同「解脈」一、王冰注「解脈、散行脈也、言不合而別行
也、此足太陽之経、」以其脈如繩之解股、故名。二、指絡脈、張志

刺すは、膝の筋肉の分間、郄の外廉¹⁹⁶の横の脈に在りて、血を出だ
し、血變じて止む。○解脈、人をして腰痛ならしむること、帯を引
くが如く、腰を折るの状の如く¹⁹⁷、善く恐れしむ¹⁹⁸。解脈を刺す
は、郄中に¹⁹⁹絡を結ぶこと黍米の如きもの。之を刺さば血の射す
ること黒を以てし、赤血を見て已ゆと云えり。按ずるに郄中と云う
は、脚の委中の邊りのこと、兩額は太陽²⁰⁰の穴、眉間は印堂²⁰¹の

聡注「解脈者、散行横解之絡脈也。」。『漢方用語大辞典』には、
「解は散じて行くの意味がある。足太陽の正脈で下つて膈中に入るも
のと、その支脈の膈中に合する者はみな散じて行くとする。『素問
刺腰痛篇』「解脈は人をして腰痛せしむ。」。また「膈」は、ひ
かがみ、膝窩、膝の裏のくぼんだところ。『素問骨空論』「膝痛、
痛及拇指、治其膈。」王冰注「膈、謂膝解之後、曲脚之中委中穴。」

196 外廉。『大漢和辞典』に、「外邊」。

197 如折腰状。『内経』は、「常如折腰状」と作る。

198 『新校正』云、按『甲乙経』…善恐作善怒也。

199 郄中。『内経』は、「在郄中」と作る。

200 太陽。経穴名。奇穴（経絡に属さない）の一つ。顔面部、眉毛
の外端と外眼角との中央から後方一寸の陥凹部に取る。

穴也。是れによつて見れば、血を出だすこと上古の法なり、南方土俗の法のみ非ず。

刮痧法²⁰²

痧毒の肌膚にあるものは、刮法を用うべし。肌膚に有るとは肌肉の間に隠々として紅點のあらわるるを云う。宜しく刮法に隨うべし。

『痘科鍵』²⁰³204に「點あること、痲が如き者を夾疹と曰う。

²⁰¹ 印堂。經穴名。奇穴の一つ。顔面部、神庭（督脈）の下方、眉間中央陥凹部に取る。

²⁰² 刮痧法。『漢方用語大辞典』に、「実熱の痧脹で、邪が肌表を犯したものの治療方法。銅錢（あるいは湯匙、瓷碗）を用い、患者の脊柱両傍に香油を塗り、軽く下に向け、順に刮（こする、ひつかく）し、だんだん強くする。乾いたら再び塗り、再び刮し、紅紫斑点あるいは斑塊があらわれるのを限度とする。続いて消毒した三稜針で軽く刺し破り、紫黒血を出しつくして、痧毒を外泄する。もし、頭・額・肘・腕・腿・膝などのところを刮刺するときは、綿麻毛髪で作った刷毛を用いて、香油を塗って刮する。腹部のところは、柔軟なので食塩を用いて、これを手で擦する。」

²⁰³ 『痘科鍵』。明の朱巽撰。撰年未詳。同書を編集して痘科入門の鍵とすべく、「鍵」を書名とした。痘疹の理論、弁証、治法、予後、合併症、使用薬物等について論じる。

又一等瑣屑^(せせつ)なる紅點肌肉の間に隠々たる者を、夾痧と曰う。」とあ

り。是れは痘瘡に疹や痧を夾たるを云う。痧の字はもと瑣屑なる

紅點の肌肉の間にあるを云い、穢氣^(わいき)に中^(あは)り痧を生じたるもの、其の毒は肌膚にあり。之を刮^(か)して其の毒を散ずべし。

²⁰⁴ 『痘科鍵』に、以下の文見当たらず。引書にはない書だが、以下の記述がある。

程雲鵬撰『慈幼新書』、卷四痘瘡。見点三日訣「初見時、大小不一。有色点如沸者、曰夾痧、本方加救苦丹治之。又有一等瑣屑紅点、隱隱肉間、曰夾痧、治亦衝之。丹毒亦然。但有此癩、必正痘悅目可愛、方為痧疹之夾。不然、是痘也、最当別之。又有痘出数顆、而來疹遍身、口浄疏朗、形色紅活、現両日而尽没、見者莫不驚愕。然此疹也、非痘也。痘没必悶乱煩躁、此則寧靜、且正痘顯然、故知其為疹也。治以平劑自愈。然未没時、亦難識認。」

『慈幼新書』。兒科著作。又名『慈幼筏』。十二卷。卷首一卷。明、程雲鵬撰。刊於一七〇四年。卷首論保產、卷一論小兒稟賦、臟能、脈候及胎癥等。卷二小兒雜証。卷三〜六小兒痘瘡の弁証及治療劑。卷七麻疹、丹毒、驚癇、發熱等。卷八傷寒。卷九感冒、咳嗽、痰喘、癩、痢等。卷十食疳諸積、腹痛、瀉血等。卷十一癩疽、雜癩。卷十二、痘家応用薬性。全書对小兒の生理稟賦、臟腑特点以及各種病証証治的論述甚為詳備。其中各証還附有医案。現有清刻本、『中国医学大成』本。

【口語訳】

項背の痛むものは、まずこれを刺絡する。腰脊の痛むものは、まず郄中（委中・膝窩）を刺して血を出す。手臂が痛むものは、まず手の少陰（小指）と陽明（示指）の十指間を刺絡する。足のすねのだるく痛いものは、まず足の陽明（第二趾）の十指間を刺して血を出す。また腰痛がおこり項背・尻が引きつれ重く感じるものは、その太陽正経（足の太陽膀胱経）の郄中（委中穴）を刺し血を出す。解脈を刺すには、膝後面の筋と肉の分け目で、郄（委中）の外側の横の脈に在るので、そこを刺絡し、血に変化があれば止める。解脈は、人に腰痛を起こさせるが、それは、帯を引くようであり、腰が折られるようで、人は、よく驚恐する。解脈を刺すには、郄中（委中）に出来た黍米のような絡（血絡）を刺す。これを刺すと、黒い血が噴き出る。赤い血になれば治癒だ。」とある。

これらを考察すると、郄中と言っているのは、足の委中穴の辺りのことで、両額は太陽穴、眉間は印堂穴である。以上のことより察すれば、血を出すこと（刺絡）は上古の方法である。ただ南方土俗だけの方法ではない。

刮痧法（痧を擦る治療法）

痧毒が肌膚にあるものは、刮法を用いるのがよい。「肌膚に有る」というのは、筋肉の間に、はっきりはしないが、かすかに紅い点が見えるのをいう。このようなときは刮法を行うのがよい。『痘科鍵』の記載に「点々と汗疹あせものような発赤があるのを、「夾痧」という。また

最も微細な発赤が筋肉の間にかすかに見えるものを、「夾痧」という。」とある。これは痘瘡に発疹や痧が伴うものをいう。「痧」という字は元々微細な発赤が筋肉の間にあるものを示す。穢気に害され痧を生じたものは、その毒は肌膚にある。これを刮（こ）ってその毒を放散しなくてはいけない。

【本紙第八丁オモテ】

【原文】

一 刮ハスルケツルト訓スモト千金方ニ出ツ千金方疥癬下ニ先刮レ瘡令レ傷次ニ以蜜和葉傳（オモテ）クト云リ是疥癬ヲスリヤフリテ傳葉スル「疥癬痧疹同類ナリ江南アタリ痧病多キ処ニテ土人常ニ為ス」病源候論ヲ閲スルニ人痧毒ニ犯ルト豆粒黒子ノ如ク黍「黍」粟ノ如ク或赤斑ヲナシ或芒刺ノ痛力如キモノ木綿ノ糸或苧麻ヲ麻油ニヒタシ刮ル「痧毒治療ノ古法ナリ玉衡ノ医按中ヲ考ルニ肌膚痧擁セハ尤重ニ油塩ト云リ是ハ肌肉少ハレテ皮間ニ紅點ヤ痧子ナトノ見ユルヲ云又起タシメテ視之レハ遍身痧點皆活動メ兩腿ニ流注メ皮肉紅紫因テ腿灣ノ痧ヲ刺スト云リ故ニ其身背手足ヲミテ紅点アルカ又肌膚ハレ

205 傳。「傳」（つける）の誤字と思われる。

ノ表ニ壅鬱²⁰⁶。メアル故也刮之シテ其毒散スレハイユ玉衡ニ肌膚ノ厚薄ニヨリテ刮法異ナリ

一 背脊頸骨ノ上下及胸前脇肋兩背肩臂ノ痧ハ銅錢又ハ真鍮ノ刮子^{ハッ}

脚ニ香油ヲ蘸テスリケツリ疹疹^{マヤ}アラバスリヤフリ擁腫紅点ノ

【読み下し】

一 刮^{カク}は、する、けずると訓ず。もと『千金方』に出づ。『千金方』

疥癬下に、「先ず瘡^{カク}を刮し傷^{ケガレ}らしむ、次に蜜を以て薬に和し

206 「鬱」と読める。

207 疹疹。文脈より「痧疹」と考えられる。

208 瘡。『漢方用語大辞典』に「瘡瘍の簡稱」など。「瘡瘍」は、「体表面上の外科および皮膚疾患の総称を瘡瘍とし、腫瘍および潰瘍のある疾患も含まれる。たとえば癰・疽・疔瘡・癰腫・流注・流痰・瘰癧などが含まれる。これらは臨床上きわめて多い疾患である。多くは毒邪が内侵し、邪熱が血をあぶつたために気血が壅滞してひきおこされるものである。」

傳³く²⁰⁹210と云えり。是れ疥癬をすりやぶりて、傳³211薬するこ

と、疥癬、疹疹、同類なり。江南あたり痧病多き處にて、土人、常に爲すこと、『病源候論』²¹²を閲するに、「人痧毒に犯さると、

209 傳は傳の誤りか。

210 曹炳章編、唐・孫思邈撰、『備急千金要方』卷二十三痔漏疥癬第四、中国医学大成統集十一、上海科学技术出版社、二〇〇〇年、一六七五頁。に「又方 羊蹄根於磨石上。以苦酒磨之。傳瘡欲傳先刮瘡，以火炙乾後，傳四五過。」³千金翼云搗搗羊蹄根，著瓷器中，以白蜜和塗之。若瘡處不傷，即不瘡」³とある。四庫全書の其れとは、少し異なる。

「又方 羊蹄根於石上以苦酒磨之以傳瘡欲傳先刮瘡以火炙乾後傳四五過。」³千金翼云搗羊蹄根著磁器中以白蜜和臨用先刮瘡令傷次以蜜和者傳之如炊一石米久拭去更以三年大蒜醋和塗之苦刮瘡處不傷即不瘡」³

211 傳は傳の誤りか。

212 『諸病源候論』卷之二十五、蠱毒病諸候（上凡九論）、八、沙虱候「山内水間有沙虱、其蠱甚細、不可見。人入水浴及汲水澡浴、此虫著身、及陰雨日行草間亦著人、便鑽入皮裏。其診法、初得時、皮上正赤、如小豆黍粟、以手摩赤上、痛如刺。」

豆粒黒子の如く、黍粟(あむむ)の如く、或いは赤斑をなし、或いは芒刺(211)

の痛みが如きもの、木綿の絲、或いは苧麻を麻油にひたし、刮(か)す

ること、砂毒治療の古方なり²¹⁴²¹⁵。『玉衡』の醫按²¹⁶中を考

²¹³ 芒刺。「芒」は、「植物のススキ、その葉先。(穀物の実の)

のぎ」。「芒刺在背」は、「(のぎが背中に刺さっている) 針のむしろに座つたようである。」

²¹⁴ 明・朱橚撰『普濟方』。卷二百三、霍乱門、痧証「出危氏方、治痧証。用苧麻蘸水。於頸項兩肘及臂。兩膝腕等處。夏掠見得血凝

皮膚中。紅点如粟粒狀。然後蓋良法」。明・李時珍『本草綱目』、菜部第二十七卷、菜之二苦菜、「中沙虱毒、沙虱在水中、人澡浴則

著人身、鑽入皮裏。初得皮上正赤、如小豆、黍、粟、摩之痛如刺、三日後寒熱癢瘡毒、若入骨殺人。嶺南多此、即以茅葉刮去、以苦菜汁塗之、佳。『肘后方』。

²¹⁵ 此処で述べられる方法は、以下の記事に拠る。『痧脹玉衡書』、痧原論「刮痧法背脊、頸骨上下及胸前脅肋、兩背肩臂痧、用銅錢蘸香油刮之、或用刮舌眠子腳蘸香油刮之。頭額、腿上痧、用綿紗線或麻線蘸香油刮之。大小腹軟肉內痧、用食塩以手擦之。」

²¹⁶ 醫按。医案。『日本国語大辞典』には「医療の方法についての考え。また、それをしるしたもの。」

うるに、肌膚痧擁せば尤も油鹽を重んず、と云えり。是は肌肉²¹⁷

少しくはれて皮間に紅點や痧子などの見ゆるを云う。又、起たしめ

て之を視れば遍身痧點皆活動して兩腿に流注して皮肉紅紫、因りて腿灣の痧を刺すと云えり。故に其の身背手足をみて紅點あるか、又

肌膚はれ痧疹(しやせん)もの出るものは、乃ち痧病の一見症也。是痧毒、裏に

入らず肌膚血肉の表に壅鬱してある故也。之を刮(か)して、其の毒散ずればいゆ。『玉衡』に肌膚の厚薄によりて刮法異なるなり。

一 背脊、頸骨の上下、及び胸前、脇肋、兩背肩臂(うで)の痧は銅錢又

は眞鍮の刮子脚(へら)に香油(しよあぶら)を蘸してすりけずり痧疹²¹⁸ あらはずり

²¹⁷ 肌肉。『漢方用語大辞典』に、「肌とは肉と同義で体表に接する筋肉をさす。深淺からいえば、毫毛腠理、皮膚、肌肉となり、次いで脈、筋、髓の順となる。」

²¹⁸ 原文は、「疹疹」。『痧脹玉衡書』、痧原論「刮痧法背脊、頸骨上下及胸前脅肋、兩背肩臂痧、用銅錢蘸香油刮之、或用刮舌眠子腳蘸香油刮之。頭額、腿上痧、用綿紗線或麻線蘸香油刮之。大小腹軟肉內痧、用食塩以手擦之。」拠つて、「痧」に改める。

やぶり、擁腫²¹⁹し紅き點の

【口語訳】

一 「刮」は、する、けずると訓む。^(上)元は『備急千金要方』に出ている。『備急千金要方』の疥癬下に、「まず瘡を刮しやぶる。次に蜜を葉に混ぜて塗る。」とある。この疥癬を擦ってやぶり、葉を塗布するという記述は、疥癬、痧疹と同じことである。江南地方の痧病が多い場所で、土地の人が、常々行っていることは、『諸病源候論』を読めばわかる。人が痧毒に犯されると、「豆粒ほどの黒子のよ

うな、黍粟^(金ひ、あむ)のような、赤斑を生じ、針で刺すような痛みがある。

これを木綿の糸や、苧麻(麻糸)を麻油(ゴマ油)にひたして、こするといのは、砂毒治療の古くからの治療法である。『痧脹玉衡』の医案を読めば、「肌膚に痧があるとき、最も重要となるのは、油塩である。」と言っている。これは、肌肉(体表)が、少しはれ、皮間(皮膚表面)に紅い点や痧の微小なものなどの見える⁽²⁾のを言い、「起立させて、その人を視れば、全身の痧点が皆活発で、両脚に流注し、その皮肉は紅紫となっている、これにより、腿湾(膝窩)にある痧を刺(刺絡)す」と言っている。それゆえ、身背手足をみて、紅い

²¹⁹ 擁腫。ふくれていること。腫れていること。

点があるか、肌膚はれて細かな痧疹が出るものは、痧病の一症状である。これは痧毒が、体内に入らないで、肌膚血肉の表面に壅鬱しているからである。これを刮^(刮)って、その毒を散ずれば治癒する。『痧脹玉衡』では、肌膚の厚薄によって刮法が異なっている。

一 背脊(背中)、頸骨(首の骨)の上下、及び胸前、脇肋、両背肩腕の痧は、銅錢又は真鍮のヘラ脚に、ゴマ油をつけすりけずり、痧疹があれば、すりやぶり、隆起した紅い点状のものは、

【本紙第八丁ウラ】

【原文】

モノハ紫疹ヲ起スヲヨシトス

- 一 頭額腿上ノ痧ハ棉紗線或麻線ニ香油ヲヒタシテ刮之
- 一 大小脈軟肉内ノ痧ハ食塩ヲ指ニツケテ擦スルヘシ
- 一 痧疹紅点等ニ拘ハラズ手ハ曲池足ハ委中ノ邊ヲ刮スル「幼々集成二詳也集成ハ清ノ陳飛霞所撰集成霍乱下日凡発痧手足厥冷腹痛用温水一碗令病人伏卧橙⁽²²⁰⁾「莞」⁽²²¹⁾上以手蘸水拍其兩膝⁽²²¹⁾「膝」⁽²²¹⁾灣名委中穴看⁽²²¹⁾「其紫黒點現」以針出惡血即愈▽脾脉 肝脉 腎脉 皆從此委中穴過△

²²⁰ 橙。「莞」に同じ。(背もたれのない)腰掛け、床机。

²²¹ 膝は「膝」に同じ。

三陰脉又法以香油拍两手曲池穴即肘内灣処以苧麻煎油熨之刮^二起紫疹^一立刻即愈[▽]肺脉 心脉 心包絡脉皆從此曲池而過[△]以上所為亦疎散之意也ト云リ拍

ハ拊^{ナール}ナリ刮ト同シ是頭額背版ヲミルニ肌膚痧擁ノ処ナリ又委中曲池ノ辺痧筋アラワレズ故委中曲池ノ処ニ於テ刮ス手ノ臂灣ハ肺脉心脉心包絡ノ三脉ノ過ル処又足ノ膝灣ハ脾脉肝脉腎脉ノ三陰脉ノ過ル処ナルユヘ温水又ハ香油ニテ熨之刮之トキハ其經脉ノ氣メクリ痧

【読み下し】

ものは紫疹を起すをよしとす。

一 頭額腿上の痧は棉紗線²²²或麻線²²³に香油をひたして之を刮す。

一 大小腹²²⁴の軟らかき肉の内の痧は、食鹽を指につけて擦するべし。

一 痧疹、紅點等に拘わらず、手は曲池、足は委中の邊りを刮する

こと『幼々集成』に詳^(註)らか也。『集成』は清の陳飛霞撰する所、『集

²²² 綿の紡績糸。綿糸。

²²³ 麻糸。苧麻。

²²⁴ 大小腹。「大腹」、腹部、臍上、中脘の部位名。「小腹」、腹部、臍下部。

成』霍亂下²²⁵に曰ク「凡そ痧を發すれば、手足厥冷し、腹痛む、

温水一碗を用い病人をして^(上)凳²²⁶上に伏臥しめ、手を以ちて水に

蘸^(下)し、其の兩膝灣の名は委中穴を拍つ、其の紫黒點現るを看、針を以ちて惡血を出ださば、即ち愈ゆ（脾脉 肝脉 腎脉脈 三陰脈

²²⁷ は皆此委中穴從り過ぐ）又法、香油を以て両手曲池穴を拍つ、

即ち肘内灣の處。苧麻を以て油に蘸し之を^(下)熨²²⁸く、起これる紫疹

²²⁵ 曹炳章原輯、張年順等主校、清・陳復正編撰『幼幼集成』卷二霍亂証治、中国医学大成第七冊、中国中医薬出版社、一九九七年、一〇七三—一〇七四頁。に、「凡そ痧手足厥冷、腹痛、用温水一碗、

令病患伏臥凳上、以手蘸水、拍其兩膝灣、名委中穴、看其有紫黒點現、以針刺出惡血即愈（脾脉、肝脉、腎脉、三陰之脈皆從此委中穴過。）又法、以香油拍両手曲池穴、即肘内灣處、以貯麻煎油熨之、刮起紫疹、立刻即愈。（肺脉、心脉、心包絡脈皆從此曲池而過。以上所為、亦疎散之意也。）」

²²⁶ 凳。背もたれない腰掛け。

²²⁷ 脾脈 肝脈 腎脈 三陰脈。足太陰脾經は膝の内側を、足厥陰肝經は膝窩内側を、足少陰腎經は膝窩内側縁をそれぞれ通る。

²²⁸ 熨は、軽くたくたく、打つこと。

を刮すれば立刻にして、即ち愈ゆ。(肺脉 心脉 心包絡脉²²⁹)

皆此の曲池從り過ぐ。以上の所爲も亦、疎散の意也」と云えり。拍

は拊^(なでる)なり、刮と同じ。是れ頭、額、背、腹をみるに、肌膚に痧擁

の處なり。又委中、曲池の邊り痧筋あらわれず、故に委中曲池

の處に於いて刮す。手の臂灣は、肺脉、心脉、心包絡の三脉の過る

處、又足の膝灣は脾脉、肝脉、腎脉の三陰脉の過る處なるゆえ、

温水又は香油にて之を蔓し之を刮するときは、其の經脉の氣めぐり

【口語訳】

紫色になるまでこするのがよい。

一 頭部、額、腿上の痧は、綿糸、麻糸を、ゴマ油にひたしてこするのがよい。

一 腹部の軟らかい肉の内にある痧は、食塩を指につけてこするの

²²⁹ 肺脉、心脉、心包絡脉。手太陰肺経は肘関節の内側前縁を、手少陰心経は肘関節屈局面を、手厥陰心包経は肘関節屈曲面の正中を、それぞれ通る。

がよい。

一 痧疹、紅点などに拘わらず、手は曲池、足は委中の辺りを刮する(こする)ことは、『幼々集成』に詳しい。『幼々集成』は清の陳飛霞があらわした書である。この『幼々集成』霍乱下に以下のような記述がある。「一般的に痧を発すると、手足厥冷し(四肢の末端から冷え)、腹痛がする。患者を床几の上に伏臥させ、ぬるま湯一碗を用いて、手をこの湯に浸し、其の両膝裏の委中穴という名の場所を

拍²³⁰つ、紫黒の点があらわれると、針を用いて悪血を出せば、速やかに治癒する。(脾脈、肝脈、腎脈の(足の)三陰脉はすべてこの委中穴を通る。²³⁰)別法として、ゴマ油で両手の曲池穴、すなわち肘関節屈曲面を拍つ。苧麻を油に浸して軽く叩く、生じた紫疹をこすれば速やかに治癒する。(肺脈、心脈、心包絡脈(手の三陰経脈)は、皆この曲池を通る。)これらの法もまた疎散を目的する。」という。拍(うつ、たたく)は、拊(うつ、なでる)であり、刮(けずる、こそげる)と同じである。頭、額、背、腹を診ると、痧の有る箇所はその肌膚である。また委中や曲池の辺りに痧筋^{すじ}はみえない。しかしながら委中、曲池の場所を刮す。それは肘関節屈曲面は、肺脈、心脈、心包絡脈の三脈の通るところであり、また足の膝関節屈曲面²³⁰ 委中穴を通る。委中穴は、膝窩中央。足三陰脈は、膝関節内側及び後面を通る。

は脾脈、肝脈、腎脈の三陰脈の通るところだからであり、ぬるま湯やゴマ油を用い、この部位を覆し（たたき）、刮す（こする）れば、その経脈の気がめぐって痧毒が外へ発散して、

「本紙第九丁オモテ」

【原文】

毒外へ發シテ紫黒点ヲ生シ又□「ハ」²³¹紫疹ヲ生ス其紫疹黒点ヲ刺メ血ヲ出スナリ以上所致ハ疏散之意ナリトコトハリタル処ニテ刮スルノ儀會得スヘシ

烙法

身背ヲ看テ紅點アルモノハ烙法ヲ用ヘシ又焯トモ云

一 烙スルコトハ入門正傳金鑑何レニモアリ香油ヲ以燈照シ身背ヲミヨ紅點アラハ皆烙スヘシト云リ又幼々集成ニ乾霍乱即絞腸痧宛在須臾其身上ヲ看テ紅点アラハ燈火ヲ以紅点ヲ焯スヘシト云リ又濟急方ニ攪腸痧痛陰陽腹痛手足冷但身上有紅點以燈艸蘸油點火焯於點上トアリ故交腸痧又卒暴「暴」昏沉スルノ類其身背ヲ看テ其紅点アルモノハ燈中ヲ油ニヒタシ火ヲ点メ其紅点上ヘツキツケベシ灸スル如ニ久ク保モノニ非ス手マワシ早クスルナリ是其毒ヲ温散シ昏迷ヲ醒ス也皆烙スヘシトアル皆ノ字ニテイク処ニテモ烙スル「」ヲ知ヘシ玉衡中ニ一子胸版

²³¹ □。虫損。残部から、ハと読める。

【読み下し】

毒、外へ發して紫黒點を生じ、又は紫疹を生ず、其紫疹黒點を刺して血を出すなり。以上の致す所は、「疏散²³²の意なり」とことわりたる處にて、刮するの儀、會得すべし。

烙法²³³

身背を看て、紅點あるものは、烙法を用うべし、又焯²³⁴とも云う。

一 烙することは、『入門』²³⁵『正傳』²³⁶『金鑑』²³⁷何れにも

²³² 疏散。「分散する。」

²³³ 烙法。『漢方用語大辞典』に、「火針の一種である。その用法には二つある。一、古代ではこの種の方法は化膿した瘡瘍の治療に常用し、手術の代わりに用いられた。これは出血をおこさない。現代で用いている電刀の作用に類似したもの。二、一定の穴位上に火針を行う方法で、点烙ともいう。」

²³⁴ 焯。「焼く。焦がす。」。『黄帝内经素枢』、卷二、官針第七、「九日焯刺、焯刺者、刺燔針則取痹也。」。焯鍼は、火針、燔針ともいう。

²³⁵ 『入門』は、『醫學入門』のこと。

²³⁶ 『正傳』は、『醫學正傳』のこと。

²³⁷ 『金鑑』は、『醫宗金鑑』のこと。

あり。「香油を以て燈照し身背をみよ、紅點あらば皆烙すべし」と云えり。又『幼々集成』に「乾霍亂、即ち絞腸痧なり。死は、須臾じゆちゆ在り。其の身上を看て紅點あらば燈火を以て紅點を焯やいすべし」と云えり。又『濟急方』²³⁸に「攪腸痧痛、陰陽腹痛、手足冷え但だ身上に紅點有るは、燈草²³⁹を以て油に蘸し、火を點じ點上に焯す」とあり。故に交腸痧、又卒暴昏沉²⁴⁰するの類たぐひ、其の身背を看て其紅點あるものは燈草を油にひたし、火を點じて其紅點上へつきつけ「る」べし。灸する如くに久しく保つものに非らず、手をまわし早くするなり。是れ其の毒を温散し、昏迷を醒す也。皆、烙すべし、引用したと思われる。

²³⁹ 燈草。「ランプの灯心、灯心草（イグサ）の茎の中心部分を用いる。」

²⁴⁰ 昏沉。昏昏沉沉に同じ。もうろうとしていさま、こんこんとして目のさめないさま。

とある。皆の字にて、いく處にても烙することを、知るべし。『玉衡』中に「一子、胸腹

【口語訳】

紫黒の点が生じたり、紫疹を生じる。この紫疹や黒点を刺して血を出すのである。これらの治療法は、「疏散（分散）の目的である」と説明している。このことから、「刮の治療法」を、会得しなければならぬ。

烙法（焼く治療法）

身背を診て、紅点のあるものは、烙法を用いるのがよい。この方法は、焯やい（焼く）とも云う。

一 烙する法は、『医学入門』『医学正伝』『医宗金鑑』どの医書にも記載がある。しよまおん「香油を用い、灯を照らし身背を見る。紅点があれば、すべて烙するとよい」とある。また『幼々集成』に、「乾霍亂は、すなわち絞腸痧であり、死が近づいている。その身体を見て紅点があれば灯火を用いてその紅点を焯やいするとよい。」とある。又『濟急方』に「攪腸痧痛、陰陽腹痛み、手足冷える。身上に紅点有れば、灯心を、油に浸し、火を点じ、紅点上に焯する。」とある。それゆえ、交腸痧、あるいはにわかに意識朦朧となると言うような場合、その人の身背を看て、紅点があれば、灯心を油にひたし点火して紅点上へ

つきつけるのがよいのだ。灸をするような長い時間、保つのではく、手をまわして素早くするのである。これで、その毒を温散して、昏迷となった意識を覚ますのである。「皆、烙すべし」とある。皆の字があるので、何カ所でも烙することが、できるとわかる。『痧脹玉衡』の中に、

〔本紙第九丁ウラ〕

【原文】

飽悶昏沉不醒痧筋不現但微ク麻疹ノ形アリ左脈沉細右寸亦伏ス余思ニ麻疹ノ脈ハ不レ如レ是乃灯心ヲ以菜油ニヒタシ火ヲ點メ焯之即醒ト云リ是法トスヘシ又集成中ニ全身神火ノ法及夏禹鑄ノ臍風火法アリ余常ニ試ルニ妙効アリ

放痧法

痧ノ血肉ニアルモノハ放法ニ從ヘシ今古人刺メ血ヲ出ス例ヲ載セ徵ス
一 放ハ發ナリ針ヲ刺メ血ヲ出スコト凡痧病ハ青筋紫筋出ツ或一処ニ現シ或數処ニアラハル悉針メ惡血ヲ去ル其後証ニヨリ薬ヲ用ハフニ一ヲ失セスト云リ痧筋ノ現スル処ハ手ハ臂ノ灣尺沢ノ前後足ハ腿ノ灣委中ノ穴ノ邊ヲミルヘシ青筋アラワル又細筋アリ深青色或紫色或深紅色又肌膚白嫩ノ者ハ紫紅色モアリ是痧筋ナリ刺之ハ紫黒ノ毒血出ルナリ刺メ毒血ヲ去ルヘシ余常ニ病人ヲ視ルニ青緑筋ノモノ多シ紫筋アラワルモノ有レトモ細筋ニテ刺カクシ唯青緑筋ヲ視ハ

刺スヘシ

【読み下し】

飽悶し、昏沉して醒(さめ)ず。痧筋現れずして但、微(すこ)しく麻疹の形あり（あるのみ）。左の脈は沉241にして細242。右の寸243も亦た、伏244す。余、思うに麻疹の脈は是の如きに不(おと)ず。乃ち燈心を以て

²⁴¹ 沉。『漢方用語大辞典』に、「沉脈」は、「脈象の一種。この脈は軽くとると応じないが強く押さえると得られる。病が裏にあることを示している。沈でしかも力のあるものは裏実、沈で力のないものは裏虚である。八裏の脈で陰脈である。」

²⁴² 細。『漢方用語大辞典』に、「細脈」は「脈象の一つ。細くまつすぐで軟らかく、形が糸のようで、また髪の毛のように感じる脈。数脈に比べてややつきりしている。主に気血の両虚あるいは諸虚勞損のときにあらわれる。」

²⁴³ 寸。前腕の遠端にあり、寸口ともいい脈を診る箇所。寸口を更に寸、関、尺の三部に分け脈を診る。

²⁴⁴ 伏。『漢方用語大辞典』に「伏脈」は、「脈象の一つ。脈来は隠れ伏しているようで、強く按压して骨につくくらいにして、はじめて得られる。甚だしければ、伏してあらわれない。厥証、激痛、邪氣が内閉した病証などにみられる。」

菜油にひたし火を點じて之を焯せば、即ち醒む²⁴⁵。」と云えり。是れ法とすべし。又『集成』²⁴⁶、中に「全身神火の法」²⁴⁷及び「夏禹鑄の臍風火法」²⁴⁸あり。常に試みるに妙效あり。

²⁴⁵ 『痧脹玉衡書』痧脹類麻疹に、「張省原子、胸腹飽悶、昏沉不醒、痧筋不現、但微有麻疹形、脈左。關沉細如無、右寸亦伏。餘思麻疹脈不若是、令其家人用燈心蘸菜油點火體之、即醒、但飽悶未解、用寶花散、加沉香、蒲黃、清茶微冷飲之、付奏凱和解飲、減山藥、人參、甘草、加桃仁、紅花、治之而痊。」

²⁴⁶ 前出、曹炳章原輯『幼幼集成』卷一、臍風論證、一〇三二—一〇三六頁。に、「用火口訣」、「集成神火圖」(卷末図2、3参照)、「集成神火歌」が、載る。

²⁴⁷ 『幼幼集成』卷一、臍風論證、集成神火歌「仙傳神火天然理、始自角孫瘦脈起、聽宮曲鬢本神旁次及天容仍右取。頤會承漿左肩回井、曲池合谷諸邪屏、氣關已過至神門、右亦如之昏可醒、左乳根中七熇始、右亦如之何待齒。臍下陰交續命關、平平三點凶危止。脊中身柱至長強、肺俞陽陵承山當。昆侖解溪邱墟穴、湧泉右亦效之良。(前音恕)」。卷末図を参照。

²⁴⁸ 『幼幼集成』卷一、臍風論證、切忌火者、一〇三五頁。に「夏禹鑄曰、臍風初發、吮乳必口鬆、兩眼角挨眉心處、忽有黃色、宜急治之、治之最易、黃色到鼻、治之仍易、到人中、承漿、治之稍難、口不撮、微有吹噓、猶可治也。至唇口收束鎖緊、舌頭強直、不必治矣。一見眉心鼻準有黃色、即用燈火於頤門一熇、人中、承漿、兩手大拇指端少商各一熇、臍輪繞臍六熇、臍帶未落、於帶口一熇、既落、

放痧法

痧の血肉にあるものは、放法に従うべし。今、古人刺して血を出だす例を載せ²⁴⁹。

一 放は發なり。針を刺して血を出すこと。「凡そ痧病は、青筋紫筋に出づ。或いは、一處に現わし、或いは、數處にあらわる。悉く^(悉く)針をして惡血を去る。其の後、證により藥を用いば、萬に一を失せず²⁴⁹。」と云えり。

痧筋の現する處は、手は臂^むの灣、「尺澤」の前後、足は腿^{おね}の灣、「委中」の穴の邊りをみるべし。青筋あらわる、又細筋あり。深青色、

於落處一熇、共一十三熇、風便止而黃即退矣。豫按、古今燈火、惟上全身火、有經有府、有理有法、無有出其右者、第火穴多、恐倉卒之際、在嫻熟者不難、倘素未經練者、一時不能用、故附夏氏臍風火圖於此、庶忙迫之時、可以濟急。此火亦曾經驗、第不及全身燈火耳。」とあり、「夏禹鑄臍風火圖」が附される。卷末図4を参照。

²⁴⁹ 『痧脹玉衡書』、放痧十有に、「凡痧有青筋紫筋、或現於數處、或現於一處、必須用針刺之、先去其毒血、然後據痧用藥。治其脾肝腎及腸胃經絡痧、萬不失一。」。

或いは紫色、或いは深紅色、又肌膚、白嫩^{はくどん}²⁵⁰の者は紫紅色もあり。

是れ痧筋なり。之を刺さば紫黒の毒血出るなり。刺して毒血を去るべし。余、常に病人を視るに青緑筋のもの多し。紫筋あらわるもの有れども細筋にて刺しがたし、唯だ、青緑筋を視れば刺すべし。

【口語訳】

「二人の子どもが、胸腹部が、膨満して悶え、意識がもうろうとして、醒めなかった。痧筋は現れなかったが、たゞ少し麻疹が見られた。左の脈は「沉」にして「細」。右の寸もまた「伏」であった。私（郭志遠）が思うに、『麻疹の時に出る脈は、このような脈ではない』。そこで、灯心を菜種油にひたし、火をつけて、これを焯したところ、直ちに覚醒した。」と言っている。これは治療法とするべきである。又『幼々集成』の中に「全身神火の法」および「夏禹鑄の臍風火法」がある。私（宗説）が、常に試みて妙効があった。

放痧法（痧を放出する治療法）

痧が血肉にあるものは、放法に従うのがよい。今ここに、古人が刺して血を出す例を記載、提示する。

一 放とは発の意味である。治療法としては針を用い刺して血を出す。「大概、痧病は、青筋や紫筋として現れる。また、ある時は一カ

²⁵⁰ 嫩が、「（植物の芽・果実や人の肌などが）若い、柔らかい、みずみずしい」ことから白嫩は、「白く柔らかい」こと。

所に現れたり、またある時には数カ所に現れたりする。これらに、ことごとく針をして悪血をとり去る。その後、症状により薬を用いれば、万に一つを失するということはない。」とある。

痧筋の現れる部位は、手は肘関節屈曲面、「尺沢穴」の前後、足は膝関節屈曲面、「委中穴」であり、この辺りを見るとよい。青筋があらわると、また細筋もある。色は、深青色、紫色、深紅色など、又肌膚が白く柔らかい者の場合は、紫紅色のこともある。これらが、痧筋である。これを刺すと紫黒の毒血が出る。刺して毒血を取り去ること。私（宗説）は、常々病人を診察すると青緑筋のものが多し。紫筋が現れることもあるが、細筋なので刺すのが困難である。ただ青緑筋を見れば、これを刺すと良い。

【本紙第十丁オモテ】

【原文】

回春ノ青筋ヲミルニ種々云処ノ病症アルモノ曲沢尺沢ノ邊ヲミテ青筋アラハルヽモノハ青筋病ト名付乃刺メ血ヲ出ヌ別ニ見ル処アルニアラス只臂灣ノ青筋ヲ目的トメ名付タル病ナリ玉衡ニ放痧スルトコロ十処アリ

- 一 在頭頂心百會穴 一 在^て卯堂²⁵¹

²⁵¹ 卯堂。印堂の誤り。

- 一 在两大阳穴
 - 一 在舌下两旁
 - 一 在两手十指頭
 - 一 在两足十指頭
 - 一 在喉中两旁
 - 一 在双乳
 - 一 在两臂灣
 - 一 在两腿灣
- 一 在頭頂心トハ百會前頂ノ邊挑ク破テ血ヲ出ス以痧氣ヲ洩スナリ
 青紫筋ヲ見テ刺ニアラス針其穴ニ中ルトキハ黒血奔リ出ツ筋ミヘサル
 処故其穴ニ中ル「カタシ意ヲ用テ刺ストキハ違」ナシ○医案中ヲ
 閱ルニ一男發熱昏沉腰脇間麻疹ノ形影アリ其六脉歇指ス昏沉氣喘ス

【読み下し】

『回春』²⁵²の青筋をみるに、種々云う處の病症あるもの、曲澤・尺澤の邊りを見て青筋あらわるるものは、青筋病と名付け、乃ち刺して血を出す。別に見る處あるにあらず。只、臂灣の青筋を目的として名付けたる病なり。『玉衡』に放痧するところ十處あり²⁵³。

- 一 頭頂心は百會穴に在り。
- 一 兩太陽穴に在り。
- 一 舌下の兩旁に在り。
- 一 一手の十指頭に在り。
- 一 兩足の十指頭に在り。
- 一 印堂に在り。
- 一 喉中の兩旁に在り。
- 一 雙つの乳に在り。
- 一 兩臂の灣に在り。
- 一 兩腿の灣に在り。

²⁵² 『回春』は『万病回春』。

²⁵³ 『痧脹玉衡』、「放痧有十」に拠る。

一 頭頂心に在りとは、百會前頂²⁵⁴の邊り挑^ひク。破りて血を出す。以て痧氣を洩すなり。青紫筋を見て、刺すにあらず。針、其穴に中るときは、黒血奔^はリ出ず。筋みえざる處、故其の穴に中ることか^{もた}たし。意を用いて刺すときは違ふことなし。○醫案中を閱するに、「一男、發熱、昏沉、腰脇間に麻疹の形影あり。其の六脉歇指す。昏沉、氣喘す

【口語訳】

『万病回春』の青筋の記述をみると、種々の病症を挙げているが、「曲沢」「尺沢」の辺りを見て、青筋が現れているのを、青筋病と名付けて、刺して血を出している。他に見るところがあるわけではない。只、肘関節屈局面の青筋を目標として名付けた病である。さて『痧脹玉衡』に放痧を施術するとしている部位が十箇所ある。

- 一 頭頂心は百會穴にある。(頭頂正中の百會穴)
- 一 印堂にある。(眉間 両眉の間)
- 一 兩太陽穴にある。(左右眉尻それぞれの外方一寸、別説半寸)
- 一 喉中の両旁にある。(ノドの中の両脇)
- 一 舌下の両旁にある。(金津・玉液、左右の舌下静脈)

²⁵⁴ 前頂。百會と同じ督脈に属する経穴で、百會の前方二・五寸に取る。

- 一 双つの乳にある。(左右の乳)
- 一 両手の十指頭にある。(左右両手の十指の指先、十宣穴)
- 一 両臂の湾にある。(左右肘関節屈曲面、尺沢穴)
- 一 両足の十指頭にある。(左右両足の十趾の指先)
- 一 両腿の湾にある。(左右両脚膝関節屈曲面、委中穴)
- 一 頭頂心に在るといふのは、百会穴、前頂の辺りを搔き破つて血を出す。それにより痧氣を洩すのである。青紫筋を見て、刺すのではない。針がその穴に(上手く)あたれば、黒血がほとぼしり出る。筋の見えないところなので、その穴に、あてることは難しい。しかし注意して刺せば間違ふことはない。(『痧脹玉衡書』の)医案を読むと、「二人の男児が、発熱し、意識混濁となった。腰の脇に麻疹が現れていた。六脈は触れることが出来ない。意識混濁して、呼吸は喘ぐが、

〔本紙第十丁ウラ〕

【原文】

レトモ無痰声脉不^レ合^レ症〔旁訂〕²⁵⁵是痧ノ麻疹ニ類スルナリ頭頂ヲサシ兼テ左ノ太陽及乳上痧ヲ刺スト云リ

一 傷寒中ニ四証ノ類傷寒アリ然メ痧症ノ類傷寒ハ四症ニ較スレハ尤凶暴〔暴〕也医者不識之傷寒之頭痛寒²⁵⁶發²⁵⁷ハ寒從肌表メ入ル故ニ発

²⁵⁵ 消し字跡有り。「症」と旁訂。

散ス痧ノ頭痛ハ痧毒ノ氣上リテ頭面三陽ヲ攻ム外感ニ因ラス時氣ノ口鼻ヨリ入肌表ノ中ニ搏激メ毒²⁵⁸發²⁵⁹トナル内熱スレハ外寒ス故ニ惡寒²⁶⁰發²⁶¹アリ宜先巔頂ヲ刺シ放痧シテ其毒ヲ洩スヘシ用葉ハ透竅解毒順氣ヲ主トスヘシト云リ予瘟疫傷寒ノ頭痛甚者頭頂ヲ刺メ毒血ヲ去頭痛忽ニイヘタリ又傷寒ニ昏迷スルモノモ頭痛ノ甚キ者ナルヲ知リテ刺之忽愈ルヲ挙テ數ヘカタシ

一 唐太宗苦風眩頭重目不能視疾甚秦鳴鶴曰風毒上攻若刺出少血即愈乃刺百會及腦戶出血目明二病立ニ愈タルヲ吳昆力医方考ニノセタリ又症治準繩厥頭痛ニ頭痛甚ク耳ノ前後脉湧キ有

【読み下し】

れども痰聲無く、脉症に合わざれば、是れ痧の麻疹に類するなり。頭頂をさし、兼ねて左の太陽及び乳上、痧を刺す」²⁵⁶と云えり。

一 「傷寒中²⁵⁷に四証の類傷寒あり。然して、痧症の類傷寒は、四症に較すれば尤も凶暴也。醫者之を識らず。傷寒の頭痛、寒熱は

²⁵⁶ 『痧脹玉衡書』痧脹類麻疹に「章漣漪三子、發熱昏沉、腰脅間微有形影與麻疹相似。有用升發之劑、惟恐不透。次日迎余、六脈歇止。余『麻疹之病、何遽爾歇止耶。雖昏沉氣喘、喉無痰聲、脈不合症、斯痧脹之類麻疹者歟。』放頭頂痧、兼放左太陽及乳上痧三針、未愈。用荊芥湯、加三棧、蓬朮、白茯苓、微冷飲之、發一身類麻疹者、遂安。」

²⁵⁷ 傷寒中。『痧脹玉衡書』では、「傷寒集中」。

寒、肌表従り入る。故に發散す。痧の頭痛は痧毒の氣、上りて頭面三陽²⁵⁸を攻む。外感に因らず、時氣²⁵⁹の口鼻より肌表の中に入り、搏激して毒熱となる、内熱すれば外寒す。故に惡寒發熱あり。宜しく先ず、巔頂²⁶⁰を刺し放痧して其の毒を洩らすべし。用藥は透竅解毒、順氣²⁶¹を、主とすべし²⁶²と云えり。予、瘟疫傷寒の頭痛

²⁵⁸ 頭面三陽。顔面には、足の陽明胃經、手の陽明大腸經、手の太陽小腸經がある。

²⁵⁹ 時氣。『漢方用語大辞典』に「寒暑冷熱などの時候にあたって病むことを時氣に感ずという。たとえば季節の変わり目に發生する急性伝染病など。」なお『漢語大詞典』に「時疫」。時疫は、「流行病。はやりやまい。」とする。

²⁶⁰ 巔頂。頭頂。百会穴がある。

²⁶¹ 順氣。『漢方用語大辞典』に「降逆下氣」、「理氣法の一つ」。順氣ともいう。肺氣、胃氣の上逆を治療する方法。」

²⁶² 『痧脹玉衡書』痧症類傷寒に「傷寒集中、僅有四症類傷寒。至於痧症類傷寒、較之四症、尤爲凶暴。而傷寒書内、從未載及、故醫者不識。夫傷寒頭痛、惡寒發熱、屬太陽膀胱經風寒、宜表。是寒從肌表而入、故宜發散爲先。若痧症頭痛、是痧毒之氣、上攻頭面三陽、不因外感寒氣。其惡寒發熱、雖在肌表、是時行之氣所感、由呼吸而入、搏激於肌表之中、作爲毒熱、内熱則外寒、故亦惡寒。治宜先刺。巔頂、放痧以洩其毒、用藥惟在透竅、解毒、順氣爲主。若誤

甚しき者、頭頂を刺して毒血を去れば、頭痛、忽ちたちまちにいえたり。又傷寒に昏迷するものも頭痛の甚しき者なることを知りて、之を刺せば、忽ちたちまち愈ゆること擧げて敷えがたし。

一 唐の太宗²⁶³、風眩²⁶⁴、頭重²⁶⁵に苦しむ、目、視ること能わ認傷寒足太陽膀胱經症、用羌活、麻黃發表太甚、反助痧毒火邪、益張其焰、勢必惡毒攻衝、作腫作脹、立時見兇。故痧症與傷寒、其頭痛、惡寒、發熱雖同、治之當異。要知痧症宜清涼、則痧毒可内解、傷寒宜辛轉則寒氣可外舒。固不可以治痧症者治傷寒、更不可以治傷寒者治痧症也。」

²⁶³ 唐の太宗。『醫方考』、『太平広記』、『旧唐書』いずれの書でも、「高宗」とする。「太宗(五九八〜六九四年)」は、唐朝の第二代皇帝。「高宗(六二八〜六八三年)」は、唐朝の第三代皇帝。太宗の子。

²⁶⁴ 風眩。『漢方用語大辞典』に、「眩暈の一種。風頭眩ともいう。体が虚したために、風邪が脳に入っておこる。症状は、頭暈眼花、嘔逆、甚だしければ厥逆して、絶え間なく発作をおこし、肢体疼痛をともなう。」、また「癩痢の別名」。

²⁶⁵ 頭重。『漢方用語大辞典』に「証名。頭が重い病状、あるいは頭に物をかぶっているような感じをいう。多くは外感の湿邪や湿痰の阻滯によっておこる。外湿を感受しておこるものは表証があり、頭重して頸項痠痛する。湿痰の阻滯によるものは表証がなく、頭重

ず、疾、甚だしきに、秦鳴鶴²⁶⁶曰く、『風毒、上り攻む。若し刺して、少しく血を出だせば、即ち愈ゆ』。乃ち百會²⁶⁷、及び腦戸²⁶⁸を刺し血を出だせば、目、明らか。²⁶⁹に、病立(yaku tachitaru)に愈えたること、

して眩暈・悪心・胸膈痞悶・消化不良・四肢倦怠などをともなう。このほか気血の虚弱や陽明経の実熱証にも頭重がみられるが、前者は虚弱症状が主で、後者は火熱症状が主となる。」

²⁶⁶ 秦鳴鶴。『中国医学史リファレンス辞典』に「七世紀、唐の著名な医師。高宗の侍医。医術で有名となり、針術を得意とした。高宗の百會と腦戸に針を打って出血させ、風脳頭痛の治療を行った。」

²⁶⁷ 百會（百会）。経穴。頭部、前正中線上、前髪際の後方五寸。督脈に属す。頭頂にあつて頭部の陽気が集まる。太陽膀胱経、少陽胆経、少陽三焦経、督脈、厥陰肝経の会う場所の意味。

²⁶⁸ 腦戸（腦戸）。経穴。督脈に属す。頭部、外後頭隆起上方の陥凹部。

²⁶⁹ 『太平広記』卷二百十八至卷二百二十三 秦鳴鶴に「唐高宗苦風眩頭日不能視召侍医秦鳴鶴証之秦日風毒上攻若刺頭出少血愈矣天后自兼中怒日此可斬也天子頭上当是出血処邢鳴鶴叩頭請命上日医生議病理不加罪丑吾頭重閻稽不能忍出血禾必不佳股意央吳命利之鳴鶴利百會及腦戸出血上日吾服望晉木畢后自簾中頂礼以謝之日此天賜我師也躬負繪宝州遺幽出誦寶録」とあり、また、『旧唐書』本紀第五高宗 下 永淳元年（六八二年）に「上疾而止。上苦頭重不可忍、

吳崑が『醫方考』²⁷⁰にのせたり。又『證治準繩』²⁷¹厥頭痛²⁷²に侍医秦鳴鶴曰 刺頭微出血、可愈。天後帷中言日此可斬、欲刺血於人主首耶。上曰 吾苦頭重、出血未必不佳。即刺百會、上日吾眼明矣。」とある。

²⁷⁰ 『醫方考』。吳崑『醫方考』卷五頭病門第五十五凡出血法に「唐高宗苦風眩頭重、目不能視、疾甚、召秦鳴鶴、張文中診之。鳴鶴曰風毒上攻、若刺頭出少血、即愈矣。天后自簾中怒日此可斬也。天子頭上、豈是試出血處耶。上日醫之議病、理不加罪、且吾頭重悶、殆不能忍、出血未必不佳。命刺之。鳴鶴刺百會及腦戸出血。上日吾目明矣。言未畢、後自簾中頂禮拜謝之日此天賜我師也。躬負繪寶、以遺鳴鶴。昆謂諸痛爲實、理宜瀉之、内經言出血者屢矣、必以血變而止。今南人惡於針石、每畏出血、北人猶然行之。經日惡於針石者、不足與言至巧。故醫之巧者、必兼針石。」

²⁷¹ 『證治準繩』。(明)王肯堂『證治準繩』(一) 雜病、上海科學技術出版、一九五九年、頁二二三。證治準繩第四册、頭痛に、「厥頭痛、貞貞頭重、而痛取手足少陰。厥頭痛、意善忘、按之不得、取頭面左右動脈、後取足太陰。厥頭痛、項先痛、腰脊爲應、先取天柱、後取足太陽。厥頭痛、頭痛甚、耳前後脈湧有熱、瀉出其血、後取足少陽。頭痛不可取於臉者、有所擊墮、惡血在於内、若肉傷、痛未已、可側取不可遠取也。頭痛不可刺者、大瘳爲惡、日作者、可令少愈、不可已。頭半寒痛、先取手少陽、陽明、後取足少陽、陽明。膀胱足太陽所生病、頭項腦戸中痛、膈足少陽所生病、頭痛。凡此皆藏府經脉之氣逆上、亂於頭之清道、致其不得運行、壅遏經隧而痛者也。蓋頭象天、三陽六腑清陽之氣皆會於此、三陰五藏精華之血亦皆注於

「頭痛甚だしく、耳の前後に脉湧き有」

【口語訳】

痰の音は聞こえない。脈証が（麻疹と）違うので、これは痧脹類麻疹である。頭頂を刺し、併せて左の太陽、さらに乳上の痧を刺す」とある。

一 「傷寒『痧脹玉衡書』「傷寒集中」の中には四証の傷寒類（たぐい）がある。しかし、痧症の傷寒類（傷寒に似るもの）は、（先の）四症に比較すれば最も激烈である。医者はこれを知らない。（通常の）傷寒の頭痛、悪寒、発熱は寒邪が、肌表より入る。それゆえ、発散する。痧の頭痛は痧毒の気が上がって頭部顔面部にある三つの陽経

此。於是天氣所發六淫之邪、人氣所變五賊之逆、皆能相害、或蔽覆其清明、或瘀塞其經絡、因與其氣相薄、鬱而成熱則脈滿、滿則痛。若邪氣稽留則脈亦滿、而氣血亂故痛甚、是痛皆爲實也。若寒濕所侵、雖真氣虛、不與相薄成熱、然其邪客於脈外則血泣脈寒、寒則脈縮卷緊急、外引小絡而痛、得溫則痛止、是痛爲虛也。如因風木痛者、則抽掣惡風、或有汗而痛。因暑熱痛者、或有汗、或無汗、則皆惡熱而痛。因濕而痛者、則頭重而痛、遇天陰尤甚。因痰飲而痛者、亦頭昏重而痛、憤憤欲吐。因寒而痛者、絀急惡寒而痛。」とある。

272 厥頭痛。『漢方用語大辞典』に「厥逆による頭痛。風寒の邪を感受して、気が上逆することによっておこる。」「難経六十難」に「手の三陽の脈、風寒を受け伏留して去らざる者、則ち厥頭痛と名づく。」とある。

を攻める。外感（寒気）ではなく、時気が口鼻から肌表の中に入り、激しくぶつかって毒熱となる、これにより内熱すると外寒するのだ。それゆえ悪寒発熱が起きる。まず頭頂部を刺し放痧してその毒を洩らすのがよい。用いる薬は、透竅（全身の塞がった穴を通す）、解毒、順気（肺気、胃気の上逆を止める）を、基本とする」とある。

私は、瘟疫、傷寒による頭痛の甚だしい者に、その頭頂を刺して毒血を取り去った。そうしたところ、たちまち頭痛が治った。また傷寒で昏迷するものも、頭痛の激しいことを知って、これを刺して治療したところすぐに治った。例を挙げれば切りがない。

一 「唐の太宗²⁷³が、風眩（めまい）、頭重に苦しんだ。目は、視ることできない。^(めまい)疾^(めまい)があまりにも甚だしかったので、秦鳴鶴が申し上げた。『風毒が上り攻めております。若し針で刺して、少しばかり血を出せば、すぐにお治りになるでしょう。』そこで百会と腦戸を刺して血を出したところ、目がはっきりと見えるようになった。」と病がたちまち治ったと、呉昆『医方考』に記載がある。また『証治準繩』の厥頭痛に「頭痛が激烈で、耳の前後に脉がドクドクとして、

「本紙第十一丁オモテ」

273 太宗。『太平広記』『旧唐書』の記述より高宗の間違いだと思われる。

【原文】

「**熱**、**洩**出其血又云凡頭痛皆藏府經脈ノ氣逆上メ亂ニ於頭之清道一致下其不_レ得_レ運行_一壅_レ遏_二經隨_一而病者也ト云ニ按ルニ經脈ノ氣逆上メ頭ノ清道ヲミタシ其運行ヲ得ズ壅遏シテ病ムト云コト只頭痛一病ノ確論ノミニ非ス痧病ノ大義ナリ痧病ノ大義ノミニアラス一切ノ病經脈壅遏シテ病ヲナスニ非スト云」ナシ學者此義ニ達セズンハアルヘカラス余常ニ頭痛トテ寒暑或ハ大氣ノカワリニ頭痛ヲ苦ムモノ皆血ヲ出メイユ頃日一男子偏頭痛ヲ苦ム牙齦ニ達メイタム其痛処ヲタツスルニ顛顛ノ処ノ動脈怒張シテアリ刺之シ血奔出スル_一多シ頭痛隨手テ愈ユ是準繩ニ云此症ノ如キ忌ム_一勿レ奏鳴鶴ハ腦戸ヲモ刺タル也準繩ニ耳ノ前後脈湧有_一熱ト云時ハ怒張シテ動スルモノハ刺メ血ヲ出ス_一知ヌヘシ

一 在卯_一「印」堂トハ兩眉ノ間ナリ在兩大陽穴トハ左右ノ兩額ナリ乃足少陽膽ノ瞳子膠ノ一名目外去皆五分也小兒辨色部位ニ出タル名ナリ青筋紫筋ヲ現ルモノ又ハ筋張ルモノヲミテ刺スヘシ玉衡ノ医案中ニ傷寒六

【読み下し】

「熱するは、洩して其の血を出だす。又云う、凡そ頭痛、皆な藏府經脈の氣逆上して頭の清道を亂し、其の運行得ざらしむるを致す、

經隨₂₇₄を壅遏₂₇₅して病む者也。と云うに、按ずるに、經脈の氣

逆上して頭の清道₂₇₆をみだし其運行を得ず、壅遏して病むと云うこと、只頭痛一病の確論のみに非ず、痧病の大義なり。痧病の大義のみにあらず、一切の病、經脈壅遏して病をなすに非ずと云うことなし。學者、此の義に達せずんばあるべからず。余常に頭痛とて寒暑、或いは大氣のかわりに、頭痛を苦しむもの、皆血を出していゆ。

「頃日、一男子偏頭痛を苦む、牙齦に達していたむ。其の痛む處をたずぬるに顛顛の處の動脈怒張してあり。之を刺し血奔出すること多し。頭痛、隨手₂₇₇して愈ゆ」。是れ『準繩』に云う。此症の如き忌

₂₇₄ 經隨。『漢方用語大辞典』に「①血管系のこと。②深層経絡の循行経路。随は身体深部に位置する隧道の意味。『素問調經論』「五藏の道、皆経隨に出づ、以て氣血を行らす。血氣和せざれば、百病乃ち変化して生ず。これ故に経隨を守る③五臟と六腑の大絡のこと。『靈樞玉版篇』「胃の氣血の出づる所は経隨なり。経隨は五藏六腑の大絡なり」。

₂₇₅ 壅遏。亦作「壅藹」。阻塞、阻止。

₂₇₆ 清道。『大漢和辞典』には「けがれない道」、また「道を拂い清める。」とある。

₂₇₇ 隨手。即座に。

むこと勿れ。秦鳴鶴は、脳戸をも刺たる也。『準繩』に耳の前後脉湧きて熱有りと云う時は、怒張して動するものは刺して血を出すこと知りぬべし。

一 印堂に在り、とは兩眉の間なり。兩太陽穴に在り、とは左右の兩額なり。乃ち足少陽膽の瞳子膠^(どうしりょう)の一名、目外に 眥^(まじり) を去ること五分也。小兒弁色部位²⁷⁹に出でたる名なり。青筋、紫筋を現わするもの、又は筋張るものをみて刺すべし。『玉衡』の醫案中に「傷寒六

【口語訳】

熱があるものは、その血を出して洩す」とある。また「大抵、頭痛は、皆な藏府経脈の気が逆上して頭の清道（清い道）を乱し、運行できなくさせる。経隨が塞がって病むものである。」と語っているところから、考えてみると、「経脈の気が逆上して頭の清道をみだしてその運行が出来ず、塞がって病む」ということであって、ただ頭痛

²⁷⁸ 瞳子膠。経穴名。足の少陽胆經に属し、顔面の外眼角の外方〇・五寸の陥凹部。太陽穴は奇穴とされ、取穴部位は諸説あるが、顔面の外眼角の外方一寸の陥凹部とされる。

²⁷⁹ 小兒弁色部位。『幼幼集成』、「面部形式賦・辨色分注附」「五臟所屬面色部位図」には、「太陽」穴が、通常の外眼角の外方ではなく、兩額に図示されている。

一病の確論ではない。痧病の最も大事な要点である。痧病の最も大事な要点だというだけでなく、一切の病は、経脈が塞がって病とならないものはない。学者は、この意味を理解するまでに至らねばならない。私は、常々、頭痛で、（とくに）寒暑または天気の変わり目に頭痛に苦しむというものは、みな血を出すことで治している。「近ごろ一人の男子が偏頭痛に苦しんでいた。その痛みは歯茎にまで達するほどであった。その痛む部位を診たところコマカミの箇所動脈が怒張していた。そこでこれを刺したところ、血が多くほとばしり出た。すると頭痛も、たちまち治った。」これは、『証治準繩』にいうところである。この症のようなものを避けてはならない。秦鳴鶴は、脳戸をも刺したのである。『証治準繩』にあるように耳の前後の脈がドクドクとして、熱が有るといふ場合、怒張して動するものは刺して血を出すと云うことを、知っておくべきだ。

一 印堂に在る、というのは兩眉の間のことである。兩太陽穴に在る、というのは左右の兩額のことであり、足少陽胆經の瞳子膠の一名で、目の外方、眥^(まじり) より五分のところである。『小兒弁色部位』に出ている名である。ここに青筋、紫筋が現われるもの、あるいは筋張る（怒張する）ものをみれば刺すとよい。『痧脹玉衡』の医案中に、

【原文】

「本紙第十一丁ウラ」

日壯²⁸⁰。發斑大渴昏沉其脉洪大無倫兩大陽青筋ヲ刺「三針放腿瀉痧五針ト云リ入門ノ小兒門ニ云卯」堂²⁸¹青キ者ハ人驚左大陽青者驚輕ク右大陽青者驚重ト云リ余常ニ小兒ヲミルニ兩眉ノ間ニ青筋アルモノ多シ古人驚疔之症又ハ夭疔ノ候トス誤ナリ是痧ヲ兼タルモノ也刺メ毒血ヲ取ヘシ

大陽印堂
部位之圖



顔面額上ヲ刺ニハ細キ木綿ノヒモニテ喉下ヲ纏ヒ緩急宜ニ從テ氣息ヲ内テカヲ用ルトキハ絡脉即張ルナリ輕々ニ刺スヘシ血唯傍流メ奔逆セス但大毒ノ者ニアラサレハ喉ヲマトウニ及ハズ

【読み下し】

曰ク、壯熱²⁸²、斑を發し、大いに渴し、昏沉し、其の脉は洪大な

280 痧は「熱」に同じ。

281 卯堂は、「印堂」

282 壯熱。『漢方用語大辞典』に「証名。發熱で、熱の勢いが強く高熱なもの。」

ること倫^(ん)無し、兩太陽青筋を刺すこと三針、腿瀉痧放つこと五

針」²⁸³と云り。『入門』の小兒門に云う「印堂青キ者は人驚²⁸⁴。

左の大陽青キ者驚輕く、右の大陽青キ者驚重し」²⁸⁵と云えり。予常ニ小兒をみるに兩眉の間に青筋あるもの多し。古人驚疔²⁸⁶の症、

283 『痧脹玉衡書』傷寒黃斑兼痧に「梁鍾素、傷寒六日、壯熱發斑、大渴昏沉。余見脈洪大無倫、兩太陽青筋。刺痧三針、放腿瀉痧五針、出毒血、未愈。用荊芥紅花湯、合清涼至寶飲加石膏、稍冷送下、四劑而愈。」

284 驚。『漢方用語大辞典』に「ものごとにおどろき、心が動揺すること。心神が穏やかでなくなり、脈が結代したり、大きくなったり、一時止まったりする。これはもともと、心気が虚していたり、心胆がともに怯えやすかったり、あるいは肝虚・胃熱などにより、物ごとにおどろき易くなっている。五志の一つで、水に配当される。」、また「ものごとにおどろく。精神障害の一種で、特に驚愕、あるいは全身の痙攣をおこし、意識不明になる場合。痙攣を發する病の総称。脳性の痙攣をいう。」

285 『入門』の小兒門：大陽青キ者驚重。李梴、『醫學入門』、早稲田大學藏書。「卷五、小兒門、觀形」に、「心火（紅主大熱、青乃肝風。印堂青者人驚、紅白者水火驚、紅者痰熱、印堂連準頭紅者、三焦積。印堂至山根紅者、心小腸熱、小便赤澀。山根至鼻柱紅者、

又は天死の候とす。誤りなり。是れ痧を兼ねたるもの也。刺して毒血を取るべし。

太陽印堂
部位之圖



顔面額上を刺すには、細き木綿のひもにて喉下を纏まととい、緩急宜しきに従いて氣息を内これて力を用いるときは、絡脉即わち張るなり。輕々に刺すべし。血、唯だ傍流して奔逆せず。但だ大毒の者にあらざれば喉をまとうに及ばず。

【口語訳】

「傷寒六日、高熱を發し、斑紋があらわれ、非常に喉が渴き、意識は朦朧とし、その脉は、ほかに例がないほど洪・大であった。両方の太陽のところにある青筋を三針刺し、膝関節の後面に五針刺し痧286驚疖。『漢方用語大辞典』に、「心疖」は、「五疖の一つ。驚疖ともいう。乳食の失調により、心経に熱が鬱することによっておこる。主な症状は、身熱・頬が赤い・顔面の黄色・舌に瘡を生じる・胸膈煩悶・口渴して冷たいものを飲む・膿血下痢・盜汗・齒ぎしり・驚き易いなどである。治療は清心瀉熱の法を用い、方は瀉心導赤湯加減を用いる。」

放った」とある。『医学入門』の小児門には「印堂の青い者は人驚。左の太陽の青いものは、驚が軽く、右の太陽の青いものは、驚が重い」とある。常々、私が小児をみると、両眉の間に青筋のあるものが多い。古人は、「驚疖の症、あるいは天死の候」とする。しかしこれは誤りである。これは痧を合併している。刺して毒血を取るとよい。

太陽印堂部位之図 [図]



顔面の額上を刺すには、細い木綿の紐を喉下に巻き付け、タイミングをはかり、息を詰めて力を入れれば、絡脉（静脈）が怒張する。これをさつと刺すとよい。血は、傍流するだけで奔逆しない。大毒のものでなければ、喉に（紐を）巻く必要はない。

【原文】

【本紙第十二丁オモテ】

一 在喉中兩旁トハ痧毒咽喉ヲセメ□「腫」塞ルヲアリ宜ク刺メ血ヲ出スヘシロヲヒラキ咽喉中ヲミルニ喉ノ兩旁ニ毒アルモノハ鎌ニテヤブリ血ヲ出ス玉衡ニ咽喉鎖悶スルアリ急喉風ニ似タリト云リ外科正宗ニ風痰上壅咽門閉塞シ少頃ニ湯水不入声音不出此爲喉閉緊喉風用葉不レ及下先用レ針刺ニ喉間一發中泄毒血上云々又準繩ニ喉閉手ノ少商ヲ刺メ出血立ニ愈タルアリ又斐全善治一男子喉痺於大溪穴刺出黒血半盞而愈由テ之言レ之喉痺ハ以惡血不散故也凡治此疾暴者必

先発散ス発散メ不愈次ニ取^レ痰ヲ取痰テ不愈次ニ去^レ汚血一ト云リ少商穴手肺經手大指ノ端内側爪甲如韭葉針入一一分大溪穴ハ足少陰至「經」内踝後五分跟骨間動脈陷中針入三分主咽腫

一 在舌下兩旁トハ舌下兩辺青筋アルモノヲ見テ刺之出血スヘシ玉衡曰一人傷風咳嗽煩悶疹ヲ以治メ発セス反テ吐血暈ヲ発ス症脉不合法舌下痧トアリ是咳嗽有^レ痧テ発暈スルニ舌下ヲ見テ青筋現タル故

【読み下し】

一 喉中兩旁に在りとは、痧毒咽喉をせめ腫れ塞がることあり、宜しく刺して血を出すべし。口をひらき咽喉中をみるに、喉の兩旁に毒あるものは、鎌にてやぶりを血を出す。『玉衡』に「咽喉鎖悶するあり、急喉風²⁸⁷に似たり。」²⁸⁸と云えり。『外科正宗』に「風痰²⁸⁹、

²⁸⁷ 急喉風。『漢方用語大辞典』に「病名。緊喉風ともいう。喉風の発病が急激で咽喉腫塞するもの。多くは美食や酒類の過剰な摂取により、あるいは肺胃に蘊熱がおこり風熱を感じたために、痰火を生じ、その邪毒が咽喉を壅塞しておこす。初期に咽喉が急に腫れ、燕下困難となり、長びくと全喉部が赤く腫れて痛んでくる。痰涎が壅盛となり、喉部は緊張感があり、痰鳴気促・呼吸困難・声がれ・咽喉腫塞・飲水困難などをあらわす。さらにひどい時には窒息死することもある」。また「喉風」は、「病名。咽喉の急性病の総称。本病は風熱の外邪を受け、平素より肺胃に積熱があることによつて、風火がお互いに強まって鬱結しておこる。その症状は咽喉部が突然に腫痛し、呼吸困難、燕下困難となり、並びに痰涎が壅盛し、言葉が出難くなり、下あごが拘急する。甚だしければ牙關緊閉し、精神

上り 壅^{ふさ}ぎて咽門を閉塞し少頃^{（ふたふた）}に湯水入らず、聲音出でず、此れ喉閉緊喉風と爲す。薬を用うるは、先ず針を用い喉間を刺し毒血を發泄するに及ばず」²⁹⁰云云、又『準繩』に「喉閉^{（うんぬん）}²⁹¹手の少商を刺

がぼんやりし、咽喉が内外ともに腫れて窒息するおそれがでてる。急喉風・爛喉風・鎖喉風・纏喉風などに分けられる。」

²⁸⁸ 『痧脹玉衡』、痧症蒙發論、「痧有爲咽喉鎖悶、一似急喉風。」

²⁸⁹ 風痰。『漢方用語大辞典』に「平素より痰疾のあるものが、風邪を受け、あるいは風熱が拂鬱しておこるものをいう。」、また「痰が肝経にあるものをさす。症状は、脈弦、顔が青く、眩暈頭風、胸脇満悶、便秘秘澁、時にイライラする、また痰の色は青く、泡状である。甚だしければ搐溺し、瘧瘵を発す」

²⁹⁰ 『外科正宗』、卷之二、上部疽毒門、咽喉論第二十一、「實火者、過飲醇酒、縱食膏粱、疊褥重衾、餽餐辛烈、多致熱積于中、久則火動痰生、發爲咽腫、甚者風痰上壅、咽門閉塞、少頃湯水不入、聲音不出、此爲喉閉、緊喉風是也。用藥不及事、先用針刺喉間、發泄毒血、隨用桐油、餞雞翎探吐稠痰、務使痰毒出盡、咽門得松、湯藥可入、語聲得出、乃止。」

²⁹¹ 喉閉。後出「喉痺」に同じ。

して血を出さば立たたちに愈よたる」²⁹²とあり。又「婁全善」²⁹³、

一男子の喉痺²⁹⁴を治す。大溪穴に刺し黒血を出だすこと半蓋にして愈ゆ。之に由りて之を言わば、喉痺は悪血散らざるを以てなす故也。凡そ此の疾を治すに、暴なる者は、必らず先ず發散す、發散し

²⁹² 『證治準繩』、雜病、第八冊、七竅門下、咽喉、「針法治喉閉、

刺少商出血、立愈。孫兆治文潞公喉腫、刺之、嘔出膿血升餘而愈。

婁全善治一男子喉痺、於太溪穴刺出血半蓋而愈。由是言之、喉痺以惡血不散故也。凡治此疾、暴者必先發散、發散不愈、次取痰、取痰不愈、次去汚血也。」

²⁹³ 婁全善。樓英（一二三〇—一三八九年、明の医学者。名公爽、字全善、号全齋、浙江蕭山（浙江省杭州市）樓塔の人。著には『医学綱目』がある。

『證治準繩』中の「婁全善」以下の文は、『醫學綱目』、卷之十五、肝膽部、咽喉、「予嘗治一男子喉痺、於太溪穴刺出血半蓋而愈。

由是言之、喉痺以惡血不散故也。凡治此疾、暴者必先發散、發散不愈、次取痰、取痰不愈、次去汚血也。」の引用。

²⁹⁴ 喉痺。『漢方用語大辞典』に、「病名。喉閉ともいう。広義に咽喉腫痛病証の総称である。多くは発病および病気の進行が急でなく、咽喉の腫脹発紅疼痛も軽く、軽度の嚥下困難をあらわし、あるいは声が低く出にくくなり、寒熱などの証をあらわすものを用いてゐる。外感内傷どちらによってもおこり、外感風熱によるものが多く、内傷は陰虚によるものが多い。」

て愈えずば、次に痰を取る、痰取りて愈ずば、次に汚血を去る。」と云えり。「少商穴は手の肺經にて手大指²⁹⁵の端内側爪甲を去ること

蕪葉こむぎの如くして、針を入ること一分、大溪穴は足の少陰經にて内

踝の後ろ五分、跟骨²⁹⁶の間、動脈、陷中²⁹⁷にあり。針を入ること三分、咽腫を主る。

一 舌下兩旁に在りとは、舌下兩邊青筋²⁹⁸あるものを見て、之を刺し出血すべし。『玉衡』曰く「一人傷風咳嗽煩悶麻疹を以て治して發せず。反つて吐血、暈を發す。症脉合わず、舌下痧を放つ」²⁹⁹と

²⁹⁵ 大指。第一指。親指。

²⁹⁶ 跟骨。ごんこつ。踵骨の旧称。

²⁹⁷ 陷中。おすと筋肉の凹むところ。骨間を指す。

²⁹⁸ 舌下兩邊青筋。舌下静脈と思われる。『漢方用語大辞典』に「金津・玉液（きんしん・ぎよくえき）経外穴名。舌系帶（舌小帯）両側の静脈上に位置し、左を金津と名づけ、右を玉液と名づける。主治、喉炎・扁頭体炎・口腔潰瘍・急性胃腸炎など。点刺して血を出す。」

²⁹⁹ 『痧脹玉衡書后卷』、痧脹兼麻疹、「一、高子良弟、四歲、正月間傷風咳嗽煩悶。有以麻疹治之、不發、反吐血、發暈昏沉。延餘、脈症不合。放舌下痧二針、付紫朴湯加黃芩、微冷飲之、麻疹始現。次日稍飲溫茶半鍾、麻疹復隱。餘日、痧脹餘毒、復發内攻、故

あり。是れ咳嗽熱有りて暈を發するに、舌下を見て青筋現われたる故

【口語訳】

一 喉中両旁（ノドの中の両側）に在りとは、痧毒が咽喉をせめて腫れ塞がることがある。このような時は、刺して血を出すとよい。口を開かせて咽喉中をみると、ノドの両側に毒があるものは、鎌で破って血を出す、『痧脹玉衡』に「咽喉が、塞がって苦しむものがある。急喉風に似ている。」とある。また『外科正宗』には、「風痰が、上がってきて壅ぎ、ノドを閉塞してしばらくすると、湯水が入らず、声が出なくなる。此れが喉閉緊喉風である。薬を用いるのは、先ず針を用いて、喉間を刺し毒血を發泄するのに及ばない」とある。また『証治準繩』に「喉閉に、手の少商穴を刺して出血させたところ、たちまち治った。」とある。また、「婁全善が、一人の男子の喉痺を治した。大溪穴に刺して、杯に半分ほどの黒血を出すと治った。

これより言えるのは、「喉痺」というのは、悪血が散らない為に起きたからだ。一般的にこの病を治すには、急激なものは、必らず最初に發散させる。發散して良くならないようなら、次に痰を取る、痰を取っても治らないようなら、次に汚血を取り去る。」と言う。少商穴は、手の肺経に属し、手の親指の指先内側で爪甲（つめ）から菑

麻疹隨之而隱。又刮痧畢、服必勝湯、減大黃、五靈脂、貝母、加黃芩、飲之、麻疹即透。后惟清涼解毒而痊。」

葉ほど離れたところにある。ここに針を一分入れる。太溪穴は足の少陰経に属し、内踝（うちくるぶし）の後ろ五分、跟骨（踵骨）との間、脉動き、陥入するところに、針を三分入れる。咽腫を治す穴である。

一 「舌下の両側に在り」とは、舌下の両側にある青筋（舌下静脈）を見つけて、これを刺して出血させると良い。『痧脹玉衡』に以下の記述がある。「ある人が、傷風で咳嗽して煩悶し、麻疹として治療したが変化がなかった。反って吐血、暈を起こした。症と脉が合わなかったので、舌下の痧を放出させた」という。これは、咳嗽で、熱が出て、暈を發した。舌下を見たところ青筋が現われていたので、

【本紙第十二丁ウラ】

【原文】

舌下ヲ放メ愈ト見ヘタリ舌下ノ刺法千金ニ詳也千金曰舌卒腫満口溢

如吹猪胞出³⁰⁰。氣息不^レ得^レ。通須臾不治殺^ス。人急以指刮^レ破^リ舌^ノ兩邊。去汁即愈勿^レ使^レ刺著^レ舌下中央脉。血出不止殺人。ト云^ト。又曰。但看其舌下自有^レ噤虫形状。或如螻蛄。或如卧蠶。子細看之。有頭小白。燒鉄針烙頭上。使^レ熱即消。ト云^ト。又舌下刺出血。諸書詳ナリ。左二举^〇。準繩舌門云。張戴人治南隣朱老翁年六十餘歲。身熱數日不止。舌根腫起如³⁰¹。舌尖亦腫^ル。腫至^レ滿口。比^レ原舌一大三倍。一外科以燔針刺其舌兩旁下廉泉穴。載人

³⁰⁰張作記・張瑞賢等輯注、『藥王全集』、華夏出版、一九九六年、一一二頁。唐・孫思邈撰、『備急千金要方』卷第六上、七竅病上、舌病第四に「治舌卒腫、滿口溢出、如吹猪胞、氣息不得通、須臾不治殺人方、急以指刮破舌兩邊、去汁即愈、亦可以鍍刀決兩邊破之、以瘡膏敷之。又方、刺舌下兩邊大脉血出、勿使刺着舌下中央脉、出血不止殺人。」とあり、【原文】の「滿口溢如吹猪胞出」は「滿口溢出如吹猪胞」の誤り。

³⁰¹肯堂『証治準繩』(一)雜病、頁五四二。第八冊、七竅門下重舌には、「張戴人治南朱老翁、年六十餘歲、身熱數日不已、舌根腫起、利舌尖亦腫、腫至滿口、比原舌大三倍。一外科以燔針刺其舌兩旁下廉泉穴、病勢轉兇、將至顛。戴人曰、血實者宜決之、以針磨令鋒極尖、輕砭之、日砭八九次、出血約一二盞、如此者三次、漸覺血少痛減腫消。夫舌者、心之外候也。心主血、故血出則愈。又諸痛癢瘡瘍、皆屬心火。燔針艾火、皆失此義也。」とある。【原文】の「如」は、「和」の誤り。

曰血實者宜決之。以^レ三銚針^一磨令^レ鋒^{シメ}極尖^一。輕砭^レ之。八九次出血約一二盞。如此者三次。漸覺血少痛減腫消。夫舌者心之外候也。心主血。故血出則愈。又諸痛癢瘡瘍皆屬心火。燔針艾火皆失此義也。○薛新甫云。凡舌腫脹甚。宜先刺舌尖。或舌上或邊傍出血。泄毒以救其急。惟舌下廉泉穴。此屬腎經。口雖³⁰²宜出血亦當禁針慎之。廉泉穴二說。一名舌本。一取頷下結喉上一取舌下兩脉。○舌本者乃舌根帶也。若取舌下兩脉是取^レ舌梢。

【読み下し】

舌下を放じて愈ゆと見えたり。舌下の刺法『千金』に詳らか也。『千金』曰く「舌卒腫、滿口に溢れ出で³⁰³、猪胞を吹くが如きに、氣息通ずるを得ず。須臾に治さずば、人を殺す、急ぎ指を以て舌の兩邊を刮し破り汁を去れば、即ち愈ゆ。刺して舌下中央の脈に著け³⁰²」

³⁰² 雖と読める。

³⁰³ 【原文】の「滿口溢如吹猪胞出」は前述の注に従い「滿口溢出如吹猪胞」に改め読み下した。

しむること勿れ、血出でて止まず人を殺す。」³⁰⁴云々。又曰く「但

だ、其の舌下を見るに、噤蟲の形状有り、或いは螻蛄ろうこの如く、或いは

臥蠶ふしの如し。子細に之を見るに、頭の少しく白き有り、鐵針を燒き、頭上に烙す、熱して即ち消えしむ。」³⁰⁵云々。舌下を刺し血

³⁰⁴ 『漢方用語大辞典』に「舌腫」「病証名、舌脹、舌脹大ともいう。七情の鬱結や激しい心火により、痰濁と瘀血が舌に滞ってひきおこされる病証で、舌がしだいに腫れ、口いっぱいにまで大きくなつて、硬く、痛みをとめない、呼吸や言語に障害をきたす。腫れのひどいものを嬰舌（そうぜつ）ともいう。治療は、まず皂礬を焼いて末とする、つぎに、口をこじあげ、三稜針で刺して悪血を去り、そこに皂礬末をこすりつける、これは黄連末と蒲黄末でもよく、あるいは牛黄・白礬・西瓜霜を等分に合わせた末でもよい、内服は、涼膈散で清熱涼膈するとよい。」。「皂礬」は緑礬（FeSO₄・7H₂O）で焼くと酸化鉄（Fe₂O₃）となる。白礬は「ヨウバン」。

³⁰⁵ 前出『葉王全集』、一一二頁。『備急千金要方』巻第六上、七竅病上、舌病第四に「但看其舌下有噤蟲形状、或如螻蛄、或如臥蠶子、細看之有頭尾、其頭少白、燒鐵釘烙頭上使熱、即自消。」とある。また前出、王肯堂『証治準繩』（一）雜病、五四二頁。第八冊、七竅門下重舌にも、「三因云、凡舌腫、下必有噤蟲、状如螻蛄、臥蠶、有頭尾、其頭小白、可燒鐵烙、烙頭上即消。不急治、能殺人。」とある。

を出だすこと諸書に詳らかなり。左に擧ぐ。○『準繩』舌門に云う³⁰⁶、「張載人³⁰⁷南隣の朱老翁を治す。年六十餘歳。身熱³⁰⁸。數日止まず、

³⁰⁶ 王肯堂『証治準繩』（一）雜病、頁五四二。第八冊、七竅門下重舌に、「張戴人治南朱老翁、年六十餘歳、身熱數日不已、舌根腫起、和舌尖亦腫、腫至滿口、比原舌大三倍。一外科以燔針刺其舌兩旁下廉泉穴、病勢轉兇、將至顛。戴人曰、血實者宜決之、以針磨令鋒極尖、輕砭之、日砭八九次、出血約一二盞、如此者三次、漸覺血少痛減腫消。夫舌者、心之外候也。心主血、故血出則愈。又諸痛癢瘡瘍、皆屬心火。燔針艾火、皆失此義也。」薛新甫云、凡舌腫脹甚、宜先刺舌尖、或舌上、或邊傍出血洩毒、以救其急。惟舌下廉泉穴、此屬腎經、雖宜出血、亦當禁針、慎之。」

³⁰⁷ 張載人は、「張從正（一一五六年頃〜一二二八年）金の有名な医学者。金元四大家の一人。字は子和、自ら載人と号した。睢州考城（河南省蘭考県）の人。劉完素（一一二〇年〜一二〇〇年）の學術的思想を繼承し、用薬は寒涼を専らにし、汗・吐・下の三法を用いるのを得意とした。麻知幾らが、張氏の医学理論と經驗を整理・増訂して『儒門事親』四十巻を編んだ。同書の前巻三巻は、張氏自身の撰と考えられている」松岡榮志監修『中国医学史レファレンス辞典』、白帝社、二〇一一年、三二〇頁。

³⁰⁸ 身熱。『漢方用語大辞典』に、「証名、全身の発熱をさす」、また「潮熱に似て、全身に熱があるが、潮熱のように一定の時を定めて出ることではなく、また発汗をともなうことはない。この熱は少陽病や陽明病のときにみられる。身熱悪風は少陽病の時にみられる

「舌根腫れ起つと³⁰⁹舌尖も亦腫る。腫満口に至り、原の舌に比して大なること三倍。一外科、燔針³¹⁰を以て其の舌の兩旁下の廉泉³¹¹穴を刺す。載人曰く、血實の者、宜しく之を決るべし。銑針³¹²

が、陽明病では悪風をとまわらない。」、「胸腹の常熱であるがその熱は肌膚にあり、身重微煩するもの。」

³⁰⁹ 【原文】に附した注に従い、「如」は「和」に改めた。

³¹⁰ 燔針。『漢方用語大辞典』「火針療法」に、「燔針焮刺ともいう、特殊な刺針法である、その方法は、金属針の尖端を焼紅した後、迅速に刺して人体の一定部位の皮下組織に至らせ、迅速に抜針する。この種の方法は多く外科のある種の疾病・風湿性関節炎・癩瘍・瘰癧・頑癬・瘰癧などの治療に用いられる。」

³¹¹ 廉泉。WHO/WPRO(二〇一〇年)では、「前頸部、前正中線上、喉頭隆起上方、舌骨の上方陥凹部」とされるが、『中医大辞典(第二版)』には「出『靈樞。刺節真邪』。別名本池、舌本。属任脈。陰維、任脈之会。位於結喉上方、当舌骨上縁凹陷処。(『千金要方』)。別説「在頷下、結喉上、舌本下。」(『針灸甲乙經』)。「頷下結喉上四寸中央」(『針灸聚英』)。「津竅之一、為分泌津液の孔道。」『靈樞・脹論』「廉泉、玉英者、津液之道也。」、『素問・刺癰』「舌下兩脈者、廉泉也。」とある。

以て磨り極尖を鋒しめ、輕るく之を砭す。八九次、血を出だす

こと約一二盞、此の如きこと三次、漸く血少り、痛み減じ、腫消ゆるを覺ゆ。夫れ舌は心の外候也。心は血を主る。故に血出だせば、則ち愈ゆ。又、諸痛、痒、瘡瘍、皆な心火に屬す。燔針、艾火、皆な此の義を失する也。」○「薛新甫³¹³云う、凡そ舌、腫脹して甚だしきは、宜しく先ず舌尖、或いは舌上、或いは邊傍を刺し、血を出だし毒を泄らし、以て其の急を救うべし。惟だ舌下の廉泉穴のみ、此れ腎經に屬す。宜しく血を出だすべしと雖も、亦た禁針に當れば、之を慎しむべし。」(廉泉穴に二説。一名、舌本³¹⁴。一は頷下結喉

³¹² 銑針。『漢方用語大辞典』「鉞(銑)針」に、「九針の一つ。形は劍のようで、両側に刃がある。長さは四寸、巾は、二・五分である。これは瘡瘍を切開し、排膿放血する道具である。」

³¹³ 薛新甫は、「薛己(一四八六年〜一五五八年)明の医学者。「字は新甫、号は立齋、吳興(江蘇省蘇州市)の人。御医や太医院使を歴任。特に瘍科を得意とした。多数の医書の編輯と校訂を行い『内科摘要』『校注外科概要』など十余種がある。(いずれも『薛氏医案二十四種』に所収)。後人が薛氏の医案を整理して『薛氏医案』を編輯し、その中には家伝の経験も含まれる。」、前出『中国医学史レファレンス辞典』、二六二頁。

上に取る。一は、舌下兩脉に取る。○舌本は、乃ち舌の根蒂也。若し舌下の兩脉に取れば是れ舌梢に取る

【口語訳】

舌下の痧を放出して治ったと考えられる。舌下の刺法は、『(備急)千金(要方)』に詳しく書かれている。『千金』に以下のように記載される、「舌卒腫は、(舌が)口中に溢れ出る、それはまるで豚の膀胱を膨らませたようである。呼吸が出来なくなる。ただちに治療しなければ死に至る。すぐさま指で舌の両辺を擦って一汁(悪血)を取り去れば、たちまち治る。舌下中央の脈を刺してはいけない、出血が止まらず人は命を落とす。」などという。また「その舌下を診ると、じっとしている虫の形状で、まるでケラのような、蚕が横になつていているようなものがある。これを、細かく見て見ると、少しばかり白い頭と思えるところがある。鉄針を焼いて、その頭上に烙する(焼く)、熱すると、たちまち消える。」等とある。舌下を刺して血を出す治療法は、色々の医書に詳しく記載されている。次に挙げる。『証治準繩』舌門には以下のようにある。「張

³¹⁴舌本。『漢方用語大辞典』に「舌根のこと、この部位には多数の経脈が絡っている、舌は経絡や臟腑と関係が密接である、たとえば足の太陰脾経は舌本に連なり、舌下に散じ、足の少陰の脈は舌本を挟み、手の少陰の別は舌本に系り、足の厥陰の脈は舌本を絡う、『靈枢経脈篇』」、また「風府穴の別名、『針灸甲乙経』」、また「廉泉穴の別名、『針灸資生経』」。

載人が南隣の朱という姓の老人を治療した例。年齢は六十歳余り、全身の熱が、数日止まなかった。舌根が腫れあがり、舌尖もまた腫れた。腫が口の中いっぱい大きくなり、もとの大きさの三倍になった。ある外科医が、燔針(焼鍼)でその舌下の両側の廉泉穴を刺した。しかし載人が言うには、「血が実している者は、これを切るのがよい。銑針を研いで尖端をとがらせ、軽く刺す。八九度刺し、杯に約一二杯血を出だす。」この例では、三度めによりやく血が減り、痛みも減り、腫が消えるのがわかった。舌は心(臟)の状態が現れ出る。心(臟)は血を主っている。そこで血を出せば治る。また、諸痛、痒、瘡瘍は、すべて心火に關係する。燔針(焼鍼)、艾火(お灸)などは、すべてこれに合わない。『証治準繩』の記載で「薛新甫が言うのには、一般的に舌が腫脹してひどい場合には、まず舌尖、舌上、辺傍を刺して、血を出し毒を排出させ、急を救うのがよい。舌下の廉泉穴のみ、腎経に属する。血を出すのが良いと言っても、これはまた禁針(穴)でもあるから慎重にしなければならない。」(廉泉穴には二説ある。別名は、舌本という。一説はオトガイ(下顎)喉頭隆起(喉仏)の上に取る。一説は、舌下の両脈(静脈)に取る。舌本は、舌の根蒂(ねっこ)である。もし舌下の両脈に取るならば、それは舌先に取るのである。

【原文】

「本紙第十三丁オモテ」

也。舌標也。○外科正宗曰重舌木舌紫舌舌脹等疾腫脹疼痛硬強不此法誤矣。

語又兼舌根併兩齒合縫³¹⁵「盡」処作腫瘀血塗塞口禁難開供用此法刺之用篋線針扎在筋頭上³¹⁶在患処一刺出血紅紫黑毒重³¹⁷患甚者數十³¹⁸「刺」皆可血尽温湯漱之云々○刺絡篇云舌下左右挟柱之絡ヲキ、ホルスアテルト名ク有疾ヲ刺スヘキノ症ハ其絡必盛ナリ橋^レ舌テ取之鉸針ヲ以輕々刺之血若不^レ止ハ口含^レ蘇^レ酢^レ頻^レ漱シ若ハ摻^レ龍骨礬石等^レヲ又佳ナリ咽喉腫痛及舌瘡木舌重舌腫脹滿口等証主之又言語不正者取之舌柱又卒死雖^レ九候已絶^レ天枢有動者以三鉸針可刺舌心間有種者云々依之^レミ^レレハ千金ニ舌下中央點ニ着テ出^レ血殺^レ人ノ説拘ルヘカラス一針医告予曰中風舌蹇テ不言モノ其舌ヲ採リ引出シ兩辺出ル処ニ於テ刺テ血ヲ出ストキハ舌能轉スト云リ一在多乳トハ婦人乳上青筋多ク頭ル^レモノ刺メ血ヲトル也医案中ニ

【読み下し】

³¹⁵ □は、「盡」と読める。

³¹⁶ 在筋頭上。『外科正宗』作「在箸頭上」。

³¹⁷ 一刺出血紅紫黑毒重。『外科正宗』作「在患處點刺出血、紅紫毒輕、紫黑毒重」。後の【読み下し】の注を参照。

³¹⁸ □は「刺」と読める。

也。舌は標也。此の法誤れり。○『外科正宗』に曰く「重舌³¹⁹、木舌³²⁰紫舌³²¹、舌脹等の疾、腫脹し疼痛し、硬強して語らず。又、兼ること舌根併び兩齒の合縫し盡す處に腫を作す。瘀血、塗塞し、

³¹⁹ 重舌。『漢方用語大辞典』に「病名。子舌・重舌風・蓮花舌ともいう。心脾に湿熱があり、さらに風邪を感じ、邪気が相搏ち、経に沿って上昇し、舌に結して発するもので、舌下の血脈が脹れあがつて小さな舌の様であり、紅や紫などを呈していて、ちょうど蓮花のようにはえているもの。その他の症状は、潮熱を發し、頭痛項強して、飲食の嚥下困難、言語の不明、よだれを流すなどして、長びけば潰え腐爛する。」「外用としては、三稜針で金津・玉液の二穴より出血させ、薄い塩水でうがいさせたあと氷硼散を吹きつけておく。」

³²⁰ 木舌。一種病症。舌頭腫脹木硬。『漢方用語大辞典』に「病証名。木舌脹・木舌風・死舌ともいう。心脾の積熱が上衝しておこる。小児に多くみられる。舌が腫脹して木のように硬く口一杯になり、転動できず、痛みがないなどをあらわす。また心経の火が盛んとなりおこるものは、舌が脹れ口一杯となり、色は紫で猪肝のようになり、飲食することが困難で話すことができなく、堅くなり疼痛する。危険な状態である。」

³²¹ 紫舌。ここでは、紫舌脹と思われる。「紫舌脹」は、『漢方用語大辞典』に「病証名。風毒の邪熱が血気にあつまつて発するもので、症状は舌上に瘡を生じ、舌が紫色に腫れる。」

口禁じ開くこと難し。供に此法を用いて之を刺す。 麤き線針を用

い筋頭上³²²に在るを扎す。患う處に在りて一刺し、血を出だし紅紫黒ならば毒重し（患う處に在りて點刺し血を出だす。紅紫ならば毒輕し、紫黒ならば毒重し）³²³。患うこと甚しき者は、數十刺すこと皆可し。血、盡きれば温湯にて之を漱ぐ。³²⁴云々〇〇『刺

³²² 筋頭上。『外科正宗』作「箸頭上」。

³²³ 『外科正宗』では「在患處點刺出血、紅紫毒輕、紫黒毒重」（患う處に在りて點刺し血を出して、紅紫ならば毒輕し、紫黒ならば毒重し）とある。『外科正宗』に従うと〇内のようになる。また「點刺」は『漢方用語大辞典』に「刺針法の一つで速刺法のこと。その方法は左手で皮膚をつまみ、右手に針を持って拇指と次指で針柄をつかみ、中指を針尖の上約一分ほどの処につけ、迅速に皮下の浅い静脈に刺入し、ただちに抜針して、その後数滴の血液をしぼり出すこと」とある。

³²⁴ 吳少楨等点校、（明）陳実功、『外科正宗』明清中医臨証小叢書、中国中医薬出版社、二〇〇二年、二六二頁。卷之四 雜瘡毒門、重舌第一百十二に、「針刺法、治重舌、木舌、紫舌等疾、腫脹疼痛、硬強不語、又兼舌根并兩齒合縫盡處作腫、瘀肉塗塞、口噤難開、俱用此法刺之。用粗線針扎在箸頭上、在患處點刺出血、紅紫毒輕、紫

絡篇』に云う「舌下左右挾柱の絡を キキホルスアテルと名づく有

り。疾を刺すべきの症は其の絡必ず盛なり。舌を擗て之を取る。鉞針

を以て、輕々に之を刺す、血若し止まざれば口に嚴酢³²⁵を含み頻に

漱し、若しくは龍骨³²⁶、礬石³²⁷等を摻³²⁸るも、又佳なり。咽

黒毒重、患甚者數十點皆可、血盡温湯漱之。甚者金鎖匙、輕者冰硼散搽患上、流去熱涎、内服涼膈散、清涼飲、俱可選用。」

³²⁵ 嚴酢。酸味の強い酢のことか。「醢」は『大漢和辞典』に「すの味がこい」

³²⁶ 龍骨。古代大型哺乳類の化石化した骨で、主として炭酸カルシウムからなるもの。効能は、鎮静、鎮痙、消炎、去痰、止血。桂枝加竜骨牡蛎湯、柴胡加竜骨牡蛎湯に処方する。『神農本草経』、上品、「味甘平。主心腹、鬼注、精物老魅、咳逆、泄利、膿血、女子漏下、癥瘕堅結、小兒熱氣驚癇、齒主、小兒大人驚癇瘖疾狂走、心下結氣、不能喘息、諸瘕、殺精物。久服、輕身通神明、延年。生山谷。」

³²⁷ 礬石。礬石。天然の硫酸カリウムアルミニウム。明礬。効能は、解毒、止痒、収斂止血、祛風痰。消石礬石散に処方する。『神農本草経』卷三、「礬石、味酸寒、無毒、主寒熱洩痢：煉餌服之、

喉腫痛及び舌瘡³²⁹、木舌、重舌、腫脹満口等の證、之を主じる。又、言語不正なる者は、之れ舌柱³³⁰に取る。又、卒死、九候³³¹已

輕身不老。「明李時珍『本草綱目、金石四、礬石』」集解〔引蘇頌曰、「礬石初生皆石也、採得燒碎煎煉、乃成礬也。」〕

³²⁸ 搽。搽、塗抹。「『普濟方』「治疔瘡」に「治金瘡血不止疼痛、出聖惠方、以龍骨搗末細研傅瘡上」とある。また『本草綱目』「礬石」に「刀斧金瘡、白礬、黃丹等分為末。敷之最妙。救急方。」とある。「龍骨」や「礬石」は煎じて内服されることが多いが、ここでは止血のため粉末を塗ると思われる。

³²⁹ 舌瘡。『漢方用語大辞典』に、「病証名。紅点舌・坐舌風ともいう。舌に生じる瘡のこと。心胃の積熱の燻蒸により、あるいは胎毒の上衝によるものは、舌上に瘡ができて、舌が裂け腫れて時に鮮血を流し、口臭・便秘、脈は実で力がある。」

³³⁰ 舌柱。『中医大辞典(第二版)』に、「出『靈樞・終始』、『類經』卷二十一「舌柱、即舌下之筋如柱也。」似指舌繫帶」。舌柱は舌小帯を指す。また「海泉」に、「經外奇穴名。出『針灸大全』。位於舌繫帶中点処。主治嘔吐、重舌腫脹、呃逆、喉閉、腹瀉、消渴等。点刺出血。」とあり、舌小帯には、奇穴「海泉」がある。

³³¹ 九候。『漢方用語大辞典』に「脈の見方。寸関尺にそれぞれ浮中沈があるところから九候という。」また、「脈の部位。『素問三部九候論』。「素問三部九候」は、「全身遍診法。人体を頭部・

に絶ゆと雖も、天樞³³²に動有る者は、三稜縫針を以て、舌心³³³を刺すべし。間、蘇^{(上) (下) (左) (右) (前) (後)}る者有り。」³³⁴云云。之れに依りてみれ

上肢・下肢の三部分に分け、その各々には上・中・下の三カ所の動脈があり、これらの部位で脈を診ることを三部九候という。」

³³² 天樞。足の陽明胃經の經穴。『針灸經穴辞典』に「臍の側二寸。」「臍の側にあり、胃腸の氣の機能を左右するかなめであることから、天樞となづけられた」。

³³³ 舌心。舌中と同じ。『漢方用語大辞典』に、「舌心のこと、舌の中心部にあたり、脾胃に属する。」

³³⁴ 『刺絡編』刺舌下法、「舌下の左右柱を挟むの絡、是をキキホルスアードルキキホルスアードル。疾有りて刺に應ずるの證は、其の絡必ず盛んなり。舌を挿げて之を取る。鍼は宜しく鉞鍼、葦葉鍼を以て、輕輕に之を微刺すべし。血若し止まずんば、口に嚴酢を含みて頻りに漱ぐ。若しくは、龍骨・礬石等を搽るも亦佳なり。主病、咽喉腫痛及び舌瘡・木舌・舌腫脹し口に滿つる等の證、並びに之を主る。又、言語不正なる者は、之を舌柱に取る。又、卒死九候已に絶すと雖も、天樞に動有る者は、三稜縫鍼を以て、舌心を刺すべし。間々蘇る者有り。」

ば、『千金』に「舌下中央脉に著きて血を出せば人を殺す。」³³⁵の

説に拘（こ）わるべからず。一針醫、予に告げて曰く、「中風、舌蹇（せま）」³³⁶

きて不言（いわざ）もの、其の舌を採り引き出し兩邊出る處に於いて、刺して血を出すときは、舌能く轉ず」と云えり。

一 乳に多く在りとは、婦人の乳上に青筋多く顯わるるもの、刺して血をとる也。醫案中に、

【口語訳】

舌は目印である。この法は誤りである。『外科正宗』に次のようにある。「重舌、木舌、紫舌、舌脹等の病は、腫脹し、疼痛し、硬強して語ることが出来ない。また合併するのは、舌根並び兩齒の接合し終わるところに腫を作る。瘀血がベツタリと口を塞ぎ、口の開閉が

³³⁵ 『備急千金要方』卷第六上、七竅病上、舌病第四に「治舌卒腫、満口溢出、如吹猪胞、氣息不得通、須臾不治殺人方、急以指刮破舌兩邊、去汁即愈、亦可以鋒刀決兩邊破之、以瘡膏敷之。又方、刺舌下兩邊大脈血出、勿使刺著舌下中央脈、出血不止殺人。」とある。

³³⁶ 舌蹇。『漢方用語大辞典』に、「舌蹇（蹇）」、「病証名。舌渋ともいう。本証は、脾胃に積熱があつて津液を灼傷することによつて舌体が卷縮して動きがぶくなり、言語が不明瞭なことをいう。」

困難となる。すべてこの方法を用いて、これを刺す。太い縫い針を用い筋頭の上を刺す。患うところを刺して血を出すと紅紫黒であり毒が重い（患うところを刺して血を出す。紅紫だと軽いが、紫黒であると毒が重い）³³⁷。甚しい場合は、数十刺してもよい。血が出尽したら温湯にて漱ぐ。」等という。また『刺絡篇』には以下のようにある。「舌下左右にあつて柱（舌小帯）を挟さむようにある絡（靜脈）、「キキホルスアテル」と名づけられたものがある。病で、刺さねばならない症状のものは、その絡が必ず盛（旺盛）である。舌を

挙げてこれを取る。鉞針（びし）を用い、さつとこれを刺す。血がもし止まらなければ、口に味のこい酢を含みしばしば漱ぐ。もしくは竜骨、礬石等を塗るのもよい。咽喉腫痛及び舌瘡、木舌、重舌、腫脹満口などの病は、この治療法が主治となる。また、言語不正（言語障害）のものは、舌柱に施術する。また急に陥つた仮死状態、九候の脈がすでに触れなくなつていっていても、天枢穴（臍の外方二寸）に動が有る場合は、三稜針を用いて、舌心（舌の中心部）を刺すとよい。時には蘇生するものがある。」などという。これにより考えると、『備急千金（要方）』に「舌下中央の脉を刺して血を出せば人を殺す。」という説にこだわつてはいけぬ。ある針医が、私に告げた。「中風で、舌が卷縮して、言語障害になつたものに、その舌を持って引つ張り出し、出てきたところの兩側を、刺して血を出すと、舌が

³³⁷ 『外科正宗』に従うと（ ）内のようになる。

上手く動くようになる。」と言った。

一 乳に多くあるとは、婦人の乳房上に青筋が多く現れるのを、さして血をとるのである。『痧脹玉衡書』の「治験の中に、

「本紙第十三丁ウラ」

【原文】

一 婦壯髮面赤口渴唇焦用陽「陽」明胃經藥遂暈ヲ発メ不醒乳辺痧ヲ放「二針ニメ甦ス又一婦傷風咳嗽煩悶脉左沉右洪放乳上痧ト云リ○腫脹ノ病人大小脈青筋アラワル、モノアリ然任脈部ノ青筋ハ多現シタリ任刺ス」ヲ俟タスメ佳ナリ

一 在両手十指頭トハ卒病急症ハ十指頭ヲ刺メ血ヲ出スヘシ青筋紫筋ニ拘ルヘカラス医案中ニ十指筋ヲ闕トアリ又左ノ中指右ノ無名指微帶黒色ト云アリ又細ニ視「其十指」有細紅糸筋歴々可験ト云有此等ノ筋アラハ筋ヲ刺ス虞天民モ甚者八十指頭ヨリ出血トアレハ痧筋ニ拘ハラス指頭ヲ刺メ悪血ヲ去ヘシ刺法ハ指頭ノ節當ヲヨリニテ結び針スヘシ血ヨク出ル○指頭ノ針穴玉衡ニ指尖ニ刺ス大タ「太タ」³³⁸指甲ニ近ケレハ大害ナシトイヘトモ人ヲメ頭眩セシム針鋒微ニ入レ肉必シモ深く入レスト云リ蘭奢貴^{ランセツク}担ニテ半分ハカリ刺スヘシ○医宗金

³³⁸ 大タ。『痧脹玉衡書』（早稲田図書館）では「太た」。拠つて改める。

鑑ニ凡中風跌³³⁹倒

【読み下し】

一 婦、壯熱^{ツウネツ}あり、面赤く、口渴き、唇焦^{カハヒ}く、陽明胃經の藥を用

うるに、遂に暈^{ウン}を發して醒^{サト}ず。乳邊りの痧を放つこと二針にし

て甦^{ユメガキ}らす。³⁴⁰又一婦、傷風して、咳嗽し、煩悶す。脉、左

は沈、右は洪、乳上の痧を放つ³⁴¹と云えり。○腫脹の病人、大

³³⁹ 「跌」は、「跌」の誤りと思われる。

³⁴⁰ 『痧脹玉衡書』痧脹舌胎論・治験、「霍庭賢内室、四月間壯熱面赤、口渴唇焦。有以陽明胃經症藥治之、遂發暈、終日不醒。余診之、脈兩寸弦細、兩關沉微、兩尺左大右緊。曰脈症不合、痧毒内攻也。先用蘇木散、砂仁湯、微冷飲之。令其老婦放指上痧二十餘針、血色墨黒、猶不醒。後令放乳邊痧二針、乃蘇。餘症不減、用痰藜散、微温湯飲之。付桃仁紅花湯加枳殼四劑、下盡惡毒黒物而痊。」

³⁴¹ 『痧脹玉衡書』痧脹兼麻疹・治験、「陳弘甫傷風發熱、咳嗽煩悶。脈左沉右洪。放乳上痧二針。用紫樓湯冷飲、麻疹漸現。次日為穢氣所觸、復隱隱不發、刮兩臂肩背痧、用荊芥湯減川芎加黃芩、銀花、紅花、沙參、烏藥、微冷飲之、麻疹即發、再劑而愈。「陳弘甫」という名は、文中の「一婦」に合わない。

小腹青筋あらわるるものあり。然れども腹部の青筋は多く現したりとも刺すことを俟たずして佳なり。

一 兩手十指頭に在りとは、卒病、急症は、十指頭を刺して血を出すべし。青筋紫筋に拘わるべからず。醫案中に「十指筋を聞する」³⁴²とあり。又「左の中指、右の無名指、微かに黒色を帶ぶ」³⁴³と云うあり。又「細かに其の十指を視れば、細き紅の絲筋歴々と有り。驗」^(六)

³⁴² 『痧脹玉衡書』・産後痧痛論・治驗、「顧月溪內室、産後三日。腹中絞痛、脹大如臍、惡露不通。延餘診之、餘思產婦腹痛、當在小腹大腹脹痛、亦僅微疼。今產婦大腹絞痛異常、非產婦本症。及按脈、洪數有力、餘曰、此産後兼痧脹也、當取痧筋驗之。不信、漫服産後藥、益覺昏迷不醒。復求餘治、勢已危極、痧筋不現。先取童便一杯、飲之、少蘇。聞十指筋、刺出紫黑毒血二十一針、然後扶起、放腿窩痧六針、絞痛稍定。用獨活紅花湯、微溫服之。造痧毒消盡、脹痛盡止、惡露俱通、後調補乃痊。」

³⁴³ 『痧脹玉衡書』・産後痧痛論・治驗、「單公廉內室、産後六日、遍體疼痛、寒熱如癘、昏悶異常。延余。六脈時有歇止、聞左中指、右無名指、微帶黑色、乃知兼痧之症。刺指上紫黑毒血七針、臂上毒血一針、舌底下紫黑毒血一針、昏悶疼痛稍緩。用獨活、桃仁、蘇木、香附、童便、薑黃、山楂、微溫服二劑、疼痛昏悶俱除、但寒熱未已。二用金銀花、丹參、益母草、艾、柴胡、獨活、姜炭、牛膝、山楂、溫服四劑。寒熱乃廖。調補月餘而健。」

すべし」³⁴⁴と、云う有り。此れ等の筋あらば、筋を刺す。虞天民³⁴⁵も「甚しき者は、十指頭より血を出たす」³⁴⁶とあれば、痧筋に

³⁴⁴ 『痧脹玉衡書』・老弱兼痧・治驗、「盛君和母、五十歲、痰火多年。忽面赤頭汗、遍身俱腫、喘急煩悶倍常。延余診視、余思老年痰火、固所宜然、何面赤頭汗、遍身俱腫之驟也。及按其脈、又與症相合、不可據以爲痧。然恐痧之爲禍不小、若竟以老弱疾、火治之。終覺疑而不安。細視其十指、有細紅絲筋、歴歴可驗、則其痧之爲老弱變症也明矣。先治其痧、刺指頭二十餘針、去其毒血。次用稍冷湯、服寶花款。面赤、頭汗、身腫俱除、喘急亦漸和緩、唯是老弱痰火爲終身之疾。」

³⁴⁵ 虞天民、「虞搏」^(七)（二四三八—一五一七年）明の医学者。字は天民、自ら花溪恒徳老人と号す。浙江義烏（浙江省義烏）の人。『医学正伝』（一五二五年）を、撰し諸家の学説を縦横に取り入れ、自身の考えや臨床經驗をあわせ幅広く論じる。前出「中国医学史レファレンス辞典」、一〇四頁。

³⁴⁶ 虞搏『醫學正傳』、出版者不明、一六三四（寛永一）年、（早稲田大学図書館蔵）卷之一、二十六葉オモテ一二十七葉オモテ。醫學或問、發痧之證が述べられ、その中に、「或問、發痧之證、古方多不該載。世有似寒非寒、似熱非熱、四體懈怠、飲食不甘、俗呼爲痧病。其治或先用熱水蘸搭臂膊而以芒麻刮之、甚者或以針刺十指出血、或以香油燈照視身背有紅點處皆烙之、以上諸法、皆能使腠理開通、血氣舒暢而愈。此爲何病。又何由而得之乎。曰內經名爲解、原其所因、或傷酒、或中濕、或感冒風寒、或房事過多、或婦人經水不

拘わらず指頭を刺して悪血を去るべし。刺法は指頭の節(あた)當りを、よりにて結び針すべし。血よく出る。○指頭の針穴、『玉衡』に「指尖に刺す。(はなは)太だ、指甲に近ければ大害なしといえども人をして頭眩

せしむ。針鋒(はり)微かに肉に入る。必ずしも深く入れず」347と云

り。蘭奢貴ランセツト姐349にて半分ばかり刺すべし。○『醫宗金鑑』に「凡そ中風、跌350倒し、

【口語訳】

「ある婦人が、高熱が出て、顔は紅潮し、口が渴き、唇も焦(かわ)いた。

調、血氣不和、皆能爲解、證與砂病相似、實非眞砂病也。夫砂病者、嶺南煙瘴之地多有之矣。」とある。

347 頭眩。前出、「風眩」に同じ。

348 『痧脹玉衡』、刺腿膏痧筋法、「其指尖刺之太近指甲、雖無大害、當知令人頭眩。若一應刺法不過針鋒微刺人肉、不必深入。」

349 蘭奢貴姐。「ランセツト(Lancet)」、手術用メスの一種。

350 「跌」は、「跌」の誤りと思われる。

陽明胃經の薬を使ったところ、ついに、意識障害を起こして覚醒しなくなった。乳房辺りの痧を二針、放出すると甦(よ)った。また「ある婦人が、傷風となり、咳嗽して、煩悶した。脉をみると、左は沈、右は洪であった。乳上の痧を放出した」とある。腫脹の病人には、上腹部、下腹部に青筋の現れるものがある。腹部の青筋は多く出現していても刺すに及ばない。

一 両手の十指頭に在るとは、急に起きた仮死状態、急病は、十指の指頭を刺して血を出すのがよい。青筋、紫筋にこだわってはいけない。『痧脹玉衡書』の「治験に、「十指の筋(静脈)を見る」とある。また「左の中指、右の無名指が、わずかに黒色を帯びている。」ともある。また「仔細にその十指を見ると、細い紅の糸のような筋(静脈)がはつきりと有る。試してみよう。」というものもある。これらの筋があれば、筋を刺す。虞天民も「劇症のものは、十指の指先から血を出す」と言っているのだから、痧筋に拘わらず指先を刺して悪血を去るのがよい。刺法は指先の関節の辺りを、紙縫(こしら)で結んでから針をするといふ。血がよく出る。指先の針をする穴(箇所)は、『痧脹』玉衡(書)では、「指の尖端に刺す。非常に爪に近いと、大きな害はない、とは言っても、人にめまいを起こさせる。針鋒を微かに肉に入れる。絶対に深く入れない。」とある。ランセツトで(針先)半分ほど刺すのが良い。『医宗金鑑』に「一般的に、中風で、倒れ、

〔本紙第十四丁オモテ〕

〔原文〕

卒暴〔暴〕昏沉痰盛不省人事牙關緊急藥水不下急以三稜針刺^二中衝
 {中指內側} {少商} {大指內側} {商陽} {兌指內側} {關衝} {四指外側}

少衝 {少指內側} {少澤} {少指外側} {使^二血氣メ流通^一 実起^二死回^一

〔回〕生急救之妙訣也按是痧病ノ刺法ナリ錢斗保痧病トハ云ス急救之
 妙訣トス依^レ之^二見^レ〔ハ〕之十指ヲ刺ス^一唯嶺南ノ溪澗ノミニアラ

サルヲ知ヘシ内經ニ云十指間ヲ刺スト云ハ此穴ヲ云也○入門絞腸痧
 腹痛難忍但陰痧ハ腹痛而手足冷看其身上紅点以^レ油^一燈^一心ヲ點^レ火燎
 之即愈陽痧ハ腹痛メ手足暖以針刺其十指背^①〔○と刺が重なつてい

る〕近爪甲^一半分許即動^レス爪甲而指背後皮肉動処血出即安仍先自兩
 臂將^二下^一其惡血^一合^レ聚^テ指頭^一血出^ヲ為^レ好^一清^一陳飛霞幼々集成
 絞腸痧其病因^三脾胃之部無³⁵¹ニ從^レ而出若^一如^二喘滿作^レ擗者^ハ十^二
 不^レ救^一一其刺法十指背近爪甲処^一韭菜許○按李陳ノ二子ハ爪甲後一
 分許ヲ刺ス金鑑ハ爪甲ノ穴処ヲ刺ス玉衡ハ指頭尖ヲ刺ス●●●〔消

³⁵¹脾胃之部無。『幼々集成』作「脾胃之邪無」。

字跡」³⁵³三說不^レ同トイヘトモ其理ハ一ナリ余ハ金鑑ニ從テ穴所ヲ
 サス血

〔読み下し〕

卒暴^{にわか}に昏沉し痰盛にして人事不省し、牙關を緊急す。藥水下らず。
 急ぎ三稜針を以て中衝（中指內側）少商（大指內側）商陽（兌指³⁵³
 內側）關衝（四指外側）少衝（小指內側）少澤（小指外側）を刺し、
 血氣をして流通せしむ。實に、起死回生、急救の妙訣也。」³⁵⁴是を
 按ずるに痧病の刺法なり。錢斗保³⁵⁵痧病とは云わず、急救の妙訣
 とす。之に依り之を見れば、十指を刺すこと唯嶺南の溪澗のみにあ

³⁵²●●●は、消し字跡、「血能出」と読める。

³⁵³兌指。第二指。人差し指。

³⁵⁴『醫宗金鑑』、外科卷下、刺灸心法要訣、手部主病針灸要穴歌、
 「中衝穴、『乾坤生意』云、此爲十井穴、凡初中風跌倒、卒暴昏沉、
 痰盛不省人事、牙關緊閉、藥水不下、急以三稜針刺中衝、少商、商
 陽、關衝、少衝、少澤、使血氣流通、實起死回生急救之妙訣也。」

³⁵⁵錢斗保。『中国古医籍書目提要』、一五一九頁、「御纂醫宗
 金鑑』、『醫學讀書志』一（清）曹禾著、救攘醫宗金鑑九十卷。乾隆
 四年十一月十七日、太醫院使錢斗保、右院判王炳、御醫吳謙、奉上
 論。」とある。

らざるを知るべし。『内經』に云う、「十指間を刺す。」³⁵⁶と云うは、

此の穴を云う也。○『入門』「絞腸痧、腹痛忍び難し。但だ陰痧は腹

痛して手足冷え、其身上に紅點を看る。油、燈心を以て火を點し

之を燎（や）けば即ち愈ゆ。陽痧は腹痛して手足暖かし。針を以て其の十

指の背を刺す。爪甲半分許りに近きを刺さば即ち爪甲は動す。指の

背後にして皮肉の動きたる處に血を出だせば、即ち安んず。仍お、

先ず兩臂（うで）自り將（も）り將（も）り其の惡血を下さんとし、指頭に聚めしめて、

血を出ださば好しと爲す³⁵⁸○清の陳飛霞『幼々集成』「絞腸痧、其

³⁵⁶ 『黃帝內經素問』卷第十、刺癰篇第三十六、「凡治癰、先發如食頃、乃可以治、過之則失時也。諸癰而脈不見、刺十指間出血、血去必已、先視身之赤如小豆者盡取之。」また、手の十指間は「八邪」、足の十趾間は「八風」という奇穴。

³⁵⁷ 原文の返り点は、現代の標準的な用法ではない。

³⁵⁸ 『醫學入門』、卷七、急救諸方、「救絞腸痧、即腹痛難忍、但陰痧腹痛而手足冷、看其身上紅點、以油燈心點火燎之即愈。陽痧腹痛而手足暖、以針刺其十指背近爪甲半分許、即動爪甲、而指背皮肉動處血出即安。仍先自兩臂持下其惡血、令聚指頭、血出爲好。」

病は脾胃之邪³⁵⁹従りて出づる無きに因る。若し喘滿³⁶⁰し擗（ち）

を作すが如き者は、十に一も救わず。其の刺法は十指の背の爪甲に

近き處、一菲葉許り。³⁶²○按ずるに李陳の二子は爪甲の後（うしろ）一分

許りを刺す。『金鑑』は爪甲の穴處を刺す。『玉衡』は指頭尖を刺す。

三説同じからずといえども其の理は一なり。余は『金鑑』に従いて穴所をさす。血

【口語訳】

³⁵⁹ 脾胃之部無。『幼々集成』は「脾胃之邪無」と作る。抛つて改める。

³⁶⁰ 喘滿。『漢方用語大辞典』に、「呼吸促進が激しく、気が上逆して下らず、壅阻して滿をなすこと。」

³⁶¹ 擗。『漢方用語大辞典』に、「筋肉がひきつり、けいれんするこゝ。」

³⁶² 『幼幼集成』卷二、霍亂證治乃有上不得吐、下不得瀉、爲乾霍亂、又名絞腸痧。其病因脾胃之邪無從而出、若加喘滿作擗者、十不救一。」又、「其乾霍亂上不得吐、下不得瀉、最爲危迫、速用鹽湯探吐之、必待其吐出宿食積痰、然後用藥、或以針刺十指甲邊令血出、或刺膝灣名委中穴、出血即解、後用藿香正氣散。」

急に意識障害を起こし、痰がひどく、人事不省となり、牙関緊急（開口障害）を起こす。薬液も飲み込めない。急いで、三稜針を用い、中衝（中指内側）少商（親指内側）商陽（人差し指内側）関衝（薬指外側）少衝（小指内側）少沢（小指外側）刺して、血氣を流通させる。実に、起死回生、救急の優れた方法である。」とある。考えると、これは痧病の刺法である。『医宗金鑑』を撰した錢斗保は、痧病とは言わないで、救急の優れた治療法とする。このことより、この治法（指先の刺絡）を考えると、（この）十指を刺すという方法は、ただ嶺南の山間の溪谷のみで行われるのではないことを知るべきである。『黄帝』内経（素問）に記載される、「十指間を刺す。」というのは、この穴（ツボ）をいうのである。³⁶³『医学入門』「絞腸痧は、腹痛が（激しく）耐えがたい。陰痧は腹痛がして、手足が冷え、その身体上に紅い点を見ることが出来る。灯心を用いて、油に火を点火し、これ（紅い点）を焼けばたちまち治る。陽痧は腹痛がして、手足は暖かい。針を用いて、十指の背（甲）を刺す。指の爪甲の半分（³⁶⁴二・五ミリ）ほど離れたところを刺すと、爪は動く。

³⁶³ 『黄帝内経素問』では、「十指間を刺す。」であり、『医宗金鑑』にある「中衝、少商、商陽、関衝、少衝、少沢」等は、指先にあるから同一とは言いがたい。つづいて挙げられる『医学入門』「幼幼集成」は、どちらも「十指の背の爪甲に近き処」であるから、『医宗金鑑』とほぼ同じ場所といえる。

指の背後で、皮膚が動くところから血を出せば落ち着く。なお、最初に両腕から、悪血を（指先の方へ）下しておくといよい。指先に（悪血を）あつめて、血を出すと上手くいく。清の陳飛霞が著した『幼々集成』では、次のように記載される。「絞腸痧、この病は邪が脾胃から出ていかに因る。もし呼吸が喘ぎ（胸部が）膨満し、けいれんを起こすようなものは、十中八九助からない。この病の刺す治療法は、十指の背（甲）の爪甲の近く、一蕪葉ほど離れたところ（を、刺す）。」これらを考えると、李（李挺『医学入門』）陳（陳復正『幼幼集成』）の二人は、爪甲の後約一分を刺す。『医宗金鑑』は爪甲の穴（ツボ）のところを刺す。『痧脹玉衡書』は指頭尖を刺す。三つの説は異なっているがその理論は同一である。私は、『（医宗）金鑑』に従って穴所（ツボ）を刺している。血がよく出る。

「本紙第十四丁ウラ」

【原文】

能出ツ又指尖ヲ刺ス初ハ出テスシボリテ血能出ツ又咽喉急閉ノモノ手ノ少商ヲ刺シ足ノ太谿ヲ刺ス「前ノ喉中ニ出セリ

三説ノ圖



一 在兩臂灣トハ前ニ述ルコトク痧筋ハ兩ノ手ノ臂灣曲池尺沢ノ邊脚ハ兩腿灣委中ノ邊ニテ青筋アラワル者ヲ痧病トシ刺メ血ヲトルヘシ余常ニ毒筋ヲ見ルニ肘中ノ筋モ常ニ有処ノ絡筋ノ青綠色ニナル也別ニ筋ノ頭ルニアラス人ニヨリ頭ルトアラワレサルアリ又紫筋紅筋ナド毛髮ノ如ナル細筋出ルアリ是ハ刺テモ奔ルホトノ血出ルナシ

○刺法ハ刺絡編ニ云如ク長サ二尺四五寸濶一寸許ノ木綿ニテ手臂ノ一寸許リ上ヲ能ク縛扎是ヲ縛綿ト名ツク手ニ杖ヲ握リ力ヲ用レハ絡脉皆張

【読み下し】

能く出づ。又指尖を刺す、初めは出でず、しばらくして血能く出づ。又、咽喉急閉のもの、手の少商を刺し、足の太谿を刺すこと前の喉中に

出せり。

三説ノ圖



一 兩臂灣に在りとは、前に述ぶるごとく痧筋は、兩の手の臂灣、曲池、尺澤の邊り、脚は兩腿灣、委中の邊りにて、青筋あらわる者を、痧病とし、刺して血をとるべし。余、常に毒筋を見るに、肘中

の筋も常に有る處の絡筋の青綠色になる也。別に筋の顯わるにあらざ。人により顯わると、あらわれざるあり。又紫筋、紅筋など、毛髮の如なる細筋出るあり。是れは、刺しても奔るほどの血出ることなし。○刺法は『刺絡編』に云う如く、長さ二尺四五寸、濶さ一寸許りの木綿にて、手臂の一寸許り上を能々縛りて扎す。是れを縛綿と名づく。手に杖を握り力を用れば絡脉、皆な張る

【口語訳】

指尖を刺すと、初めは（血が）出ないが、しばらくとよく出る。また、咽喉が急閉したものは、手の少商を刺し、足の太谿を刺すというのは、前出の喉中（喉中両旁に在り）のところで述べた。

三説の圖



一 両臂灣（左右肘關節曲面）に在るとは、前に述べたように、（そもそも）痧筋は、左右の手の肘關節屈曲面の、（経穴でいうなら）曲池、尺沢の辺り、脚は左右の膝關節屈曲面の（経穴でいうなら）、委中の辺りに、青筋（静脈）のあらわれるものを、痧病としている（のであるから）、これ（痧筋）を刺して血を取らねばならない。私が、常々、毒筋を見ると、肘中の筋も、常（正常時）より有る絡筋（静脈）が青緑色になるのである。別に（正常時には無い）筋が現れるのではない。人によって、現れる人と、現れない人がある。また紫の筋や、紅い筋など、毛髪のような細い筋が出ることもある。これらは、刺しても血が奔出するというようなことはない。刺法は（荻野元凱）『刺絡編』に述べられるように、長さ二尺四五寸（約七〇〜七五センチ）、巾一寸許り（約四センチ）の木綿で、肘關節の上方面一寸許り（約四センチ）の所を、しっかりと縛つてから刺す。この木綿を、「縛綿」とよぶ。手に杖を握らせ、力を入れさせると、絡脉（静脈）が、みな怒張する。

〔本紙第十五丁オモテ〕

【原文】

ナリ其時左ノ手ノ大指次指ミテ其血結「結」セル絡ヲ挟ミ按メ其間ニ鍼針ヲ加ヘ右手ノ指頭ニテ一彈スレハ針ヲ取ルニ違アラズ忽濁血迸出スル也豫メ備「磁器」其血ヲ受ク病人是杖ヲ運轉スレハ血出ヤスシ血ヲ止ント欲セハ右ノ縛綿ヲ解キ杖ヲ放チ力ヲ弛なメルトキハ血即

出也乃以「拇指」ハリアド「瘡痕ヲ捺テ針口ヲ塞キ是後木綿ヲ方二寸位ニ切り
苦酒ニヒタシ四重ニ折針口ヲ壓シ又縛綿ニテ巻置ヘシ一時ハカリ過
テ縛綿ヲトクヘシ
尺沢血絡刺際圖



【読み下し】

なり。其の時、左の手の大指、次指をみて、其の血結せる絡を挟み、
按じて其の間に鍼針を加え、右手の指頭にて一彈すれば、針を取る
に違（い）あらず、忽ち濁血迸出する也。豫め磁器を備え其
の血を受く、病人、是の杖を運轉すれば血は出でやすし。血を止め
んと欲せば、右の縛綿を解き、杖を放ち力を弛（な）めるときは、血、
即ち出づる也。乃ち拇指を以て瘡痕を捺（はりあと）て針口を塞ぎ是の後、木綿
を、方二寸位に切り苦酒にひたし四重に折り、針口を壓し、又縛綿
にて巻き置くべし。一時ばかり過ぎて、縛綿をとくべし。

尺澤血絡刺際圖³⁶⁴

尺沢血絡刺際圖



【口語訳】

そこで、左手の親指と人差し指で、この怒張した絡（静脈）を挟み押さえて、指の間に鉞針を添え、右手の指頭にて一弾きすると、針を離す間もなく直ちに濁血が吹き出す。予め磁器（容器）を準備しておいて噴出する血を受ける。病人が、この（握っている）杖を回転させると血が出やすい。血を止めようと思えば、先の縛綿を解き、（患者が）杖を手放し力を緩める。血は（まだ）出ている。そこで、親指で針の跡を押さえ傷口を塞ぐ。そして、木綿を、二寸位（約六センチ）四方に切ったものを苦酒（十）にひたして、四重に折り、針跡を押さえ、さらに縛綿にて巻いて置くとよい。しばらくしてから、縛綿を解くとよい。

364 尺沢血絡刺際図。この図は、前出、『刺絡編』本文一四丁オモテより転記されたものと思われる。巻末の図（図 1、尺沢刺際図・血絡刺痕図）を参照。

尺沢血絡刺際図

尺沢血絡刺際図



【本紙第十五丁ウラ】

【原文】

一 在兩腿灣トハ靈樞ニ云郄中是也股ノヲレメ浮郄委阳委中ナトノ邊ニ青筋出モノ刺メ血ヲトル刺法ハ病人ヲ平立セシメ兩ノ手壁ニ倚リ兩脚フミノソロヘ立シメテ膝上一寸ハカリヲ縛綿ニテ緊（キレシ）「紮（シメ）」ルトキ血絡張ナリ是ヲ刺メ血走ル止ント欲ハ縛綿ヲトキ瘡痕ヲヲサユル「臂灣ノ法ノコトシ〇腰脚痛モノ却テ筋見レサルモノ有用葉ヲ筋見シテ後ニ刺スヘシ又其中ニ堅（ツル）ニ大筋出ルアリ皮肉ノ中ニアリ刺スヘカラス上へ浮キテ見レタル筋ヲ刺ヘシ又膝下兩傍ノ間ニ蚯蚓ノ如キ筋出ルアリ刺メ血ヲトルヘシ

晰義上編終

【読み下し】

一 兩腿灣に在りとは『靈樞』に云う郄中、是れ也。股のおれめ、

浮郄、委陽、委中などの邊りに青筋出るもの、刺して血をとる。刺法は病人を平立せしめ兩の手を壁に倚り、兩脚をふみそろえ立たしめて、膝上一寸ばかりを縛綿にて緊く禁るとき、血絡張るなり。是れを刺して血、走しる。止めんと欲せば、縛綿をとき疔痕をおさゆること、臂灣の法のごとし。○腰脚痛むもの却つて筋見れざるもの有り。薬を用いて筋見して後に刺すべし。又其の中に堅に大筋出るあり。皮肉の中にあり。刺すべからず。上へ浮いて見れたる筋を刺すべし。又膝下兩傍の間に、蚯蚓の如き筋出るあり。刺して血をとるべし。

晰義上編終

【口語訳】

一 膝関節屈曲面に在りとは、『黄帝内経 靈枢』に云う郄中のことである。脚の関節、浮郄、委陽、委中などの（経穴の）辺りに青筋が出るものを刺して、血をとる。刺法は病人を起立させ、両手を壁に着け、両脚をそろえて起立させる。膝上一寸ばかり（約三センチ）

（ち）を縛綿で、きつく縛ると、血絡（静脈）が怒張する。これを刺すと、血がほとばしり出る。（その血を）止めようと思えば、縛綿を解き針跡を押さえるのは、肘関節の方法と同様である。腰や脚の痛むもので、かえつて筋（静脈）の現れていないものがある。（このようなものには、まず）薬を用い、筋が見えてから後に刺すと良い。また縦に大きな筋（脈）の出ることがある。（これは）皮肉の中にある。これを刺してはいけない。体表に浮いて見える筋を刺さないといけない。また膝下両側のところに、蚯蚓のような筋（静脈）が出ることがある。（これは）刺して血をとると良い。

晰義上編終

「本紙第十六丁オモテ」

【原文】
痧脹晰義後編

楊阜山人兒島翻冲夫撰

痧脹ハ前編ニ述ル如ク毒虫ノ所為ニテハナク又南方吳楚ノ水涯ニバカリ有ル病ニモアラス中國東方イツレニモ有病ナリ巢氏病原候論モ詩經左傳ナトニ在ヲ祖トメヤハリ水源毒虫トナシテアレ任前編ニ引処ノ如ク諸書ニ散見スル所ノ病ニテ痧トイハサレ任此病多有ル病ナリ夫故毒虫痧病ノ名ニ拘「拘」ハラス此等ノ症アラハ早ク痧病ト知リテ治ヲ施スヘシ其病ヲ見テ是痧病ナリト知テ治ルナラ千人ニ一人モ失ナカルヘシ痧病才「第」一ノ的症ト云ハ青筋ナリ凡人ニ對メ

診脉スルトキ手腕ノ間ヲ氣ヲ付テ見ルヘシ青筋アリト目ニ付ナラハ
臂ノ灣尺沢ノ邊ヲミルヘシ尺沢ノ処ハ一入濃色ニミユルナリ此處ニ
青筋サヘアラハ積聚ニモセヨ疝氣ニモセヨ又痛風勞瘵痰咳癰腫ノ類
ニモセヨ意痧病ヨリ

【読み下し】

痧脹晰義後編

楊阜山人兒島翻沖夫撰

痧脹は前編に述ぶる如く毒蟲の所爲にてはなく、又南方吳楚の水涯
にばかり有る病にもあらず。中國、東方いづれにも有る病なり。『巢
氏病源候論』も『詩經』『左傳』などに在るを祖として、やはり水源
毒蟲となしてあれども、前編に引く處の如く、諸書に散見する所の
病にて、痧といわざれども此の病、多く有る病なり。夫れ故、毒蟲、
痧病の名に拘わらず此れ等の症あらば、早く痧病と知りて治を施す
べし。其の病を見て、是痧病なりと、知りて治るなら千人に一人

も失^(おぼ)なかるべし。痧病第一の的症と云わば青筋なり。凡そ病人

に對して診脉するとき、手腕の間を氣を付て見るべし。青筋ありと

目に付くならば、臂の灣、尺澤の邊りをみるべし。尺澤の處は一入^(ひし)

濃色にみゆるなり。此處に青筋さえあらば、積聚にもせよ、疝氣に

もせよ、又痛風、勞瘵^(ろうさい)、痰咳、癰腫³⁶⁶の類にもせよ、意^(おぼ)、
痧病より

【口語訳】

痧脹晰義後編

楊阜山人兒島翻沖夫撰

「痧脹」は「前編」で述べたように、毒虫によるものではない。また
³⁶⁵ 勞瘵。病名。伝染性の慢性の消耗性疾病をいい、肺結核に類す
る。または、虚損の重症。

³⁶⁶ 癰腫。『漢方用語大辞典』に、「腫で腫を發するもの。」「靈
樞官鍼篇」「贊刺は直に入れ、直に出し、しばしば鍼を發して之を
淺し、血を出す。是癰腫を治するをいうなり。」。また「癰」は、
「六淫を外感し、あるいは膏梁厚味のものの過食、あるいは外傷感
染などにより、營衛が和せず、邪熱が壅（癰は壅に通ず）し、氣血
が凝滞して、本病を發する。症状としては、腫れは大きく、根は淺
く、赤色を呈して痛みが強く、皮は薄くて光沢を帯び、化膿しやす
く、またその口はすみやかにふさがる。發病部位によって、外癰・
内癰の二つに区別される。」「靈樞經篇」「榮衛經脈の中に稽留
するときは、血泣して行らず、行らざるときは衛氣之に従って通ぜ
ず壅遏して行ることを得ず。故に熱す。大熱止まず、熱勝つときは
肉腐る。腐るときは膿をなす。然れども、陥ることあたわず、骨髄
焦枯をなさず。五臟傷るることをなさず。故に名づけて癰という。」

(中国) 南方の呉・楚の水辺にだけ有る病ではない。中国、東方(日本)のどちらでも起きる病である。『巢氏(諸) 病源候論』は『詩経』や『左伝(春秋左氏伝)』をはじめりとして、「水源にいる毒虫(による)」としている。しかしこの病は、(私が)「前編」で引用したように、多くの医書に散見している病で、(ここでは)「痧」とは呼んでいないが、多く(記述が)みられる病である。それゆえ、「毒虫」、「痧病」と言った名称に拘らずこのような症状があれば、速やかに「痧病」だと診断して治療を施すべきである。病を見て、これは「痧病」であると、診断が出来て治療するならば千人のうち一人も失ることは無いだろう。「痧病」において第一に目標とする症状は青筋であると言える。一般的に病人に対して脈診をする時には、手腕のあたりに、気をつけて見るべきである。そして青筋のあるのが目についたならば、肘関節屈曲面にある尺沢の辺りを見てみるとよい。尺沢のところは、一段と濃い色に見えるであろう。この部位に青筋があるのなら、「積聚」であっても、「疝氣」であっても、また「痛風」、「癆瘵」、「痰咳」、「癰腫」等の病であったとしても、思うに(青筋は)「痧病」より起きている病を示すことと理解して、

〔本紙第十六丁ウラ〕

〔原文〕

起タル病ト知り痧病ノ療治ニ従フヘシ若又此青筋ナキモノハ其症何

ホト痧病尔似□「タル」³⁶⁷ト思フトモ決メ此治法ヲ施ヘカラス此
 □³⁶⁸至テ見易キ的症ナリ玉衡ニ痧筋アラハレザル者アルノ説アレ
 疔夫ハ上手ノ「ニテ初心ノ内ハタシカノ見処ナクンハ容易ニ治ヲ施
 スヘカラス扱又痧病ニテモ血ヲ取ト取ラレサルノ的症アリ是ヲ知ラ
 サレハ得テ行フヘカラス是ハ右陶氏ノ見識トミヘタリ何ヲタシカノ
 見トコロゾト云ハ右陶氏題セル痧脹ノ脹ノ字ナリ諸書ヲ考ルニ痧脹
 ト連續シタル熟字ナシ一ノ脹ノ字ヲ下セル「右陶ヨリ創リテ第二ノ
 的症トスヘシ是ヲ知ラサレハ刺法ヲ施メモ病ヲイヤス」能ハサルノ
 ミナラス大ニ害ヲ招クナリ脹ハハルト訓ス痧ハ瘀血経絡ノ内ニ阻抑
 スルヨリ起ル血流行メ滞ル「ナク昼夜五十度ノ数ニ合フトキハ病ト
 ナラス然ルニ外ヨリ六氣ニ侵サレ内ニメハ七情ニ腦^ママサレ血ノ
 運行ヲ阻抑メ度数ニ合ハズ自濁リテヲリトナルタトヘハ溝ヤ堀ノ水
 先ヘナカレズ游水トナルニ似タリ其血ニゴリ痧トナルトキハ正赤ナ
 ラスメ紫黯ニナル

【読み下し】

起りたる病と知り、痧病の療治に従うべし。若し又、此の青筋なき

³⁶⁷ □は、。 「似多留」 「似タル」と思われる。

³⁶⁸ □は、。 「此」の字の下は虫損か。

³⁶⁹ 「腦」は「惱」の誤りと思われる。

ものは、其の症何ほど痧病(ひか)に似たると思ふとも、決して此の治法を施すべからず。此れ至つて見易(めい)き(めい)的(めい)症なり。『玉衡』に痧筋あらわれざる者あるの説あれども、夫れは上手のことにて、初心の内は、たしかの見處なくんば容易に治を施すべからず。扱(さ)、又痧病に

ても血を取ると取られざるの(めい)的(めい)症あり。是れを知らざれば、得て行ふべからず。是れは右陶氏の見識とみえたり。何をたしかの見どころぞと云うは、右陶氏題せる痧脹の脹の字なり。諸書を考(けん)考(けん)

に痧脹と連続したる熟字なし。一の脹の字を下せること、右陶より創りて第二の的症とすべし。是れを知らざれば、刺法を施しても病をいやすこと能わざるのみならず、大いに害を招くなり。脹は、はると訓ず。痧は痧血経絡の内に阻抑するより起る。血、流行して滯ることなく晝夜五十度370の數に合うときは、病とならず。然る

370 晝夜五十度。『漢方用語大辞典』、「五十營」に「脈運が五十度のこと。」、『黄帝内经靈枢』、根結篇、「一日一夜五十營して、以て五蔵の精を営す。數に应ぜざるものは名づけて狂生という。い

わゆる五十營するは五蔵皆氣を受く。其の氣口を持ちて其の至を數うる也。」

に外より六氣に侵され、内にしては七情に惱371まされ、血の運行を阻抑して度數に合はず自ら濁りて、おりぬとなる。たとえば溝や堀の水、先へながれず游水となるに似たり。其の血にこり痧痧となるときは正赤ならずして紫黯になる

【口語訳】

「痧病」の治療法に従うのが良い。けれども、もしこの青筋が無いならば、その症状がいかに「痧病」に似ていると思つても、決して「痧病」の治療法を行つてはいけない。これは、大変わかりやすい診断基準である。(右陶の)『痧脹玉衡(書)』には、「痧筋の現れないものがある」という説もあるが、それは練達したうえでのことであつて、初心者の内は、確実な判断点が無ければ、容易に治療を施してはならない。ところで、「痧病」であつても、「血を取る」と「血を取らない」とを判断するもうひとつの症状がある。これを知らずに、(痧病治療を)行つてはいけない。このことは、右陶氏の優れた知見であると思う。では、何がもうひとつの確実な判断点かという、それは右陶氏の名づけた「痧脹」の「脹」の字である。他の多くの医書を見ても「痧脹」と連続した熟字はない。「脹」の一字を

371 前述の注に従い「腦」を「惱」に改め読み下した。

付け加えたのは、右陶の創作である。(これを)第二の診断基準の症状とするとよい。このことを知らなければ、刺法(刺絡)を施しても、病を治すことが出来ないばかりか、かえって大きな被害を招くことになるだろう。「脹」は、「はる」と読む。「痧」は痧血が経絡の中で、阻止抑制することにより起こる。(通常)血の循環が滞らないで、『黄帝内経靈樞』にあるように)昼夜五十回循環していれば、病とならない。しかし(体)外から(四季の)六氣に侵され、(体)内では、七情(感情)に悩まされることにより、血の運行が阻止抑制されて五十回の循環が出来なくなる。そして自ら濁って、澱おりとなつてしまう。たとえば溝や堀の水が、先へ流れないで渾水(あふれ、溜まった水)となるのに似ている。その血が、濁つて「痧」となつた時は、純粹な赤色ではなく暗い紫色になる。

〔本紙第十七丁オモテ〕

〔原文〕

ト周流スル「遅クシテ渋リ滞ル故一処滞レハ周身十二經ミナメクリヲ抑ユル也コレ痧病ノ由ナリ血滞レハ氣モ滞リ氣血ヒトシク滞ル故衆病生ス急ナル時ハ卒倒シ慢ナル者ハ種々ノ症トナル其痧血ノ皮ニ映シテアヲクミユル故青筋トナル扱脹トハ右ニ云コトク経絡ノ内痧血滞レハ其血久々ヘテ充ルユヘ其絡ハリミツル也是ヲ脹ト云血ハ榮トテ内ヲメクリ氣ハ衛トテ外ヲ守ル今穢惡ノ氣ニ侵サレ血濁リ壅レハアトヨリヲシテクル血タ々ヘテ外ヘアフレ氣ノ守リテアル衛ノ部

ニ客スル故氣メクラスメ病トナル其見症ト云ハ其人ノ尺澤ツツノ肌ヲ見テツラツラト肉フトリ筋フトク血ノアフレミチテ有ヘシ是壅滯シタルシルシ也又肌肉ノ青筋アルモノハ先尺沢ノ方ヨリ手腕ノ方ヘ其筋ヲ指先キニテスコキテミヨ血ハ筋ノ内ニ多ク充テ有ルソレヲスコキテ筋ノ内スキテモ指ヲトリテ血ノ返ル処ノ遅速ニテ痧ト瘵ニアラサルヲ考ヘシ筋イツイハイニ血ノミツルモノハ其青筋ヲ刺メ血ヲ出ストキハ其病イユル「速ニメクニ一ヲ失フ」ナシ又青筋

〔読み下し〕

と周流すること遅くして澁り滞る。故に一處に滞れば、周身十二經みなめぐりを抑ゆる也。これ痧病の由なり。血滞れば、氣も滞り、氣血ひとしく滞る。故に衆病生ず。急なる時は卒倒し、慢なる者は種々の症となる。其の痧血の皮に映して、青くみゆる故、青筋となる。扱(さく)、脹(はる)とは右に云う、こたく経絡の内、痧血滞れば其の血、久々

へて充るゆえ、其の絡、はりみつる也。是れを、脹と云う。血は榮とて内をめぐり、氣は衛とて外を守る³⁷²。今穢惡の氣に侵され、

³⁷² 「榮」、「衛」は、『漢方用語大辞典』、「營衛」に、「營氣と衛氣のこと。両氣とも同一起原、つまり水穀の精氣の化したものである。營は脈中を行き全身を栄養する作用がある。衛は脈外を行き身体を防衛するはたらきがある。一般に營衛は主に機能面をあら

血濁り壅(ふ)がれば、あとよりおしてくる血、たたえて外へあふれ、氣の守りてある衛の部に客する。故に氣めぐらずして病となる。其の見症と云うは、其の人の尺澤の肌を見て、つらつらと肉ふとり、筋ふとく、血のあふれみちて有るべし。是れ、壅痧したるしるし也。又肌肉の青筋あるものは、先ず尺澤の方より手腕の方へ其筋を指先(さき)にて、す(こ)ぎてみよ。血は筋の内に多く充ちて有る。それを、す(こ)ぎて筋の内すぎても指をとりて血の返る處の遲速にて痧と痧にあらざるを考うべし。筋いっぱい血のみつるものは其の青筋を刺して血を出(い)すときは、其の病いゆること、速やかにして千に一を失うことなし。又青筋

【口語訳】

そして循環するのが遅くなり渋って滞るのである。さらに一カ所に滞れば、全身の十二経全ての循環を抑制するのである。これが「痧病」の起因である。血が滞れば、気も滞り、気血ひとしく滞る。なので様々な病が生じる。急性では卒倒し、慢性になつては種々わし、気血は物質的基礎面をあらわしている。気血の運行にしたがつて営衛の作用が発揮される。」

の症状となる。この痧血が皮膚に映って、青くみえるので、青筋となる。ところで、「脹」というのは、先述のように、経絡の内に、痧血が滞ればその血が、長期間を経て充滿するので、絡は張満するのである。これを「脹」と呼ぶ。血は榮として内を巡り、気は衛として外を守っている。今、穢悪の氣に侵されて、血が濁り詰まると、後から流れてくる血は湛え、外へ溢れ、氣の守りである衛の部に侵入する。それで気が巡らなくなり病となる。見るべき徴候は、患者の（肘関節屈曲面）尺沢（あたり）の肌を見て、大変肉付きよく、筋（静脈）も太く、血が溢れ満ちている状態である。これが、痧が壅いでいる証拠である。また肌肉に青筋あるものは、まず（これを）尺沢の方から手首に向かって指先でしごいてみよう。血は筋（静脈）の内に多く満ちている。これをしごいて、（尺沢あたりの）筋の内を通過させ、（その後）指を離し、血が戻ってくるのが遅いか速いかで痧か、痧でないかを考えたと良い。筋（静脈）いっぱい、血が充滿しているものは、青筋を刺して血を出せば、その病は速やかに治癒し、千のうち一つも失敗することはない。また青筋が有つても

【原文】

アリテモ肌肉シハミ其筋ホソク血モスクナキモノハ血ヲトル「用捨スヘシ刮法薬□」³⁷³「劑」ニテ治スヘシ又筋何ホフトク血ミチテ

³⁷³ □「劑」。 「劑」と読める。

モ青色ニアラサルモノハ凡テ痧ニアラス決メ刺スヘカラス其肌肉痿
メシハアリ筋入りナキモノハ血氣ノ衰ヨリ起ル故滋□「潤」³⁷⁴補
血ノ手アテヨシ決メ刺ヘカラス是至テミヤスク知ヤスキの症ナリ又
尺沢ノ内動脈ニカゝル処ハ前編ニモ述ルコトク經脈ノ行トコロナリ
何ホト筋フトク青クミユルトモ刺スヘカラス是ヲ刺スト出血過多ニ
シテ悪シ、深く怯ヘシ

一 玉衡ニ云処放痧ノ穴十ヶ処アリ余常ニ刺ス処ハ簡ナリ又十指頭
ヲ刺ス「左右ノ手足スヘテ二十ヶ処ナリ余ハ皆是ヲ刺ス」ヲマタス
手ノ大指次指中指ノ三指頭左右共ニ六穴ヲ刺シテ皆甦レリソレニテ
効ナクハ無名指小指マテモ刺シ足ヲモ刺スヘケレ任手足十指ノ血脉
ミナ一源ヨリ起ルモノユヘ十指ミナ刺□「二」³⁷⁵及スメ愈ル也是
予カ多年試タル「也今病案一二左ニ挙ク

【読み下し】

ありても、肌肉しわみ、其筋ほそく血もすくなきものは、血をとる

こと用捨³⁷⁶すべし。刮法、藥劑にて治すべし。又、筋何ほどふと

³⁷⁴ □「潤」。 「潤」と読める。

³⁷⁵ □「二」。 □は虫損。「二」と読める。

³⁷⁶ 用捨。容赦に同じ。

く血みちても、青色にあらざるものは凡^千て痧にあらず、決して刺
すべからず。其の肌肉、痿してしわあり、筋入りなきものは、血氣
の衰えより起る故、滋潤補血の手あてよし。決して刺すべからず。
是れ至つてみやすく、知りやすきの症なり。又尺澤の内、動脈にか
かる處は、前編にも述ぶることく、經脈の行くところなり。何ほど
筋ふとく青くみゆるとも、刺すべからず。是れを刺すと出血過多に
して悪^あしし。深く怯^{おび}るべし。

一 『玉衡』に云う處の放痧の穴十ヶ處あり。余、常に刺す處は、
簡なり。又十指頭を刺すこと、左右の手足すべて二十ヶ處なり。余
は皆、是を刺すことをまたず。手の大指、次指、中指の三指頭左右
共に六穴を刺して、皆甦れり。それにて、効^きなくば、無名指、小指
までも刺し、足をも刺すべけれども手足十指の血脉、みな一源より
起こるものゆえ、十指みな刺すに及ばずして愈ゆる也。是れ予が多
年試みたること也。今、病案一二左に擧ぐ。

【口語訳】

肌肉に皺がより、筋（静脈）が細く血も少ないものは、血を取るこ
とを控えなくてはいけない。刮法や藥劑を用いて治療するべきであ
る。また筋（静脈）がいかに太く血が充滿していても、青色でない
ものは、すべて「痧」ではない。決して刺（刺絡）してはならない。

筋肉が、萎なえて皺なが有り、筋（静脈）が見えていないものは、血気の衰えにより起こっているものであるから、滋潤・補血の治療が良い。決して刺（刺絡）してはいけない。これは、大変、見やすく、分かりやすい診断目標となる徴候である。

又尺沢の内側、動脈にかかるところ³⁷⁷は、「前編」でも述べたように、経脈（動脈）の走行しているところである。いくら筋（血管）が大きく、青く見えると言っても刺してはいけない。これを刺すと、出血過多になり良くない。深く恐れなければならない。

一 『痧脹』玉衡（書）に挙げられる放痧する部位として、十ヶ所の穴がある。私が、常々刺す部位は、簡単である。「十指の指先を刺す」ということは、左右の手足すべてあわせると二十ヶ所となる。しかし私は、これらすべて刺すまでもない。手の親指、人差し指、中指の三本の指先、左右併せて六穴を刺せば、みな回復する。それで効果が無ければ、薬指、小指も刺し、足（の指先）も刺す。しかし手足の十本の指の血脈は、みな一源から起こっているので、十指みな刺すには及ばずとも治癒する。これは、私が、長年治験したことである。次に、治験例を少しばかり挙げる。

〔本紙第十八丁オモテ〕

³⁷⁷「動脈にかかるところ」。「動脈に覆いかぶさっているところ」。「あるいは「動脈に関係するところ」の意か。待考。

【原文】

一老婆年六十許孫兒ヲ負イ隣家ヨリ帰ル家ニ至テ忽然トメ倒ル是ヲ視ルニ昏メハ人事ヲ省セス家人大ニ驚キ呼之トモ答ル「ナシ水ヲ以面ニ嚙シ灸刺スレ任甦セス医視之ヲ卒中風トシ葉ヲ以ロニソ、ケ任葉汁咽ヲ下ラス如此」已ニ三日ニ及フ乃余ヲ請フ余至ル時已ニ昏黒挑レ灯ヲテ是ヲミルニ肥満ノ婆也其面ヲミルニ眠ルニ似タリ其手ヲ視ルニ肌肉充実ス臂灣ヲミルニ略見^ホニ青筋一脰之其脉沉遲手足不^レ厥呼吸安静ニメ痰涎ナシ余曰是痧病也先医答曰痧トハ何ノ病ソ答曰痧ハ周ノ比ヨリアル病今清朝ニテ専ラ有ル病ト云フ中風ハ必口眼歪斜シ或手足偏枯メ形アルヘシ今此病人左右共ニ勁急ノ姿ナシ又卒中風ハ必痰声アリ脉多ハ浮大也此病人痰声ナク又脉モ沉遲ナリ且兩ノ尺沢ヲミルニ青筋アリ是中風ニ非ス痧病ナル「斐セリ今口禁メ葉ヲ飲ム」アタハス不^レ若以^レ針^ヲ救^ンニハトテ紙條ヲ作り左右各三指ヲ縛リ披針ヲ以テ其指頭ヲ刺ス先右ノ大指ヲ刺シ次ニ次指中指ヲ

【読み下し】

一老婆年六十許り、孫兒を負い隣家より歸る。家に至りて忽然として倒る。是れを視るに、昏³⁷⁸しては人事を省せず。家人大いに驚

³⁷⁸昏。氣を失う。

しき之を呼べども答うることなし。水を以つて面に嘔^{（えむ）} 379し、灸刺すれども、甦せず。醫之を視て卒中風³⁸⁰とし、薬を以つて口にそそ

げども、薬汁、咽を下らず。如^{（かく）}此のこと、已に三日に及ぶ。乃

ち、余を請う。余、至る時、已に昏黒なり、燈を挑³⁸¹して是れをみるに、肥滿の婆也。其の面をみるに、眠るに似たり。其手を視る

に、肌肉充實す、臂灣をみるに、略青筋見らわる。之を脰るに、其

脉は沉遲、手足厥せず、呼吸は安靜にして痰涎なし。余曰く、「是れ痧病也」と。先醫答えて曰く、「痧とは何の病ぞ」と。答えて曰く、

「痧は周の比^{（ひ）}よりある病、今清朝にて專^{（もつぱ）}ら有る病と云う。中風は必ず口眼歪斜し、或いは手足偏枯³⁸²して形あるべし。今、此の病

379 嘔。口に含んだ液体を、吹き出す。

380 卒中風。『漢方用語大辞典』「卒中」に、「中風のこと。猝中、卒中風ともいう。風に中つたために突然たおれて昏睡状態になるので、この名がある。」、また「突然仮死状態となること。」とも。

381 「挑灯」。「灯心をかき立てて明るくする」、「ちようちんを高く掲げる」。

382 偏枯。半身不随。

人左右共に勁急の姿なし。又、卒中風は必ず痰聲あり。脉、多くは浮大也。此の病人、痰聲なく、又脉も沉遲なり。且つ兩の尺澤をみるに、青筋あり。是れ中風に非らず、痧病なること斐せり。今口禁^{（くわん）}じて薬を飲むことあたわず針を以て救わんには若^{（わか）}ず。」とて、紙條^{（しじょう）}を作り左右各三指を縛り、披針を以て其指頭を刺す。先ず右の大指を刺し、次に次指中指を

【口語訳】

一 老女、年齢、約六十歳。孫兒を背負つて隣家より帰つた。家に着いたら、突然倒れた。見ると、氣を失い意識がなかった。家族は大変驚き呼びかけたが返答はなかった。水を顔面に吹きかけ、灸刺したが、意識は回復しなかった。医者は、これを診察して「卒中風」と診断し、薬を口に注いだだが、薬液は、喉をくだらなかつた。このような状態が、すでに三日続いた。そこで、私が呼ばれた。私が着いたときは、すでに真つ暗であつた。（私が）灯で照らして見ると、肥滿の老女であつた。その顔面を見ると、眠っているように見えた。手を診ると、肌肉が充實し、肘関節屈曲面を見ると、青筋が現れていた。脰ると、その脈は沉遲で、手足は厥しておらず、呼吸は安靜で、痰涎はない。私は、「これは痧病である」と言つたところ、先医（最初に診察した医者）が、「痧とはどんな病ですか」と尋ねた。そこで答えて言つた。「痧」とは周の頃からある病で、今の清朝で、

よく有る病と言われている。中風は、必ず口や眼が歪斜したり、また手足が不自由な状態になるだろう。今、この病人は左右共に強くこわばった様子には見えない。また卒中中風ならば必ず痰声がある。脈も多くは浮大となる。しかしこの病人は、痰声は無いし、脈も沉遅である。さらに両手の尺沢をみると、青筋がある。これは中風ではなく、痧病であることは、あきらかである。今、患者は、口を閉じて薬を飲むことが出来ない。針を使って救うのがよい」といつて、

紙条(こまじょう)を作り、左右それぞれの三指を縛って、披針をもちいてその指先を刺した。まず右の親指を刺し、次に人差し指、中指を、

「本紙第十八丁ウラ」

【原文】

刺スニ血出ル(こまじょう)ナシ又左ノ大指次指ヲサシ其中指ニ至ルトソノ候病人驚キ目ヲ開キ手ヲ引テ痛ムト云其手ヲ引トヒトシク左右六指一拍子ニ血淋漓トメ出ツ余乃旁人ニ命「命」メシボラシム病人ハ数人左右ニ圍繞シテ灯火輝然タルヲミテ怪ミ何ノユヘト問フ其子姪ミナ云阿母妃(あは)「已」ニ三日衆人歡喜其声有ニ喧シ余悉ク人ヲ退ケ恬静ナラシメ先宝花散ヲ投ス能ス、リノム依テ散瘀湯与之氣力自壯飲食日進調理スル(こまじょう)數日而全復レ故

一 藩中土年二十許常々肩背強急ヲ苦ム平素痞積アリ時トメ発起ス年

中必二三発甚則至五六発其発スル時ハ心下支383「結」383急痛欲レ 犯人ヲメ心下ヲ按メ上沖ヲ禦ク1一二時ニメ昏メ不省人事其状如眠時々手ヲ揚ケ足ヲ擲ツノミ脈之ニ浮緩其肌ヲミルニ熨アリ人厲声ニ呼之ハ時トメ一諾スル1アリ更ニ目ヲ開1ナシ以2湯藥1ロニソ、クニ少許咽ヲ下ル1アリス、リノム1ナシ大便セス小便セントスル時ハ自ラ少シ席

【読み下し】

刺すに血出ることなし。又左の大指、次指をさし、其中指に至ると、

その儘(まじょう)に病人驚き目を開き手を引きて「痛む」と云う。其の手を

引くとひとしく左右六指一拍子に血淋漓(こまじょう)として出づ。余、乃ち

旁らの人に命じて、しばらくしむ。病人は数人左右に圍繞(こまじょう)して、

燈火輝然たるをみて、怪しみ何のゆえと問う。其の子、姪、みな云

383 心下支□。消字により判読不明。おそらく「心下支結」

384 淋漓。したたり落ちるさま。

385 圍繞。とりまく。

う。阿母^{あぼ} 386 死すこと、已に三日、衆人歡喜して其の聲有るに^{なぐさ} 喧し。

余、悉く人を退け、恬靜^{てんせい}ならしめ、先ず寶花散³⁸⁷を投ず。能くす

すりのむ。依りて、散瘀湯³⁸⁸、之を與う。氣力自ら壯んとなり、

飲食日進し、調理³⁸⁹すること數日、而して全く^{たゞ}故に復す。

386 阿母。母。おかあさん。

387 寶花散。『痧脹玉衡』、卷之下、備用要方、「寶花散、此治痧之仙劑。鬱金（一錢、凡方中用此味後有痧方、余當閱）細辛（三兩）降香（三錢）荊芥（四錢）。共爲細末、每服三匙、清茶稍冷服。」

388 散瘀湯。『防風散痧湯』のことか。『痧脹玉衡』、卷之下、備用要方、「防風散痧湯、痧有因於風者、此方主之。防風、陳皮、細辛、金銀花、荊芥、枳殼（等分）。頭面腫加薄荷、甘菊。腹脹加大腹皮、濃樸。手足腫加葳靈仙、牛膝、倍金銀花。內熱加連翹、知母。痰多加貝母、栝藎仁、寒熱加柴胡、獨活。吐不止加重便。小腹脹痛加青皮。血滯加茜草、丹參。咽喉腫加山豆根、射干。食積腹痛加山楂、葛子。心痛加玄胡索、蓬朮。赤白痢加檳榔。口渴加花粉。面黑血瘀也、加蘇木、紅花。放痧不出倍細辛、蘇木、桃仁、荊芥。穢觸加藿香、薄荷。水二鍾、煎七分、稍冷服。」

389 調理。治療する。また、養生する。

一藩中士、年は二十許り。常々、肩背強急を苦しむ。平素、痞積³⁹⁰あり、時として發起す。年の中に、必らず二三發、甚だしければ、則ち五六發に至る。其の發する時は、心下支結³⁹¹し急痛し死せん

390 痞積。病証名。指過食生冷油膩所致的痞塊。『醫林繩墨』痞塊、「有因好食生冷油膩而食所得者、名曰痞積。」證見胸中滿悶、膈塞不通等。『漢方用語大辭典』「積聚」に「病証名。腹内に結塊があつて、脹れや痛みをともなう病証。一般に、積塊が明らかにあつて、痛みや脹れが強く、固定して移動しないものを積といい、積塊が不明確で、一時的に脹れがきて痛みにきまつた場所がないものを聚という。性質は癥瘕や痰癖に似ている。病因としては、七情が鬱結して氣血が瘀滯したために、あるいは飲食内傷により痰が滯つたために、またあるいは寒熱が失調し、正氣が虚し、邪が結したためによる。」

391 「結」の字判読不明だが、文脈より「心下支結」と考えられる。「心下支結」は、「症状名。指膈上自覺有物梗阻而煩悶不舒。可見於外感和雜病的多種疾病。『傷寒論』、辨太陽病脈證并治」「傷寒六七日、發熱、微惡寒、支節煩疼、微嘔、心下支結、外證未去者、柴胡桂枝湯主之。」「傷寒論今釋」卷四、「其鞭滿甚微、按之不痛者、此爲支結。支結乃煩悶之意耳。…心下支結、即胸脅苦滿、心下痞鞭之輕者。」。「胃脘部に自覺的に物がつかえて煩悶してすつきりしないこと。これは少陽病の胸脇苦滿の軽症である。」

と欲す。人をして心下を按せしめ上衝³⁹²を禦³⁹³ぐこと一二時にして昏して人事不省す、其の状は眠るが如くにして、時々手を揚げ足を

擲³⁹⁴つのみ。脉³⁹⁵之くに浮緩。其の肌をみるに熱あり。人、厲聲³⁹⁶。

に之を呼ばば時として一諾することあり。更に目を開くことなし。湯薬を以つて口にそそぐに、少し許り咽を下ることあり。すすりのむことなし。大便せず。小便せんとする時は、自ら少し席

【口語訳】

刺したが、血が出ることはなかった。さらに左の親指、人差し指を刺し、左の中指を刺すまでになると、病人は驚いて目を開き、手を引いて痛いと言った。その手を引くと同時に左右の六本の指から一瞬にして血がポタポタと流れ出た。そこで私は、側にいた人に命じて、絞らせた。病人は数人のものが左右に取り囲み、灯火がまぶしく照らしているのを見て、不思議に思い、「どうしたのか」と問うた。周りにいた子、姪が、みな言った。「お母さんは、もう三日間も死んでいたのですよ。」と。集まった者達が歓喜し、声を上げたので

³⁹² 上衝。『漢方用語大辞典』に「気が上にのぼること。気が下腹

部より上部に衝きのぼり、不快を感じる状態。」、『傷寒論輯義』

³⁹³ 厲聲。声をはりあげる。

喧しい。そこで私は、全員を退けて、静粛にさせ、まず宝花散を投棄した。能く啜り飲んだ。それゆえ、散瘀湯を与えた。気が自ら盛んになり、飲食が日に日に進んだ。加療数日にして、まったく元のように回復した。

一番中の武士、年齢約二十歳。常々、肩背の強急（強いこわばり）に苦しむ。また平素より、「痞積」があり、時おり、発作を起こした。一年に必ず二三度、ひどいときには五六度に及んだ。発作時は、心下支結して、激痛で死んでしまうのかという様子であった。³⁹⁴人に心下（胃の辺り）を押さえさせ、下部から突き上げてくる気を防ぎながら、一二時（二〜四時間）過³⁹⁵すと朦朧として意識不明となつた。その状態は、眠っているようで、時々手を揚げ足を投げ打つのみであった。脈を診ると浮緩。肌には、熱があるように見えた。人が声を張り上げて呼ばば、時として少し答えることはあるが、それ以上目をあけることはない。湯薬を口に注げば、少しばかり咽を下ることはあるが、啜って飲むようなことはしない。大便しない。小便をしようとする時は、自ら少し席を、

「本紙第十九丁オモテ」

【原文】

³⁹⁴ 死んでしまうのか。原文は、「欲³⁹⁶死（死せんと欲す）」。³⁹⁷ 復数の意味が考えられる。「死にたいと思つた」、「死にそうであつた」等。

ヲ退マ子メ遺失ス如此「二三日若クハ五六日ニメ醒ム醒レハ只心下痞硬飲食不進旬日ニメ愈其発スル」皆如此茲夏迎余視之シム得レ病已ニ三年衆医無「能ク治」之余其手腕ノ間青筋アルヲミル是痧病ナル「ヲ知り乃作紙條左右ノ大指人摺」指ヲ縛シ披針ヲ以刺之左手ノ三指ヲ刺シ右ノ中指ヲ刺スト手ヲビクト引キ目ヲヒラキ驚キ云「前ノ老婆同シ余乃針ヲ刺スト云ナカラ人摺」指大指共ニサシ血ヲシボリ防風沙金湯ヲ飲マシム又牽牛大黃丸ヲ与フ一二日ニメ痞積安クメ病再発セズ三年ノ病一治メイユ

一士人ノ室年四十余心痛ヲ患フ兩乳ノ間背ニ微メ痛ミ忍ヘカラス上ハ咽喉ニ通シ下ハ鳩尾ニ至ル旬日ノ後痛少シ輕ニ似タリ依テ團ニ登ント欲メ歩スレハ痛忽加ツテ地ニ仆ルニ至ル以レ茲又歩スル「アタハズ如此」二月余衆医束手乃迎余視之シム余視其手腕青筋多シ其心胸ノ間青筋甚多シ余曰心痛ハ朝ニ発メタニ犯シタニ発スレ

【読み下し】

を退くまねして遺失す。如（かくのごとく）此きこと二三日若しくは五六日にして醒む。醒むれば只だ心下痞硬395し、飲食進まずして、旬日396にし

395 心下痞硬。「症状名。一名心下痞鞭。見『傷寒論』辨太陽病脈證并治、指胃脘部有堵塞滿悶不適感而按之硬滿者。多因胃氣虛弱、邪氣逆結所致。治當扶胃攻邪。因協熱利不止、心下痞鞭、表裏不解者、桂枝人參湯、汗出胃虛、客氣上逆、心下痞輕、乾嘔食臭、脅下有水氣、腹中雷鳴下利者、生姜瀉心湯、下後胃虛、客氣上逆、下利

て愈ゆ。其の發すること皆如此（かくのごとく）。茲（こゝ）の夏、余を迎え之を視しむ。

病を得て已に三年。衆醫、能く之を治す無し。余、其の手腕の間に青筋あるをみる。是れ痧病なることを知り、乃ち紙條（しじょう）を作り、左右の大指、人差し指を縛し、披針を以て之を刺す。左手の三指を刺し、右の中指を刺すと、手をびくと引き目をひらき驚き云うこと前の老婆と同じ。余、乃ち針を刺すぞと云いながら、人差し指、大指共に刺し血をしぼり、防風沙金湯397を飲ましむ。又牽牛大黃丸398を與う。

日數十行、穀不化、腹中雷鳴、心下痞鞭、乾嘔心煩者、甘草瀉心湯、心下痞硬、噎氣不除者、旋覆代赭湯、痞不解、燥渴、小便不利者、五苓散、心中痞硬、吐嘔下利者、大柴胡湯（見『傷寒補天石』、結胸痞氣第五）。『漢方用語大辭典』には、「痞」は「胃脘部が滿悶しこれを按じると柔軟で痛みのない症状をさす。」心下痞硬は「胃脘部に痞滿硬痛の感じがあるものをさす。」

396 旬日。十日間。

397 防風沙金湯。「防風勝金湯」の誤りか。『痧脹玉衡』、卷之下、備用要方、「防風勝金湯 痧有因於食積血滯者、此方主之。防風、烏藥、玄胡索、桔梗、枳殼（各七分）、藟子（二錢）、檳榔、金銀花、山楂、連翹、赤芍（各一錢）、水二鍾、煎七分、稍冷服。」

一 二日にして痞積^(やす)安くして病、再發せず。三年の病、一治にしていゆ。

一 士人の室、年四十餘り。心痛を患う。兩乳の間、背に徹して痛み忍^(しの)べからず。上は咽喉に通じ下は鳩尾³⁹⁹に至る。旬日の後、痛み少し輕きに似たり。依りて圍^(かむ)に登らんと欲して歩すれば、痛み忽ち加つて地に仆^(お)れるに至る。茲^(これ)を以つて、又、歩することあたわず^(かた)如此^(ごと)きこと二月餘り、衆醫束手^(あきら)400して、乃ち余を迎え

之を視しむ。余其の手腕を視るに、青筋多し、其の心胸の間、青筋³⁹⁸牽牛大黃丸。処方不明。「牽牛子」は、「アサガオ才^{Radix} ni Choisy の成熟種子を乾燥したもの。効能は、瀉下作用」。「大黃」は、「タデ科 *Rheum palmatum* Linne などの種間雜種の通例、根茎をいう。瀉下薬」。いずれも瀉下剤で有ることから、強い瀉下作用を持つ処方だったと考えられる。

³⁹⁹ 鳩尾。『漢方用語大辞典』に「みぞおち。心窩部。経絡でいう任脈の鳩尾穴のところ」。「鳩尾穴」は上腹部、前正中線上、胸骨体下端の下方一寸

400 束手。なすすべを知らない。施しようがない。

甚だ多し。余曰く、心痛は朝に發して夕に死し、夕に發すれ

【口語訳】

退くそぶりをして漏らす。このような状態が続き、二三日或いは五六日して醒める。醒めれば、胃の辺りに膨満し硬いものが詰まっているような感じが残り、飲食が進まない。そして一〇日ほどすると治る。発作はいつもこの様だった。今夏、私に往診を依頼した。病になってからすでに三年が経過していた。多くの医者は、この病をうまく治すことが出来なかった。私は、患者の手腕の間に青筋があるのを見つけた。この病が「痧病」であることが判つたので、紙条^(しじょう)を作つて、左右の親指、人差し指を縛り、披針を用いて刺した。左手の三本の指を刺し、右の中指を刺すと、手をびくと引いて目をひらき、驚いてものを言つたのは、前述の老女と同様であつた。私は、「針を刺すぞ」と言いながら、続いて人差し指、親指の両方を刺し血をしぼり、防風沙金湯を飲ませた。さらに牽牛大黃丸を与えた。一二日すると痞積は落ち着き、病は再発しなかつた。三年もの病が、一回の治療で治つてしまった。

一 武士の妻女、年齢、四十歳過ぎ。心痛を患う。兩乳の間から、背に貫くような痛みがあり耐えがたい。上は咽喉より下は鳩尾(みぞおち)まで。一〇日ほどすると、痛みは少し軽くなった様に思えた。そこで廁に行こうとして歩いたところ、すぐさま痛み出し、その場に倒れてしまった。この後、再び歩くことが出来なくなり、そのよ

うな状態で二ヶ月余りが経過した。多くの医者が為す術もなく、私
が呼ばれて診察をすることとなった。私が患者の手腕を診察したと
ころ青筋が多く有り、さらに心胸の間には、青筋が大変多く有った。
私は告げた。「心痛という病は、朝に発症すれば夕方には死亡する。
夕方に発症すれば、

〔本紙第十九丁ウラ〕

【原文】

ハ朝ニ死スト云リ今二月ヲ經テ自若タルモノハ心痛ニアラス痧病也
主人曰痧病トハ何ノ病⁴⁰¹。余曰血氣内ニ滞リ經脉運行ヲ塞キ死血
トナル徵ハ絡脉ミナ青クナル也刺メ血ヲ出スニ皆黒血ナリ主人曰此
婦人壯年ヨリ青筋アリ余曰シカラハ壯年ヨリ痧毒アリテ久ヲ歷テ大
ニ發スルナリ是痧ノ心胸ヲ攻ル也今血ヲ洩セスハ其變ハカルヘカ
ラス主人云絡筋青色ニメ心痛スルユヘンハイカ、余曰周身經絡ノ血
ハミナ心肺ヨリ出テ身ヲメクリ又心肺ニ販ス經絡ノ血瘀トナリテ流
利セサレハ其源頭ノ心肺ノ血自阻滯メ痛ヲナスナリ雲林カ云原氣逆
スルト云モノ也手灣ノ間ニテ壅ル血ヲ出シ疎ストキハ其源頭モ自メ
クリテ逆氣下リ痛去ルナリ家人疑テ決セスメ云願ハ先藥ヲ賜イ刺血
ハ數日ヲ寛セン「ヲ請フ余止」ヲ得ス散瘀紅苓「花」散ヲ与フ二三
日ニメ病婦苦ミニタヘスメ悪血ヲ去ン「ヲ請余乃右ノ尺沢ノ上ヲ木

401 病^口は、**痧**。口は「耳」かもしれない。

綿ノ紐デク、リ其青筋ヲサス血奔出スル「一合ハカリ其痛血ニ隨テ
退キ忽尔ニ痛ヲ失ス又独活紅苓「花」散ヲ投シ旬

【読み下し】

ば、朝に死すと云えり。今二月を經て自若⁴⁰²たるものは心痛にあ
らず、痧病也。主人曰く、「痧病とは何の病なるや⁴⁰³」と。余曰く、
「血氣内に滞り、經脉運行を塞ぎ死血となる。徵⁴⁰⁴は絡脉みな青く
なる也。刺して血を出すに皆黒血なり」と。主人曰く、「此の婦人壯
年より青筋あり」と。余曰く、「しからば壯年より痧毒ありて、久⁴⁰⁵

きを歷⁴⁰⁶て大いに發するなり。是れ痧の心胸を攻むる也。今、血を瀉
せずんば、其の變、はかるべからず」と。主人云う、「絡筋青色にし
て、心痛するゆえんはいかが」と。余曰く、「周身、經絡の血はみな
心肺より出でて身をめぐり、又心肺に歸す。經絡の血瘀となりて、
流れ利せざれば、其の源頭の心肺の血、自ら阻滯して痛みをなすな

402 自若。ふだんと変わらず、動ずるところがないさま。

403 【原文】の口を「耳」とし、疑問の助字「や」と読んだ。

り。雲林が云う「原氣逆する」⁴⁰⁴と云うもの也。手灣の間にて壅^(ふせ)

がる血を出だし、疎すときは其の源頭も自らめぐりて逆氣下り、痛み去るなり」と。家人疑いて決せずして云うに、「願くば先ず薬を賜い、刺血は數日を寛せんことを請う」と。余止むことを得ず、散痧紅花散⁴⁰⁵を與うに三日にして、病婦苦しみにたえずして惡血を去らんことを請う。余乃ち右の尺澤の上を木綿の紐でくり其青筋をさす。血奔出すること一合ばかり、其の痛み血に隨いて退き忽爾^(ひとた)⁴⁰⁶に痛みを失す。又獨活紅花散⁴⁰⁷を投じ句

⁴⁰⁴ 雲林は龔廷賢、『万病回春』などを著す。この文言は、前出『万病回春』青筋のこと。

⁴⁰⁵ 散痧紅花散。『外科正宗』、卷之三、下部癰毒門、魚口便毒論第三十二、「紅花散痧湯、紅花散痧湯蘇木、翹貝薑蠶乳決明、歸尾大黃角針等、牽牛山甲酒煎行。治入房忍精強固不泄、以致痧精濁血凝結兩脇或小腹之傍結成腫痛、小水澀滯者并服之。當歸尾、皂角針、紅花、蘇木、薑蠶、連翹、石決明、穿山甲、乳香、貝母(各一錢)、大黃(三錢)、牽牛(二錢)、水、酒各一碗、煎八分、空心服、行五、六次、方吃稀粥補之。」

⁴⁰⁶ 忽爾。急なさま。突然。

⁴⁰⁷ 獨活紅花散。『痧脹玉衡』、卷之下、備用要方、「獨活紅花湯痧有因於血鬱者、此方主之。獨活、紅花、桃仁(去皮尖)、薄黃、玄

【口語訳】

朝には、死亡するという様な病である。今日まで二ヶ月を經過して何の変化も見られないというのは、心痛ではない。これは痧病である。」と。主人が、「痧病とはどの様な病のですか。」と尋ねた。私は、「血気が内に滞つて、経脈の運行を塞いで死血となる。その証拠は、絡脈がみな青くなる。これを刺して血を出すと、すべて黒血である。」と答えた。そうすると主人は、「この婦人は壮年の頃より青筋が有った。」と言う。そこで私は、「それならば壮年の頃より青筋が有ったのでしょうか。それが長時間を経て、ひどく発症したのでしよう。これは、痧毒が心胸を侵しているのです。今、血を洩さない」と、この病変は、どうなるか予想が付かない。」と言った。また主人は、「絡筋が青色だと心痛するというのは、どういう理由ですか。」と尋ねた。私は、「全身において、経絡(動静脈)の血はすべて心肺から出て、身体を循環し、再び心肺に戻る。もし経絡の血が(濃のように)痧となって、流れが順調でなくなれば、その最初の源である心肺の血は、自ら阻滞して痛みを起こすのである。これは、雲林(龔廷賢『万病回春』)が述べる「原気が逆する」というものである。肘関節屈曲面のところ、塞がる血を出して、通じさせればその源(心肺)も、自ら巡つて逆気が下り、痛みは去るのである。」と説明

胡索、白蔞藜(炒、爲末)、烏藥(各一錢)、香附(三分)、枳殼(七分)、水二鍾、煎七分、微温服。」

した。しかし家族は疑って決心できずに、「出来れば、まず薬を頂戴し、刺血（刺絡）は数日待っていただけませんか。」と言う。私は、仕方がないので、「散瘀紅花散」を与えた。三日すると、患者は、苦しさに耐えきれずに悪血を取って欲しいと望んだ。そこで私は、右の尺沢の上を木綿の紐でくくって、その青筋を刺した。血が、一合ほど奔出すると、患者の痛みは血の出るに従って減っていき突然痛みが消えた。さらに「独活紅花散」を投薬し、一〇日ほどすると、

〔本紙第二十丁オモテ〕

【原文】

日ニメ飲食復レ故元氣益壯ナリ青筋日ニ淡色ニナリ痛再不発其効大ニ人ノ耳目ヲ驚カス誠ニ妙トスヘシ

一士人年五十許頭痛ヲ患右ノ曲鬢ノ邊ヨリ耳後卒谷ノ邊ニ至リ少ク浮腫シ色不レ変日夜痛苦不レ可レ忍為レニ之精神疲レ飲食日減シ不能レ立レ床如此一月余衆医束手其人少知ニ医理一嘗テ余ガ痧論ヲ信ス自其尺沢上ラミテ青筋ノ多ヲ疑イ刺メ血ヲ出シ一ヲ思フ医俗親戚ミナラモヘラク年高ノモノ血ヲ出スヘカラス固ク禁メ不レ許ル後痛益甚ク病人自云薬効ナシ是ヨリ医ヲ不請トテ止レ薬謝レ医スル一ニ日乃徴レ余曰我止レ「薬」ニ日医ノ我ヲ制スルナシ我今刺ニ「青筋」ヲ血ヲ出シ一ヲ欲ス先生願ハ為我ニコレヲ刺セ余乃其尺沢ノ青色ナルモノヲミテ刺之血奔出スル一合余其夜痛大ニ減シ快寢「寢」ス翌早視之痛処突起毒一処ニ集ル而メ皮色ハ変スル一ナシ二三日ニメ内似有膿又余

ヲメ其腫処ヲ刺サシム膿血大ニ出ツ忍冬解毒湯ヲ与へ数日而膿止ム調理スル一ヶ月許ニメ全癒是瘀内ニ結「結」メ毒ヲ托

【読み下し】

日にして飲食、故に復す。元氣益壯なり。青筋、日に淡色になり、痛み再び發せず、其の效、大いに人の耳目を驚かす。誠に妙とすべし。

一士人、年は五十許り。頭痛を患い、右の曲鬢⁴⁰⁸の邊りより耳後の卒谷⁴⁰⁹の邊りに至り少しく浮腫し色變らず。日夜痛み苦しみに忍ぶ可からざる。之れが爲に精神疲れ飲食日に減じ床に立つこと能

わず。如此きこと一月餘り、衆醫束手す。其の人少醫の理を知る。嘗て余が痧論を信ず。自ら其の尺澤上をみて青筋の多しなるを疑い刺して血を出ださんことを思う。醫俗親戚みな思えらく、年高のもの血を出だすべからず、固く禁じて許さず。尔後痛み益甚

⁴⁰⁸ 曲鬢。足の少陽胆經の經穴。頭部、もみあげ後縁の垂線と耳尖の水平線の交点。下顎神經や淺側頭動靜脈が關係する。

⁴⁰⁹ 卒谷。足の少陽胆經の經穴。頭部、耳尖の直上、髮際の上方面五分。側頭筋、下顎神經や淺側頭動靜脈が關係する。

しく、病人自ら云う、「薬效なし、是れより醫を請わず」とて、薬を

止め醫を謝すること二日、乃ち余を（おと）徴めて曰く、「我、薬を止むこと二日、醫の我を制するなし。我今青筋を刺し血を出ださんことを欲す。先生、願わくば私の爲めに、これを刺せ」と。余、乃ち其の尺澤の青色なるものをみて之を刺すに、血、奔出すること合餘り、其夜痛み大いに減じ快寝す。翌早、之れを視るに、痛む處は突起し毒一處に集まる。而して皮色は變ずることなし。二三日にして内に膿有るが（と）似し。又余をして其の腫るる處を刺さしむ。膿血大いに

出づ。忍冬解毒湯41を與え數日に而て膿止む。調理すること月許りにして全癒す。是れ瘰、内に結して毒を托

【口語訳】

日にして飲食するのも元に回復した。元氣は益々盛んになった。青筋も、日に日に淡色となり、痛みは再発しなかった。その効果は、大いに人の耳目を驚かすところとなった。誠に素晴らしいと言うべ

41。忍冬解毒湯 『痧脹玉衡』、卷之下、備用要方、「忍冬解毒湯、治痧後餘毒發者、以此消之。金銀花、土貝母、甘菊、荊芥穗、牛蒡子、紅花、甘草、木通、連翹、紫花地丁（等分）、胡桃肉（二枝）、水煎温服。」

きであらう。

一武士、年齢五十歳前後。頭痛を患う。その右の曲鬢（耳上辺の少し前方）の辺りから耳後の卒谷（耳の一・五寸上）の辺りにかけて少し浮腫しているが色に変化は見られない。日夜痛み苦しんで耐えることが出来ないほどである。このため精神は疲れ、飲食も日に日に減って床から立つことが出来ない。このような状態が一月余り続いた。多くの医者は為す術を知らなかった。ところがこの人は、多少医学の理論を知っていた。かつて私の「痧論」を（知り）信じていた。患者自身が、自分の尺沢上に青筋が多いことを疑問を持ち、刺して血を出そうと思つた。医学の知識の有る者、そうではない者、親戚、すべて、「高齢の者が血を出してはいけない」と思い、固く禁止許さなかった。そうしている内に痛みは益々激しくなつた。病人は、自ら「薬は効かない。これからは医者診察は受けない」と言い、薬を止め、医者を断つて二日が経つた。そして私が呼ばれこう言われた。「私は、薬を止めて二日になります。医者が私を制することはない。私は、青筋を刺して血を出すことを望んでいます。先生、お願いです、私のために、刺して治療してください。」そこで私は、患者の尺沢に青色のものが有るのを、確認しこれを刺した。すると血が、一合余り奔出した。その夜患者は、痛みが大いに減じ、快く寝ることが出来た。翌朝早く、見ると、痛むところは、突起して毒が一所所に集まっていた。しかし皮膚の色に変化は見られない。二三日すると内側に膿の有る様になった。それでまた、私にその腫れるところを刺させた。膿血が大量に出た。忍冬解毒湯を与えて、数

日すると膿は止まった。一月ほどの加療で全快した。これは痧が体内に凝結して毒を排出しなかったので、

【原文】

「本紙第二十丁ウラ」

出セス手ヲ刺メ痧ヲ去リ内壅ヒラクトキハ病処ノ毒自ラウキ出テ忽ウミトナレリ譬ハ痘毒甚メ欲レ出不能レ出モノ内踈メ痘即出ルニヒトシ知ラスンハ有ヘカラス

一 医生ノ家深レ疫「五六人後其医亦感之年四十許惡寒頭痛熱煩甚シ数日ニメ昏慣人ヲ知ラス呼之トモ不答与ルニ藥不レ曠如何トモスル「アタハス余至テ其病者ヲミルニ被ヲ以頭ヲ蓋イテ踈臥ス其頭ヲ按スニ腫脹メアリ痧熱上冲スルニ似タリ且其手ヲ引延シ視ニ之ヲ尺沢ノ間青筋ヲ顯ス余ヲモヘラク是疫ニメ兼ル痧モノナリ乃針ヲ出メ前項ノ邊ヲ刺ス「二三宥黒血流レ出ツ其時病人自ラ手ヲ伸テ頭ヲ撫ントス旁人告之曰先生来リ針ヲ立ララヽソト云ハ病人ハシメテ正氣ニナリタルヤウニテ是ハイカナル「ニテカク快キ「ヲナスゾト云其血出ル「白昏十枚余ヲヒタ□「ス□「乃」大柴胡湯ヲ投ス此ヨリ熱大ニ解シ旬日ニメ快復ス刺絡編ニ吉雄氏増寒壯熱煩燥スルニ刺レ尺沢一熱解

【読み下し】

出せず、手を刺して痧を去り内壅ひらくときは、病處の毒は自らうき

出て、^(たぢま)忽ち、うみとなれり。譬^(たと)えば痘毒甚だしくして出でんと欲すれども出づること能わざるものは内に踈して痘即ち出づるにひとし。知らずんば有るべからず。

一 醫生の家、疫深きこと五六人、後其醫も亦た之に感ず。年は四十許り。惡寒、頭痛、熱煩、甚だし。數日にして昏慣^(こんかん)、人を知らず、之を呼べども答えず。藥を與うるに、曠^(いかに)せず、如何ともするこ

とあたわず。余至りて其の病者を見るに、被^(おび)、^(たぢま)を以て頭を蓋い

て、踈臥^(けんび)す。其の頭を按ずるに、腫脹してあり。痧熱^(しやねつ)上衝

するに似たり。且つ其の手を引き延し、之を視るに尺澤の間青筋を

411 昏慣。意識が混乱して、物事がはつきり掴めない症状のこと。

412 被。「頭に載せること。また、そのもの」。また「きぬかずきのこと。」とある。

413 踈臥。手足を屈し、体を丸めて臥すこと。

414 痧熱。「漢方用語大辞典」に、「滞留した痧血が、鬱して熱と化す病理現象をさす。」、また「内に鬱積した熱をさす。熱と痰湿が内に結して、久しく鬱滞すると、黄疸病を生ずる。」

顯わす。余思えらく、是れ疫にして痧を兼（か）るものなり。乃ち針を

出して、前項の邊りを刺すこと二三有415、黒血流れ出づ。其の時
に病人自ら手を伸べて頭を撫でんとす。旁らの人、之に告げて曰く、
「先生來たり、針を立てらるるぞ」と云えば、病人はじめて正氣にな
りたるようにて、「是れはいかなることにて、かく快きことをなすぞ」
と云う。其の血出づること白昏416十枚餘をひたす。乃ち大柴胡湯
417を投ず。此より熱大いに解し、旬日にして快復す。『刺絡編』に
吉雄氏418「増寒し壯熱し煩燥419するに尺澤を刺し熱を解

415 有。「瘡」(治療の針跡)の誤りか。

416 白昏。白紙に同じ。

417 大柴胡湯。『傷寒論』『金匱要略』などに記載され常用される
処方。例えば、『傷寒論』卷第三、辨太陽病脈証并治中第六「太陽
病、過経十余日、反二三下之、後四五日、柴胡証仍在者、先与小柴
胡。嘔不止、心下急、鬱鬱微煩者、為未解也、与大柴胡湯、下之則
愈。方五十三。柴胡(半斤)黄芩(三両)芍薬(三両)半夏(半升
洗)生薑(五両、切)枳実(四枚、炙)大棗(十二枚、擘)右七味
以水一斗二升、煮取六升、去滓、再煎。温服一升、日三服。一方加
大黃二両。若不加、恐不為大柴胡湯。

418 吉雄氏。吉雄耕牛よしおこうごうごう。宗田一、『凶説日本医療文化史』、思文閣
出版、一九八九年、一三七―一四八頁。吉雄耕牛(幸作、一七二四
―一八〇〇年)「日本の江戸時代中期の紅毛(オランダ)通詞、蘭

【口語訳】

手を刺して痧を取り除くと、塞がっていたところが通じ、患部の毒
は自然と浮き出てきて、すぐさま膿となった。例えば、痘毒が激し
く排出しようとするのに出来ず、体内に分散して420痘が体表に表
出するのと同様である。(このことを)知らない様ではいけない。
一医者419の家族。五六人が重い疫病に罹患した。その後医者自身もこ
の病に罹患した。年齢、四十歳前後。悪寒、頭痛、熱煩の症状が大
変激しい。数日後、意識が混濁し人事不省となる。呼びかけに応じ
ない。薬を与えても嘔下しない。どうすることも出来なかった。私
が、その患者を往診したところ、被（か）で頭を覆い、手足を屈（ま）げ体

方医。通詞としてオランダ商館に出入りし蘭館医について医学を学
び、通詞から医家へと転身し、吉雄流を開いた。江戸蘭学の首唱者
の一人、杉田玄白もその門に入り外科術を学んだ。また古賀十
二郎『西洋医術伝来史』、日新書院、一九四二年、一六九頁。「甲
比丹ヤン・カランスの江戸参禮は、次の通りである。：明和六己丑
年(一七六九年)江戸行通詞、大通詞吉雄幸左衛門、小通詞中山
唯八」とある。吉雄幸左衛門は吉雄耕牛のこと。

419 煩燥。『漢方用語大辞典』に「胸中の熱と不安を煩といひ、手
足をばたつかせることを躁という。」

420 体内に分散して。原文は「内疎メ」(内に疎して)とある。意
味については再考。

を丸めていた。患者の頭を押さえてみると、腫脹している。痧熱が上に突き上げてきているように見える。さらに、患者の手を引つ張って見ると、尺沢のところに、青筋が出ていた。私は、「これは、疫病であつて痧を併発している。」と考えた。そこで針を出して、^(うなせ)項

の前面辺りを二三回刺すと、黒血が流れ出した。この時、病人は自ら手を伸ばして頭を撫でようとした。旁らにいた人が、患者に告げた。「先生がおいでになり、針を施術してください」と言つたところ、病人は、はじめて正気になつたようで、「これは、どうしたことなのか、大変気持ち良いことをしていただいた」と言つた。白紙十枚余りをひたすほど血が出た。さらに大柴胡湯を投薬した。これにより熱は大いに下がり、一〇日で、快復した。

『刺絡編』に、吉雄氏に関する記載がある。「増寒（寒気）、壮熱（熱盛んで）、煩燥する時に、尺沢を刺し、解熱した。

〔本紙第二十一丁オモテ〕

【原文】

シ東武ノ役ヲ^{ツマ}峻ル^{ツマ}「峻ル」⁴²¹「ヲノス是モ青筋アルヲミテ刺スナ

⁴²¹「峻ル」は振られているカナより「峻ル」だと考えられる。拠つて改める。

ルヘシ今疫疾熱久ク不^レ解モノハ多ハ熱ノ血分ニ入テ解セサルモノアリ視之青筋ヲアラハスモノハ尺沢又ハ指頭ヲサスヘシ余屢試ルニ屢効アリ不可不知也

一婦二十二^ノ勞瘵ヲ患フ顔色憔悴羸瘦如柴衆医与滋補降火之劑更無寸効余診之更咳血吐痰ノ症ナシ只忽尔トシテ暴熱出ツ如熾煩悶心乾晝夜不能眠飲食不入口五七日ニシテ熱煩稍々ニサメ飲食少シ進ム其後又八九日ヲ歴テ大熱ヲ発スル「前ノ如シ又五六日ニメ解ス如^レ此」半年余身神大二疲衆医ヲモヘラク勞瘵無^レ治法余曰是勞瘵ニ非ス痧病也青筋アリトイヘ^レ任肌肉瘦弱血ヲ出スニ堪ヘス乃清涼至宝湯ヲ与フ日ニ服スル「三貼ニメ熱解シ數日ニメ氣復ス其後又八九日ヲ歴テ熱出ツ前ニ比スレハ十分ノ一二ナリ是モ二三日而熱サム夫ヨリ后熱出ル」ナシ益与前方一月余ニメ飲食進ミ精神全復^レ故^ニ

【読み下し】

し東武の役⁴²²を^{おほ}峻ること⁴²³をのす。是れも青筋あるをみて刺す

⁴²²「東武」は、『日本国語大辞典』に「武蔵野の異称。また江戸の異称。」「東武の役」は、前出「吉雄氏」（吉雄耕牛）の注、参照。明和六己丑年江戸に、甲比丹ヤン・カランズの江戸参禮に同行したことをさすと思われる。

⁴²³『刺絡編』本文二十四葉ウラ、明和己丑之春。吉雄子介ニテ紅夷^ニヲ聘ニス於武中^ニ。先^レ期^ニ五^ニ六^ニ日。暴^ニ憎^ニ寒^ニ壯^ニ熱^ニシ。身体疼痛シ煩躁^一モ且昏ス。連^ニ進^ニスルニ麻^ニ黄^ニ青^ニ龍^ニ輩^一ヲ。苟^モ無^ニ寸^ニ効^一。寒熱依然^トメ諸證轉加。衆医失ス^レ所^レ措ク。而^メ驪^ヲ駒臨^レム門^ニ。親^レ戚胥謀

なるべし。今、疫疾、熱久しく解せざるものは、多くは熱の血分に入りて解せざるものあり。之を視るに、青筋をあらわすものは、尺澤又は指頭を刺すべし。余屢試みるに、屢效あり。知らざるべからざる也。

一婦二十二。勞瘵を患う。顔色、憔悴、羸瘦⁴²⁴すること柴の如し。

衆醫、滋補降火の劑を與うるに、更に寸效も無し。余之を診るに更に咳血、吐痰の症もなし。只、忽尔として暴熱⁴²⁵出づ、燬けるが如く煩悶⁴²⁶。心乾し、晝夜眠ること能わず、飲食口に入らず。五七日にして熱煩、稍々にさめ飲食少し進む。其の後、又八九日を歴て

テ曰、期期トシテ不^レ可^レ愈。将^ニ以^レ人代^一ント之。公曰、斯役安シ不^ニラント努力^一セ。乃刺^ニ尺^一中^一ヲ一^レ疇。去^レ血ヲ合許。寒熱頓^ニ解^一、飲食知^レ味^ヲ、恙状良安シ、遂^ヲ復^レト事^ヲ云。余親^{シテ}聞^{ケリ}之^ヲ京^ノ客^舎ニ。

424 羸瘦。やせ衰えること。

425 暴熱。『漢方用語大辞典』に「突然發生する高熱で、すべて実熱証に属す。多くは急性伝染性の疾患に見られる。」

426 煩悶。前出、「絞腸痧」注を参照。

大熱を發すること前の如し。又五六日にして解す。此の如きこと半年餘。身神、大いに疲る。衆醫おもえらく勞瘵は治法無しと。余曰く、「是れ勞瘵に非ず、痧病也」と。青筋ありといえども、肌肉瘦弱、血を出すに堪えず。乃ち、清涼至寶湯⁴²⁷を與う。日に服すること三貼⁴²⁸にして熱は解し、數日にして氣も復す。其の後、又八九日を歴て熱出づ。前に比すれば十分の一二なり。是れも二三日に而て熱さむ。夫れより后、熱出ることなし。益⁴²⁹前方を與うること一月餘りにして飲食進み精神全く故に復す。

【口語訳】

そして東武の役目を終えたこと」を載せている。これも青筋が有るのを見て刺したのであろう。さて、疫疾において、熱が長期にわた

427 清涼至寶湯。「清涼至寶飲」と思われる。「湯」も「飲」も煎じ薬。『痧脹玉衡』、卷之下、備用要方、「清涼至寶飲、此清痧熱之劑。薄荷、地骨皮、丹皮、黑山梔、玄參、花粉(等分)、細辛(倍加)、水二鍾、煎七分、稍冷服。」

428 貼。『漢方用語大辞典』に「紙に包んだ薬品を数える単位。」

り下らない時は、多くは熱が血分に入ってしまった下がらなくなつてしまつている。このようなものを診た時、青筋が表れているものは、尺沢、または指頭を刺す（刺絡する）と良い。私は、度々試みているが、その度に効果があつた。（このような効果的な方法を）知らないといけない。

一 婦人。年齢二十二歳。勞瘵を患う。顔色はやつれ、柴木のように痩せ衰えている。多くの医者は、滋補降火の薬を与えたが、何の効果もなかつた。私が、この患者を診察したところ、咳血、吐痰等と言つた（勞瘵の）症状はなかつた。ただ、突然、高熱を發する。焼き尽くす様で、煩悶し心乾して、昼夜眠ることが出来ない。飲食も口に入らない。五から七日ほど経つと、熱煩がやや治まり飲食も少し進んだ。その後、さらに八、九日を経ると、前の様な大熱を發した。さらに五六日すると、解熱する。この様な状態が半年余り続いた。そのため心身は、大変疲労していた。多くの医者は、勞瘵なので、治療法はないと思つた。しかし私は、「これは勞瘵ではない。痧病である。」と告げた。ところで青筋が有るといつても、肌肉は痩せ細り、血を出す治療は無理である。そこで、清涼至宝湯を与えた。一日に三包を服薬すると、熱は下がり、数日で氣も回復した。その後、さらに八、九日を経て熱が出た。しかし前に比べると、十分の一か二ぐらいであつた。これも二、三日で熱は下がつた。それより後は、熱が出ることはなく、さらに先と同じ処方を与え続けたところ、一月余りすれば、飲食が進み、精神（せきりよこ）もまつたく元の様に回復

した。

【原文】 「本紙第二十一丁ウラ」

一 士人風癰「疹」ヲ患フ身体痒ク是ヲ爪スレハ膿「累」々トメ重リ出ツ身体痒「堪カタシ種々治療スレ任不レ愈已ニ三年ヲ歴余視之ニ青筋多シ乃其尺沢ヲ刺シ血ヲ出ス」合余其疹随レ血ティユ刺之「二三度ニメ再發セス夫ヨリ風癰「疹」血斑⁴²⁹ノ類甚「甚」者ヲミルニ多ハ青筋アリ刺之ニ手ニ隨ティユ又近者聞近江ニ称一瘡伯州ニ呼ニ豆「咬」ト或日腫ト唱ルモノアリト余ヲモフニ皆痧毒ノ發スルナルヘシ我藩中ノ民夏月新雨後ニ田圃ニ入糞壤ノ氣ニ感シテ手足小瘡ヲ生スル「有痒痛甚」甚「甚」シ俗ニタボロシト云士人忍冬蓮葉等ヲ煎シ洗レ之トキハイユ是皆痧ノ類「類」也青筋有モノ刺之メイユ妙トスヘシ

一小吏来リ告曰我一奇疾ヲ得タリ衆医何ノ病ナル「ヲ知ラス藥^レ之寸効ナシ願ハ先生診之ヨト余曰其症如何彼曰三年前五心煩熱ノ候アリ不甚「甚」メイユ去年モ亦夫ニ似テ甚「甚」カラザリシニ此春ヨリイヨ／＼ツヨク七月ノ初ヨリ掌心ノ熱益ツヨク今十月ノ初ニナリテ処ニ二熱イデ、

429 血斑。「血斑」の誤りと思われる。「血斑」は、「皮膚・粘膜の組織中に出血することによって起こる、紅色から黒紫色の斑点。」

【読み下し】

一士人、風疹を患う。身體痒く是れを爪すれば、累々として重なり出づ。身體痒ゆきこと堪えがたし、種々治療すれども愈えず。已

に三年を歴（ま）。余、之を視るに青筋多し。乃ち其の尺澤を刺し血を出だすこと合餘り。其の疹、血に隨いていゆ。之を刺すこと二三度に

して再發せず。夫れより風疹、血班（ま）の類（ま）い、甚だしき者をみるに、多くは青筋あり、之を刺すに手に隨いていゆ。又近者（ちか）聞く、近江に「一瘡」と稱し、伯州に「豆咬」⁴³⁰と呼び、或いは「日腫」⁴³¹

⁴³⁰ 「一瘡」、「豆咬」。『日本国語大辞典』に「一時瘡（いっときがさ）」は「狭心症などで、急激に肩が充血して強い痛みを起す症状。早撃肩（はやうちかた）」、「豆食（まめくい）」は「肩のこる病氣。打ち肩。早打ち肩。」とある。また「早打肩」は、「急に肩が充血して激しい痛みを感じ、動悸（どうき）が高まって卒倒・氣絶する病氣。はやかた。」。ここで「一瘡」、「豆咬」は狭心症の発作を言っているのかも知れない。また「豆咬」については、山脇東門『東門隨筆』に「因幡ニ七類ト云浦アリ。此浦ハ港ユヘ海入込テ山ニテ環抱シタル所ナリ。此地ニ俗ニ豆嚙ト稱スル病アリ。其

と唱うるものありと。余おもうに「痧毒」の發するなるべし。我藩中の民、夏月新雨⁴³²後に田圃に入りて、糞壤の氣に感じて手足に小瘡を生ずること有り。痒痛甚だし。俗に「たぼろし」⁴³³と云いて、士人、忍冬、蓮葉等を煎じ之れを洗うときはいゆ。是れ皆「痧」の類也。青筋有るもの之れを刺していゆ。妙とすべし。

初發スル忽寒熱頭疼如破、顔色如丹、大渴譫語狂躁悶亂ニ及デ一日ニシテ死スルアリ。土人案内ヲ知りタル故、其病ト見レバ早速大豆ヲ嚙セ試ルニ、大豆ノナマ臭キヲ覺ズ。サアレバ直ニ額ヲ何ニテナリトモ切りサケバ紫黒血出デ、二三日ニ痊ルヨシ。此ニヨリテ其土人額上ニ刀癩アル者甚多シトナリ。其近里ノ人ニ聞タリ。此レ沙溪毒ノ類ナリ。」と「豆嚙」と「痧毒」について述べる。

⁴³¹ 「日腫」。『日本国語大辞典』に、「皮膚の一部がうみをもつてはれあがるもの。」「日葡辞書〔1603〕04〕〔Nixunno mono (ニツシュノモノ) 〕〈訳〉小さな吹き出物、つまり、腫物で、非常に危険なもの」とある。

⁴³² 「新雨」は『日本国語大辞典』に「新緑の頃に降る雨」。

⁴³³ 「たぼろし」。『日本国語大辞典』に、「痲子（ほろし）」、「皮膚に小さくできるつぶつぶの発疹（はっしん）。じんましん。ほろせ。ちちほむ。ちちはくる。」「日葡辞書〔1603〕04〕〔Poroxi (ホロシ) 〕〈訳〉体に生ずるむずがゆい凝結物の一種」とある。

一小吏來たり、告げて曰く、「我(われ)一奇疾を得たり。衆醫、何の病な
 ことを知らず。之を藥(い)すれども、寸效なし。願わくば、先生之れ
 を診よ」と。余曰く、「其の症は、如何(いかん)」と。彼曰く、「三年の前、
 五心煩熱434の候あり。甚だしからずしていゆ。去年も亦た、夫れ
 に似て甚だしからざりに、此の春よりいよいよつよく、七月の初
 より、掌心の熱(てい)益(ますます)つよく、今十月の初になりて、處々に熱いで
 て

【口語訳】

一武士、風疹を患う。身体が痒く、これを爪で搔けば、発疹があ
 たり一面に重なつて出てくる。身体が痒くて耐えがたい。様々な治
 434 五心煩熱。『漢方用語大辞典』に、「五心」は「左右の手掌と
 足底、胸中を合わせて五心という。」、また「五心煩熱」は、「証
 名。両手足心、胸中に煩熱のあるものをいう。これは虚損勞瘵など
 の病によくみられる証候である。多くは陰虛火旺、あるいは病後に
 虚熱が清せられず火熱が内鬱することによりおこる。」

療をしたが治らない。患つてすでに三年を経過している。私が、診
 察したところ、青筋が多かった。それで、その尺沢を刺して、一合
 余りの血を出した。そうすると発疹は、血が出るに随ひ治つていっ
 た。この患者は、「二三度刺す(刺絡する)」と、再発しなくなった。
 それ以降、風疹や、血斑の類で症状がひどいものには、多くの者
 に青筋があるので、これを刺して治療する。治療すると、ただちに
 治癒する。

最近聞いたところでは、近江では「一瘡」と呼び、伯州では「豆
 咬」と呼び、或いは「日腫」と呼ぶ病があるらしい。私は、これ等
 は「痧毒」を發しておこるのだと思つ。

わが藩の民は、夏、新緑の頃、雨の後に、田んぼに入つて、糞壤
 (こやし)の氣に害されて手足に小瘡を生ずることが有る。痒いこと
 痛いこと甚だしい。俗に「たぼろし」と呼んでいる。土地の者は、
 忍冬、蓮葉等を煎じて、洗つて治す。これらは、すべて「痧」の類
 である。青筋が有るものは刺せば治る。優れた治療法とすべきだ。
 一小吏が来て告げた。「私は奇妙な病になつた。多くの医者は、何の
 病か判らない。薬を出すが一寸も効かない。先生、診察をお願いで
 きませんか。」という。私は、「その症状は、どのようなものなのか。」
 と尋ねた。彼は答えた。「三年前、五心煩熱(手のひら、足の裏、心
 臓の辺りのほてり)が、ありました。さほどひどい状態でもなく、
 治りました。去年もまたおきましたが、以前と同じような状態で、
 大してひどくはなかつたのです。しかし、この春よりだんだん強く
 なり、七月の初めより、手のひらの熱が益々強くなりました。今、

十月の初めになって、あちらこちらに熱が出て止まりません。

【本紙第二十二丁オモテ】

【原文】

ヤマス左ノ膝頭ニ一團ノ火ヲ點スルニ似テ熱ヲ覺フ頃刻ニメヤム夫ヨリ又右ノ脇肋ニテ熱スルト少許ニメヤム又右ノ肩ニテ熱シ又項筋ニテ熱シ又ハ頭中ニテ熱ス忽熱シ忽ヤム夫ヨリ次オニツヨクナリ今ニ至テ手足掌心常ニ熱アリテサメズ近日ニナリテ左ノ脇ニテ熱スル内ニ又右ノ肩ニテ熱シ未醒サルニ又頭中ニテモ熱出ルヤウニナリ暫時モ止ムナシ何レノ処ト云ナク熱発スル火ノ如ク其内ニハ強キ処モアリ又弱キ処モアリ昼夜止ムナシ心氣為之ニ疲レイカントモシカタシト云余曰汝力袂ヲカゲテ臂灣ヲ視ヨ必青筋アルヘシ彼乃視レ之テ果メ尺沢ヨリ至腕ヲ青筋數條アリ尺沢ノ処其色深膿色也彼曰是何ノ病ソ余曰是痧病ト云モノニテ其熱ハ痧熱ナリ薬ヲ用且刺メ血ヲ出サハ乃愈也彼曰余乞數医見之シムルニ更ニ知ルモノナシ或氣滯トシ或積熱トシ或疝トシ勞瘵トシ人能弁レ之スルナシ然ルニ先生イマダ一診ニモ及ス青筋アルヲ知リ是ヲ痧病ト名クル誠ニ明察トスヘシ然ルニ世医不_レ知_レ之ルモノハナンゾ余曰痧

【読み下し】

やまず。左の膝頭に一團の火を點ずるに似て熱を覺ゆ。頃刻（けいこく）

にしてやむ。夫れより又右の脇肋にて熱すると、少し許りにしてや

む。又右の肩にて熱し、又項筋にて熱し、又は頭中にて熱す。忽ち（たちまち）

熱し、忽やむ。夫れより次第につよくなり、今に至りて手足掌心、

常に熱ありてさめず。近日になりて左の脇にて熱する内に、又右の

肩にて熱し、未だ醒めざるに又頭中にも熱出づるようになり、

暫時も止むことなし。何れの處と云うことなく熱發すること火の如

く、其の内には、強き處もあり、又弱き處もあり、晝夜止むことな

し。心氣之れが爲めに疲れ、いかんともしがたし」と云う。余曰く

「汝が袂（たもと）をかか_レげて臂灣を視よ。必ず青筋あるべし」彼、乃ち之

を視て、（あちかじ） 果して尺澤より腕に至りて青筋數條あり。尺澤の處、

其色は深き膿色也。彼曰く、「是れ何の病ぞ」と。余曰く、「是れ「痧

病」と云うものにて、其の熱は「痧熱」なり。薬を用い、且つ刺し

て血を出ださば、乃ち愈ゆる也」と。彼曰く、「余數醫に乞いて之を

見しむるに、更に知るものなし。或いは「氣滯」とし、或いは「積

熱」とし、或いは「疝」とし、「勞瘵」とし、人能く之を弁ずること

なし。然るに、先生いまだ一診にも及ばず、青筋あることを知り、是れを「痧病」と名づくる。誠に明察とすべし。然るに世醫、之れを知らざるものはなんぞ」と。余曰く、「痧

【口語訳】

左の膝頭に一塊の火が燃えている様に熱を感じ、直ぐに止みました。その後、右の脇肋が熱くなったかと思うとすぐ止みます。次は、右の肩で熱くなり、次は首筋で熱くなり、次は頭中で熱くなります。あつという間に熱くなり、あつという間に治まります。それ以降、次第に症状はひどくなつてきて、今では、手のひら、足のうら、心(臓)の辺りに、いつも熱が有り、おさまりません。ここ最近では、左の脇が熱く、その間に右の肩でも熱くなり、それも冷めない内に頭の中も熱いといった状態で、少しの間も止むことがありません。(身体中)どこの場所ということなく、火の様な熱が出て、その中には、強く出るところも、弱く出るところも有りますが、昼も夜も止むことはありません。この為に、精神的にも疲れてしまい、どうしようありません。」と言う。私は、「君の袂(たもと)を掲げて、肘の屈曲しているところを見てみなさい。必ずや青筋があるでしょう。」と言った。そこで彼は腕を診た。あきらかに、尺沢より腕にかけて青筋が数本有った。尺沢のところの色は、深い膿色であった。彼は、「これは、何の病ですか。」と尋ねた。私は「これは、「痧病」という病で、今起きている熱は「痧熱」です。薬を使い、更に刺して血を出

せば、直ぐに治るでしょう。」と説明した。すると彼はこう言った。「私は、数人の医者に診察をお願いしましたが、誰も判りませんでした。ある医者は、「気滞」だと言い、ある医者は、「積熱」だと言い、ある医者は、「疝」だと言い、「劳瘵」だと言うなど、誰もこの病を見分けることは有りませんでした。それなのに先生は、まだ何も見ないうちに、青筋があると予見し、この病が「痧病」だと診断された。本当に優れた見識で御座います。しかし、世間の医者は、どうしてこれを知らないのでしょうか。」そこで私は次の様に説明した。

【原文】

【原文】

痧病⁴³⁶ハ古昔ヨリ有今ノ清朝ニテ専ラ唱ル病也世ノ君子書ニ耽ルモノハ論説ヲ好ンテ巢氏カ説ニマヨイ南方呉楚ノ間ニハカリ有ル毒虫ノ病トシ北方及我東方ニハナキ病ト云フ又術ニ巧ニメ世ニ行ル、モノハ東西奔走メ諸書ヲ研究スルニ志ナシ故ニ此病アリテモ知ラサルナリ余ハ常ニ難「難」治ノ病アルヲ憂イ和漢ノ書ニ廣ク目ヲサラシ理論ニ縛セラレズ方術ヲ探ル「年アリ偶右陶氏カ言トコロヲ見テ奇「奇」説ナルヲ疑イ試之「二十年其効アル」皆右陶氏カ云トコロノ如シ汝コレヲ怪ム「ナカレト云乃清凉至宝湯ヲ飲マシム

436 痧病。痧が繰り返される。「痧病」の誤り。

二三日ニメ熱ナク十カ二三ヲ減ス又臂灣ヲサシ血ヲ出シ又指頭ヲ刺ス夫ヨリ熱尽ク散シ服藥十余日ニメ病全愈⁴³⁷

痧脹晰義後編終

小島宗□⁴³⁸

【読み下し】

「痧病」は古昔より有り、今の清朝にて専ら唱うる病也。世の君子、書に耽るものは、論説を好んで巢氏⁴³⁹が説にまよい、南方吳楚の間にばかり有る毒蟲の病とし、北方及び我が東方にはなき病と云う。又術に巧みにして世に行わるるものは、東西奔走して諸書を研究するに志なし。故に此病ありても、知らざるなり。余は常に難治の病あることを憂い、和漢の書に廣く目をさらし、理論に縛せられず、

方術を探ること年あり。^(小島宗説) 偶 右陶氏が言うところを見て、奇説な

ることを疑い、之れを試みること二十年、其の效あること、皆右陶氏が云うところの如し。汝、これを怪しむことなかれ」と云い、乃

⁴³⁷ 最初の「目録」では、ここに「入方・幼々集成神火治・夏禹鑄臍風火法」が書かれる筈だったと思われる。

⁴³⁸ □は虫損、先に「楊阜山人児島翻冲夫撰」とあることから「小島宗□」は、「児島宗説」。

⁴³⁹ 巢氏。『巢氏諸病源候論』。

ち清凉至寶湯を飲みましむ。二三日にして熱なく、十が二三を減ず。

又臂灣をさし血を出し、又指頭を刺す。夫れより熱盡く散じ、

服藥十餘日にして病、全く愈ゆ。

痧脹晰義後編終

小島宗説

【口語訳】

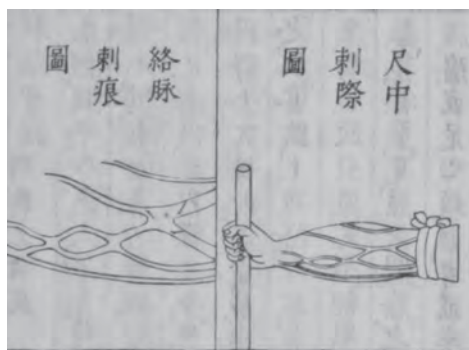
「痧病」は、古くから有り、今の清朝（中国）で、非常によく言われる病である。世の中の君子（偉い人）、書物ばかり読んでいる人は、論説を好み、巢氏（『諸病源候論』）の説にとらわれて、南方吳楚の間にのみいる毒虫の病だとして、北方や我が東方（日本）にはない病だと思っている。また技術が巧みで、世の中でもてはやされている者は東奔西走して、色々な医書を研究する志がない。だからこの病が有ることも知らない。私は常に難治の病があることを憂えて、広く和漢の医書の隅々まで目を通し、理論には拘らず、医术を探究することを長年続けている。偶然、右陶氏（『痧脹玉衡書』）の記述をみて、今までにない変わった説であることに疑問を持ち、これを試みて二十年になる。効果があるのは、すべて右陶氏の言う通りであった。君は、この治療法を怪しんではいけない。そう言って、清凉至寶湯を飲ませた。一、三日すると、熱が十の内二、三減った。そこで、肘関節屈曲面を刺して血を出し、さらに指先を刺した。（刺絡した。）これ以降、熱はすべて下がり、服藥十日余りで病は全快し

た。

痧脹晰義後編終

小島宗説

全訳註 卷末図



図・1 尺中刺際図・血絡刺痕図

『刺絡編』本文14丁オモテ。



図・3 集成神火図 銅人背面



図・2 集成神火図 銅人正面



図・4 夏禹鑄臍風火図

『痧脹晰義』解説

二〇一五年一〇月、長野仁氏⁴⁴⁰により、『痧脹晰義』が発見され、二〇一六年五月の日本医史学会学術大会で報告された。拝受した複写本によると、「楊阜山人著」、「楊阜山人児島翻冲夫撰」とあることより、児島宗説の著書であることが知れる。

⁴⁴⁰ 長野仁氏。森ノ宮医療大学大学院教授。本文中、以下「氏」を略す。

児島宗説とその子、雲琳については、『国書人名辞典』⁴⁴¹に次のように述べられている。

児島宗説（こじまそうせい）

医者 「生没」一七四〇年「元文五」生、一八一一年「文化八」八月二十九日没。七十二歳。墓、会津善竜寺。（名号）通称、宗説・冲夫。号、楊阜・惟翻・翻。法号、宗説院孝徳法光義範居士。

〔家系〕児島雲碩（元敬）の男。子、雲琳。〔経歴〕会津藩侍医頭。藩校日新館医学寮創設に当り、教科書を制定した。

〔著作〕奇方類選 古医方活套 古医方晰義「享和二刊」 傷寒論経伝晰義 診脈精要 腹診精微「享和年間」 医方訣 医林良材 華陀内照方讚註 産育口伝抄 痧脹晰義 千年眼 痘疹証治大成〔参考〕会津人物文献目録 福島県史 岩磐名家著述目録

児島雲琳（こじまうりん）

医者 「生没」生没年未詳。江戸時代後期の人。（名号）通称、雲琳。号、君玉。〔家系〕児島宗説の男。〔経歴〕会津藩侍医。父の口授を記し、『古医方晰義』を作成した。

⁴⁴¹ 市古貞次他、『国書人名辞典』、岩波書店、一八八五年、二五二頁。

〔著作〕古医方晰義「享和二刊」

〔参考〕会津人物文獻目録 福島県史

児島宗説は、日本漢方古方派の大家である吉益東洞（一七〇二年「元禄一五」——一七七三年「安永二」）、その子吉益南涯⁴⁴²（一七五〇年「寛永三」——一八一三年「文化一〇」）に比べると、その誕生は、東洞に遅れること三十二年、その没年は、南涯より二年はやい。

先の『国書人名辞典』に挙げられる宗説口授、雲琳作成の『古医方晰義』一八〇二（享和二）年刊は、京都大学附属図書館富士川文庫に所蔵され、その影印本は、長野の解説する『臨床漢方処方解説』⁵⁴⁴³に収められている。

以下、長野の報告⁴⁴⁴により、この書の発見の経過を追ってみる。

⁴⁴² 矢数芳英、「吉益南涯」、『漢方医人列伝』、協和企画、二〇一五年、八〇頁—八五頁。

⁴⁴³ オリエント臨床文献研究所監修、長野仁解説、『臨床漢方処方解説』五、オリエント出版社、一九九五年、頁三六七—四三〇頁。

⁴⁴⁴ 長野仁、「新出の刺絡専門書『疹脈断義』について」、『日本医史学雑誌』第六二卷第二号、日本医史学会、二〇一六年。

『日本医学史』に著録されながら、京大・慶大・日大の富士川文庫に現蔵されない医書は、版本の大尾に置かれた予告（医師の著作目録）や広告（書肆の蔵版目録）に列挙されていただけのものが多い。斯様な医書の書名は、伝存が絶望的なものにも拘わらず『国書総目録』に転載され、そのまま国文学研究資料館のデータベースにも反映されている。研究の過程で、こうした名存実亡の医書に行き当たると大いに氣勢を削がれるのだが、ごく稀に幻の医書が再び姿を現して思わず雀躍したくなることもある。

会津藩医の児島宗説（関・楊卓・沖夫）は、生前に『古医方晰義』（二七九四成／一八〇二刊）の刊行に漕ぎつけたが、巻末の「楊卓先生著述目録」には、①『古医方晰義』附『太陽病証治』出来・二卷、②同『陽明病以下証治』出来・三卷、③『傷寒論経伝晰義』未刻・十卷、④『痘疹証治大成』未刻・三卷、⑤『痧脹晰義』未刻・前後編、⑥『診脈精要』未刻・全、⑦『腹診精微』未刻・二卷、⑧『古医方活套』未刻・三卷、⑨『奇方類選』未刻・十卷、⑩『華佑内照方讚註』未刻・三卷、の一〇書がリストアップされている。このうち、①②が唯一開版された『古医方晰義』で、残る八書のうちの③⑥⑦⑧⑨の五書が『日本医

学史』に著録されている。富士川游の選定基準を知る由もないが、選外となった④⑤⑩のうちの一書、⑤『痧脹晰義』の手写本が古書市場に出現した(二〇一五年一〇月)。すなわち、該書は『国書総目録』未収本という書誌的価値に加え、孤本の刺絡⁴⁴⁵専門書⁴⁴⁶、という臨床的価値も有するため、ここに報告する。

長野の報告通り、『古医方晰義』の巻末⁴⁴⁷(図5)に、楊阜先生著述書目があり、十種の書目が挙げられている。

⁴⁴⁵ 刺絡。創医学会学術部、『漢方用語大辞典(第九版)』、燎原、二〇〇一年、六一二頁。「刺絡(しらく)、針または三稜針などを用いて血を出すこと。広義の瀉血療法である。その目的は、皮膚および末端部位における末梢血行障害を排除、または改善し、各種疾病に対する治癒的な機能を高めることにある。」

⁴⁴⁶ 刺絡専門書としては、荻野元凱『刺絡編』、垣本源鍼、垣本茂登輯、『熙載録(きさいろく)』三輪東朔説、伊藤大助筆記、『刺絡見聞録』等が知られる。ともにオリエント臨床文献研究所、『臨床実践鍼灸流儀書集成第一九冊』、オリエント出版社、二〇〇二年に影印収録。刺絡を述べる書は、他に菅沼周桂『鍼灸則』、山脇東門『東門隨筆』、中神琴溪『生々堂医譚』『生々堂雜記』『生々堂治驗』などが知られる。

⁴⁴⁷ 前出『臨床漢方処方解説』、五、四三〇頁。

また近代日本医史学

の鼻祖ともいえる富士

川游の、『日本医学史』

⁴⁴⁸ (一九〇四年刊行)

は、時代別に医書目録を

載せるが、この書籍の

「江戸時代の医学 医書

目録」に『古医方晰義』

享和二年、『古医方活套』

―、『奇方類選』―、『診脈精要』

五書が、児島冲夫の著作としてあげられている。『国書総目録』

には「『傷寒論経伝晰義』、『古医方活套』、『奇方類選』、『診脈

精要』、『腹診精微』」が所収される。『国書総目録』に所収され

ないが、『古医方晰義』は先に述べたように、京都大学富士川文庫

所蔵が確認されている。この書籍の影印本を作成した際の記憶が、

長野による今回の発見の一助となったようだ。今回発見の『痧脹晰

義』は、『国書総目録』には所収されていない。

⁴⁴⁸ 『古医方晰義』、『古医方活套』、『奇方類選』は、富士川游、『日本医学史』、眞理社、一九五二年、六四六頁、『診脈精要』、『腹診精微』は同書六八三頁。

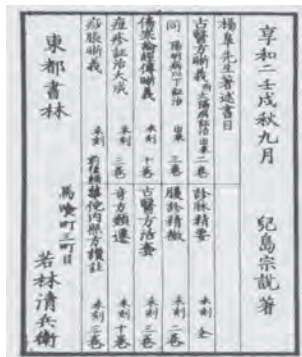


図 5、『古医方晰義』巻末頁

ついで、この『痧脹晰義』の内容の概要について、ふたたび長野の報告⁴⁴⁹をもとに解説してみたい。

『痧脹玉衡』（二七二三和刻）への疑念を發端に著された該書は、目録十引書…一葉、前編（目録には初編、編末には上編とあり）…一四葉半、後編…七葉、都合二二葉半からなる。この筆写本には序跋がないので成書年は定かでないが、前掲の目録から一八〇二年「享和二」以前なのは確実で、「右陶氏ガ言トコロヲ見テ奇説ナルヲ疑イ、試之コト二十年」とあるから、宗説は遅くとも一七八二年「天明二」には刺絡の試行を開始していたことになる。該書は、前編で『痧脹玉衡』を始めとする漢籍二八種と『刺絡編』を含む和書三種の関連事項を整理して批判的な分析を加え、後編で自己流を展開しつつ治験例を挙げてその精確さを立証してみせる、という構成となっている。刺絡専門書の現存書目数がそれほど多くない中で、出血過多のリスクを回避する立場で著され、しかも八症例を載せる該書の存在意義は大きい。『古医方晰義』には「予、常二謂ラク、眼

⁴⁴⁹ 前出、長野仁、「新出の刺絡専門書『痧脹晰義』について」。

目ヲ活開シテ病ヲ視ハ、万病一毒ト云ンモ佳ナリ。又、万病万毒ト云ンモ佳ナリ。モシ瞎眼ニシテ病ヲ視ハ一毒トスルモモ非ナリ。万毒トスルモ非ナリ。翁ノ一語、老婆親切ナリトイヘトモ、扁鵲・華佗カ黙シテ言ザルニハシカス」といった、吉益東洞への批評が散りばめられている。

『痧脹玉衡』⁴⁵⁰は、中国、清の医学者郭志遠^{かくしえん}⁴⁵¹が、一六七五年刊行した。当時痧脹などの疫病が流行したが、治療法が少なかった

⁴⁵⁰ 丹波元胤著、郭秀梅・岡田研吉校釋、『医籍考』、学苑出版社、二〇〇七年、五〇二頁。丹波元胤、『医籍考』、「郭氏志遠 痧脹玉衡書三卷 存。王庭序曰、憶昔癸未秋、余在燕都、其時疫病大作、患者胸腹稍滿、生白毛如羊、日死人數千、竟不知所名、有海昌明經李君、見之曰、此痧也。挑之以針、血出病隨手愈、於是城中卑而就醫者、亦日以千計、皆得愈而去、頃之證變而為嗽、嗽甚輕、不半日隨斃、時李君已出都、有知者曰、此亦痧也。用前法挑之、亦隨愈矣。余時目擊其事、歸而與知醫者言之、卒疑信交半、無何則吾鄉挑痧之法盛行矣。先是鄉人有糞穢感痧、例用錢物蘸油而刮、及此多用挑然行之大都婦人、以故為名醫者不道及、考諸醫書、古時未有論及、後人稍有青筋之說、仍略而不詳、因而求人之信者少、疑者益多、用藥之方、遂置之不論、人不幸犯是證、無得全者、噫、是可憫也。友人上陶郭君明理讀書、旁搜醫學、見近之患痧者日益衆、而治痧者不聞、乃精心殫思、推原於小兒痧疹之理、兼求之古方、多有不言痧、

ため、小児科の痧疹⁴⁵²治病の理論をもとに、先人の経験を集集したものである。後に一卷を補足、計四巻とし、広く流布したとされる。

「痧脹」については、『漢方用語大辞典（第九版）』に以下のよう
に示される。

「痧脹」は、病証名である。「痧」⁴⁵³、「痧氣」ともいい、
夏秋に風寒暑湿の気あるいは疫気・穢濁の邪を感受して身体寒

而見痧之意者、且驗之、諸所救療無或爽、因以自信、遂發願廣之天下後世、為百千萬人命之救、著有玉衡一書、上陶之心切矣。上陶之功大矣。上陶嘗言痧本無定脈。凡脈與所患之證、不相應者、即為痧之脈、痧亦無定證、或感風感食、感勞感痰、而以本證治之无效者、皆為痧之證、為立之方使知遵也。為記之驗、使知信也。後以藥性終之、使知用之有宜不宣、不與他證衡也。上陶治痧之法、於是書乎全、而世人將讀其書以治痧、兼以治上陶之所不及治、上陶之心於是大快、雖不欲居其功、功又安歸哉。余既見痧之事、又信上陶之說、敢為之言、雖然、不足為愚者道也。康熙十四年乙卯重陽日。」

⁴⁵¹ 郭志遠^{かくしずい}。一七世紀中葉、清の医学者。字は右陶。樞李（浙江省嘉興市の西南）の人。

⁴⁵² 痧疹。麻疹のことか。『漢方用語大辞典』「痧子」に、「麻疹に同じ。」とある。

熱、頭、胸、腹が悶え脹り痛み、意識障害、喉痛あるいは吐瀉、腰部の圧迫感、指甲の青黒色、あるいは手足の強直、麻木などをあらわすとされ、「痧氣」により胃腸が閉塞されて、経絡が壅塞されることから「痧脹」と名づけられた。「痧毒」が気分にあるものはこれを刮⁴⁵⁴し、血分にあるものはこれを刺して瀉血（刺絡⁴⁵⁵）⁴⁵⁶する。皮膚にあるものはこれを焯⁴⁵⁷し、

⁴⁵³ 痧。『漢語大詞典』、一一四七七頁には、「一、病名。中医指霍亂、中暑等急性病。二、痧子 麻疹的俗稱。三、方言。指瘧疾。」とある。『漢方用語大辞典』に「①病証名。痧脹、痧氣ともいう。『世医得効方』参照。②証名。皮膚上に、粟米大で中に清水をもつ赤いできもの。斑疹。『臨床指南医案』「痧は、疹の通称にして、頭ある粒で粟の如し。」」

⁴⁵⁴ 刮。刮痧法。

⁴⁵⁵ 刺絡。針または三稜針等を用いて血を出すこと。

⁴⁵⁶ 瀉血とあるが刺絡の方が良い。

⁴⁵⁷ 焯。火で焼くこと。焯針は火鍼、焼き鍼のこと。

「痧毒」が臟腑に入るものはこれを蕩滌攻逐するによい。痧に補法はなく、総じて開泄攻邪の法を主とする。『痧脹玉衡』⁴⁵⁸

「痧脹」は、『痧脹玉衡』が、初出と思われる。いわゆる、温疫病による症状であり、營氣營血弁証に拠って、弁証施治されたと考え、て良いように思われる。

また児島宗説『痧脹晰義』について、長野は「『痧脹玉衡』(一七二三和刻)への疑念を発端に著された該書」としているが、『痧脹晰義』中に「余は常に難治の病あることを憂い、和漢の書に広く目をさらし、理論に縛せられず、方術を探ること年あり。偶（たまたま）右陶氏が言うところを見て、奇説なることを疑い、之れを、試みると二十年、其の効あること、皆右陶氏が云うところの如し。汝、これを怪しむことなかれ。」⁴⁵⁹と述べられていることから、児島宗

説が『痧脹玉衡』に触発され、臨床を重ねた上で書かれた医書のように思われる。⁴⁶⁰

そして成書年については、『古医方晰義』が、一八〇二(享和二年)刊であり、その巻末の書目に載ることから、それ以前に書かれた草稿本と思われる。

また引書は、巻首に郭志遠の『痧脹玉衡』をあげ、続いて『春秋左氏伝』、『毛詩』、『玄中記』、『洪範五行傳』、『太平広記』の医書でない漢籍五種、さらに『内経』⁴⁶¹、『千金方』⁴⁶²、『病源候論』⁴⁶³、『肘后方』⁴⁶⁴、『医説』、『得效方』⁴⁶⁵、『万病回春』、『医学正伝』、『赤水玄珠』、『証治準繩』、『類経』、『十四経發揮』、『医学入門』、『医学綱目』、『医方考』、『本草綱目』、『外科正宗』、『医宗金鑑』、『痘科鍵』、『幼々集成』などの漢籍医学書二十種、

⁴⁶⁰ 『痧脹玉衡』の影響を受けたものとして、山脇東門、中神琴溪なども同様である。

⁴⁶¹ 『内経』は、『黄帝内経素問』及び『黄帝内経靈枢』。

⁴⁶² 『千金方』は、『備急千金方』

⁴⁶³ 『病源候論』は、『諸病源候論』

⁴⁶⁴ 『肘后方』は、又の名、『肘後備急方』、『肘后救卒方』

⁴⁶⁵ 『得效方』は、『世医得效方』

⁴⁵⁸ 創医学会学術部、『漢方用語大辞典(第九版)』、燎原、二〇〇一年、四〇〇頁。「痧脹」。

⁴⁵⁹ 『痧脹晰義』本紙二二丁ウラ。

最後に『解体新書』『刺絡編』『療治茶談』の和書医学書三種を挙げる。

すなわち引書に挙げられる医学関係の書は、漢籍二十一種、和書三種の計二十四種である。また漢籍としては、医学関係の書二十一種、それ以外の書五種の計二十六種である。⁴⁶⁶多くの引書を用いることにより「痧脹」という病とその治療に対し精細に検討しようという態度が見て取れる。

江戸期に於いて、刺絡の専門和書はいくつかある。そのなかでもこの『痧脹晰義』は、典拠をあげ病論及び治療について分析していること、「後編」の臨床例においては刺絡法と薬物の併用例を挙げることで、さらに刺絡する部位を他の医書を参考に検討し、また少ない刺激で治療を試みようとしているなど他の書とは異なる点がみられ、興味深い書である。

おわりに

二〇一七年秋に、長野仁先生所蔵の『痧病新書』の複写を拝受した。『痧病新書』はここで取り上げた『痧脹晰義』を著した児島宗説の孫、加賀山翼の著である。その内容は『痧脹晰義』を踏まえ⁴⁶⁶、長野のいう「『痧脹玉衡』を始めとする漢籍二八種」と異なる。本文中に『黄帝内经素問』、『黄帝内经灵枢』、『济急方』と記述されているのを加算していると思われる。

展させたものとなっている。今後この『痧病新書』の翻字全訳註を行ったうえで、これら二書の比較を検討してみたいと考えている。

貴重な資料である『痧脹晰義』『痧病新書』の複写を提供し、私が翻字全訳註することを快諾くださった長野仁先生と、ご指導いただいた大平桂一先生、大形徹先生に感謝したい。

参考文献

「一次資料」

- 王肯堂、『證治準繩』、上海科学技術出版、一九五九年。
 大塚敬節、矢数道明編集、『吉益東洞』、漢方医学書集成一〇、名著出版、一九七九年。
 大塚敬節、矢数道明編集、『吉益東洞』、漢方医学書集成一一、名著出版、一九七九年。
 大塚敬節、矢数道明編集、『吉益東洞』、漢方医学書集成一二、名著出版、一九七九年。
 荻野元凱、『刺絡編』、林伊兵衛、一七七一年（明和人）、早稲田大学図書館所蔵。
 オリエント臨床文献研究所監修、長野仁解説、『臨床漢方処方解説五』、オリエント出版社、一九九五年。
 オリエント臨床文献研究所、『臨床実践鍼灸流儀書集成 第一九冊』、オリエント出版社、二〇〇二年。
 郭志達、『痧脹玉衡書』、尚書堂、一七二三年（享保八）序、早稲田

図書館。

滑寿、『十四経発揮』、不明年、早稲田図書館蔵。

葛洪、『肘後備急方』、修敬堂刻本、一七九四年（影印）、広東科技出版社、二〇一二年。

葛洪撰、古求知（等）校注、『肘後備急方校注』、中医古籍出版社、二〇一五年。

虞搏、『医学正伝』、和刻、一六三四年〔寛永一〕、早稲田大学図書館所蔵。

児島宗説、『痧脹晰義』、長野仁所蔵。

孔穎達、『毛詩正義』、十三経注疏、芸文印書館、一九九三年。

朱巽、『痘科鍵二卷増麻疹』、須原屋茂兵衛、戸倉屋喜兵衛、一七七七年（安永六）。

朱仲撰、『相貝経』、叢書集成初編、中華書局、一九九一年。

杉田玄白、『解体新書』、東武書林、一七七四年（安永三）、内藤記念くすり博物館所蔵。

医学館、『大徳重校聖濟總録二〇〇巻』、医学館木活字印、一八一六年（文化一三）、国立国会図書館デジタルコレクション。

孫一奎著、周琦校注、『赤水玄珠』、中国医薬科技出版社、二〇一一年。

孫思邈、『備急千金要方』、中国医学大成続集一一、上海科学技术出版社、二〇〇〇年。

丹波元胤著、郭秀梅・岡田研吉校釋、『医籍考』、学苑出版社、二〇〇七年。

張介賓、『張氏類経』、新文豊出版、一九七六年。

張介賓、『類経図翼 附類経附翼』、新文豊出版、一九七六年。

張杲、俞弁著、曹瑛、楊健校注、『医説・続医説』、中医古籍出版社、二〇一三年。

陳復正、『幼幼集成』、中国医学大成七、中国中医薬出版社、一九九七年。

日本内経学会、『素問』、（王冰註『重広補注黄帝内経素問』、日本内経学会、二〇〇四年。

日本漢方協会学術部編、『傷寒雜病論『傷寒論』『金匱要略』（三訂版）』、（底本、趙開美本）、東洋学術出版社、二〇〇〇年。

湯本求真、『皇漢医学』、燎原書店、一九八九年。

李時珍、『本草綱目』、三版、国立中国医薬研究所、一九八八年。

〔参考文献〕

天野謙吉、『会津高田町乃医師たち』、天野謙吉、一九六九年。

市古貞次他、『国書人名辞典』、岩波書店、一八八五年。

井村裕夫編集主幹、『わかりやすい内科学』、文光堂、二〇〇八年。

王瑞祥主編、『中国古医籍書目提要』、中医古籍出版社、二〇〇九年。

岡西爲人著、郭秀梅、岡田研吉整理、『宋以前医籍考』、学苑出版社、二〇一〇年。

家臣人名事典編纂委員会編、『三百藩家臣人名事典 第二巻』、新人物往来社、一九八八年。

顔正華主編、『中薬学（第二版）』、人民衛生出版社、二〇一五年。

- 邢玉瑞主編、『中医經典詞典』、人民衛生出版社、二〇一六年。
 国史大辞典編集委員会、『国史大辞典』、吉川弘文館、一九七九・一九七九年。
 小曾戸洋、『日本漢方典籍辞典』、大修館書店、一九九九年。
 小曾戸洋監修、『漢方医人列伝』、協和企画、二〇一五年。
 吳文清、『温病大成四』、福建科学技术出版社、二〇〇八年。
 小曾戸洋、『新版漢方の歴史—中国・日本の伝統医学』、大修館書店、二〇一四年。
 酒井シツ訳、杉田玄白、『解体新書…全現代語訳』、講談社学術文庫、講談社、一九九八年。
 左合昌美、『よくわかる黄帝内経の基本としくみ』、秀和システム、二〇〇八年。
 創医学会学術部、『漢方用語大辞典（第九版）』、燎原、二〇〇一年。
 商務印書館・小学館 共同編集、『中日辞典』、小学館、一九九二年
 宗田一、『図説日本医療文化史』、思文閣出版、一九八九年。
 宋鷲冰編、柴崎瑛子訳、『中医病因病機学』、東洋学術出版社、一九九八年。
 丹波元胤著、郭秀梅、岡田研吉校釋、『医籍考』、学苑出版社、二〇〇七年。
 館野正美、『中国医学と日本漢方 医学思想の立場から』、岩波書店、二〇一四年。
 中山医学院編、神戸中医学研究会訳編、『漢薬の臨床応用』、医菌薬出版、一九七九年。
- 寺澤捷年、『症例から学ぶ和漢診療学（第二版）』、医学書院、一九九八年。
 丁光迪主編、『諸病源候論校注』、人民衛生出版社、一九九一年。
 南京中医学院編、石田秀美監訳、『現代語訳 黄帝内経素問、中巻』、東洋学術出版社、一九九二年。
 日本刺絡学会監訳、譚德福 他著、『中国刺絡鍼法』、東洋学術出版社、一九九九年。
 野口信一編纂、『会津人物文獻目録』、歴史春秋社、一九八〇年。
 富士川游、『日本医学史』、眞理社、一九五二年。
 松岡榮志監修、関久美子 他、『中国医学史レファレンス辞典』、白帝社、二〇一一年。
 宮沢正順、『素問・靈枢』、明徳出版社、一九九四年。
 森秀太郎編集、『鍼灸医学事典』、医道の日本社、一九八五年。
 矢数有道、『臨床漢方医学総論』、春陽堂書店、一九三七年。
 李経緯等主編、『簡明中医辞典（修訂本）』、中国中医薬出版、二〇〇一年。
 李経緯等主編、『中医大辞典（第二版）』、人民衛生出版社、二〇〇四年。
- 「参考論文」
 友部和弘、『痧脹玉衡』所載治験例の分析、『日本医史学雑誌』、四五二、日本医史学会、一九九九年、二六二頁—二六三頁。
 友部和弘、真柳誠、『啓迪集』の瀉血療法、『日本医史学雑誌』、四

- 一、日本医史学会、一九九四年、七八頁―七九頁。
友部和弘、真柳誠、「江戸中期の瀉血療法」、『日本医史学雑誌』、四
一二、日本医史学会、一九九五年、一九六頁―一九七頁。
友部和弘、真柳誠、「中国一六世紀以前の瀉血療法」、『日本医史学雜
誌』、四三二、日本医史学会、一九九六年、一八四頁―一八五頁。
友部和弘、「中神琴溪の刺絡」、『日本医史学雑誌』、四六三、日本医
史学会、二〇〇〇年、三八六頁―三八七頁。
友部和弘、「李東垣の瀉血療法」、『日本医史学雑誌』、四四二、日本
医史学会、一九九八年、二二〇頁―二二二頁。
友部和弘・石野尚吾、「中神琴溪と郭志遠の刺絡」、『日本東洋医学雜
誌』、五二六、日本東洋医学学会、二〇〇二年、一八七頁。
友田康雄、「會津藩醫加賀山翼先生竝に其著書」、『日本医史学雑誌』、
五卷一號、日本医史学会、一九四一年、四四九頁―四五二頁。
花輪壽彦、「吉益東洞」、『漢方医人列伝』、協和企画、二〇一五年、
七五頁―七九頁。
長野仁・高岡裕、「小兒鍼の起源について―小兒鍼師の誕生とその歴
史的背景」、『日本医史学雑誌』、五六卷三號、日本医史学会、二〇一
〇年、三八七頁―四一四頁。
長野仁、「新出の刺絡専門書『痧脹晰義』について」、『日本醫史學雜
誌』、第六二卷第二號、日本医史学会、二〇一六年、一五一頁。
丸山敏秋、「江戸時代における伝統医学の教育 官立医学校の事例か
ら」、『東洋医学論集矢数道明先生退任記念』、北里研究所附属東洋医
学総合研究所、一九八六年、一三〇頁―二四八頁。
矢数芳英、「吉益南涯」、『漢方医人列伝』、協和企画、二〇一五年、
八〇頁―八五頁。
安井廣迪、「日本漢方諸学派の流れ」、『日本東洋医学雑誌』、Vol.五八
No.二、日本東洋医学学会、二〇〇七年、一七〇頁―二〇二頁。
山崎佐、「會津藩洋学發達史」、『会津史談会誌』、三五号、会津史談
会、一九八九年、一頁―七頁。